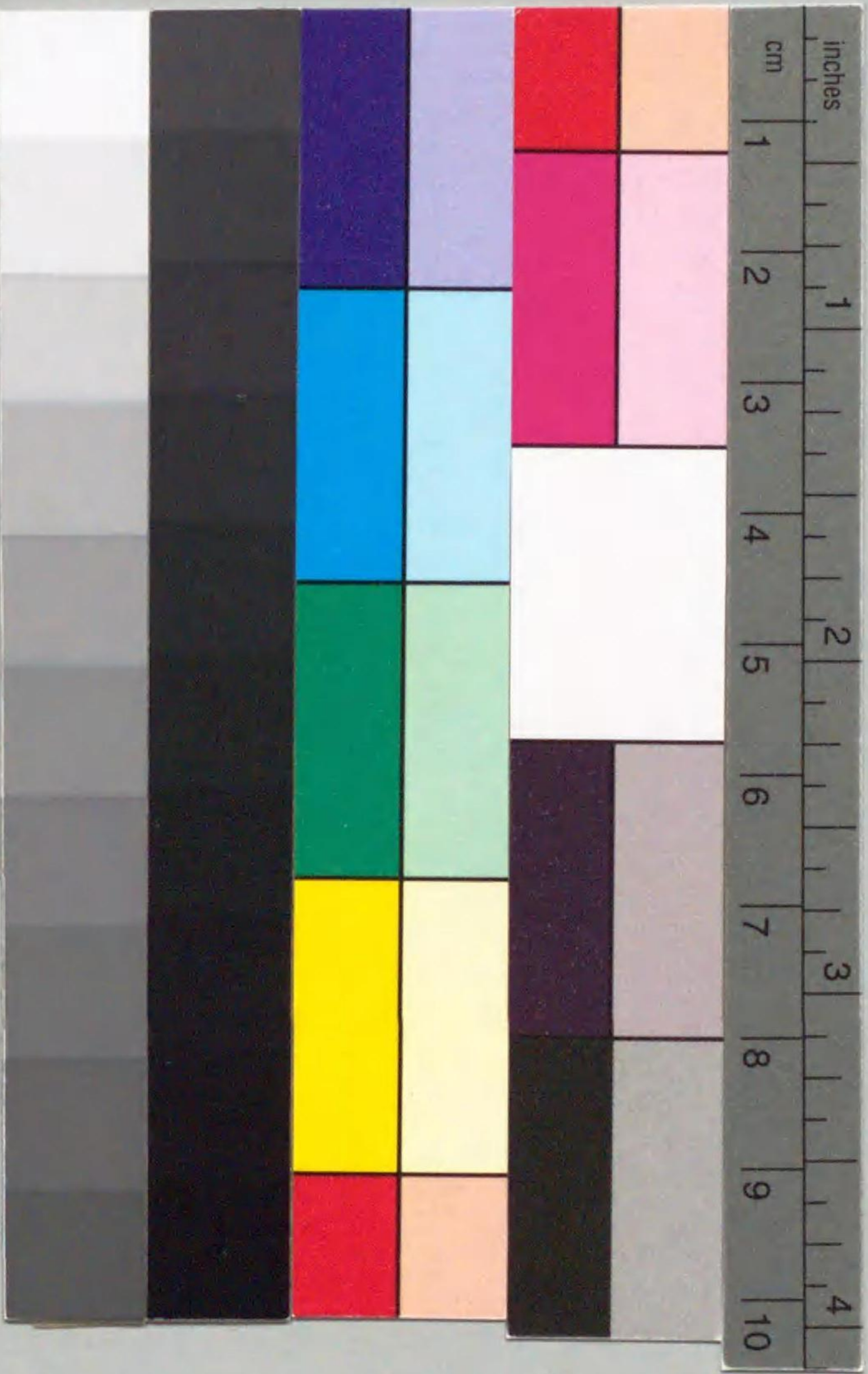
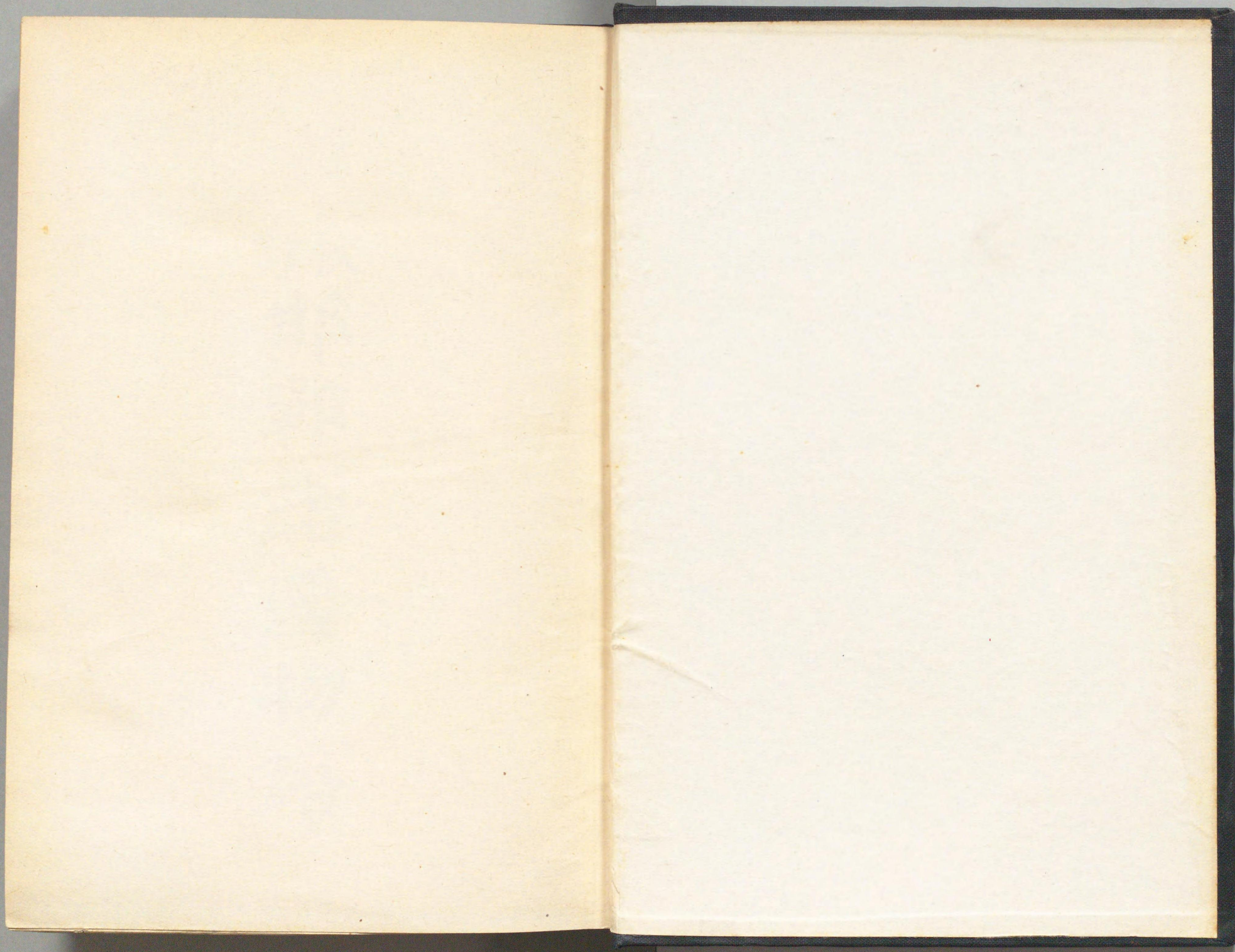


913.58
R99k
H



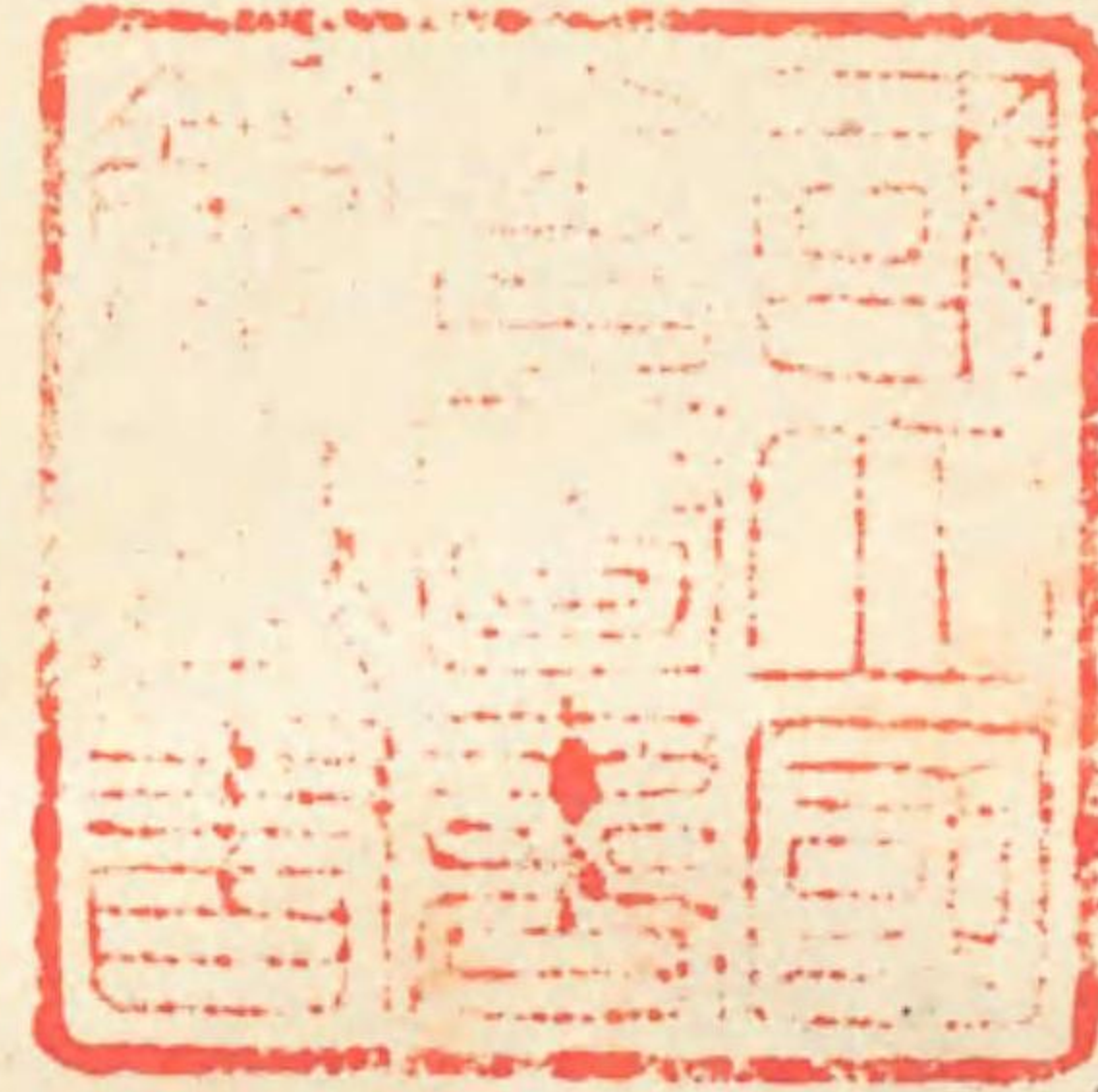
00285340





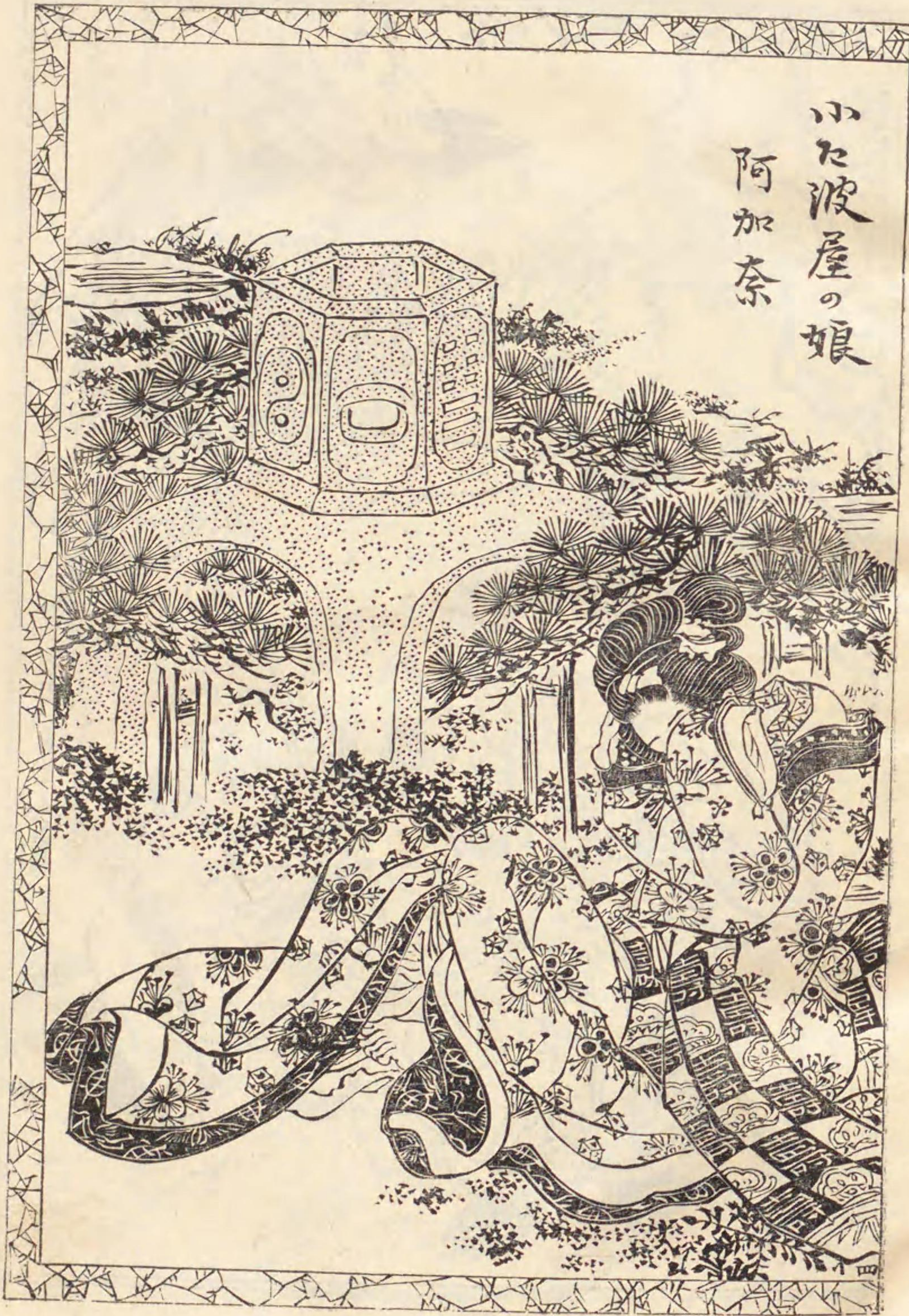
訂校
邯鄲諸國物語

913.58R99RH



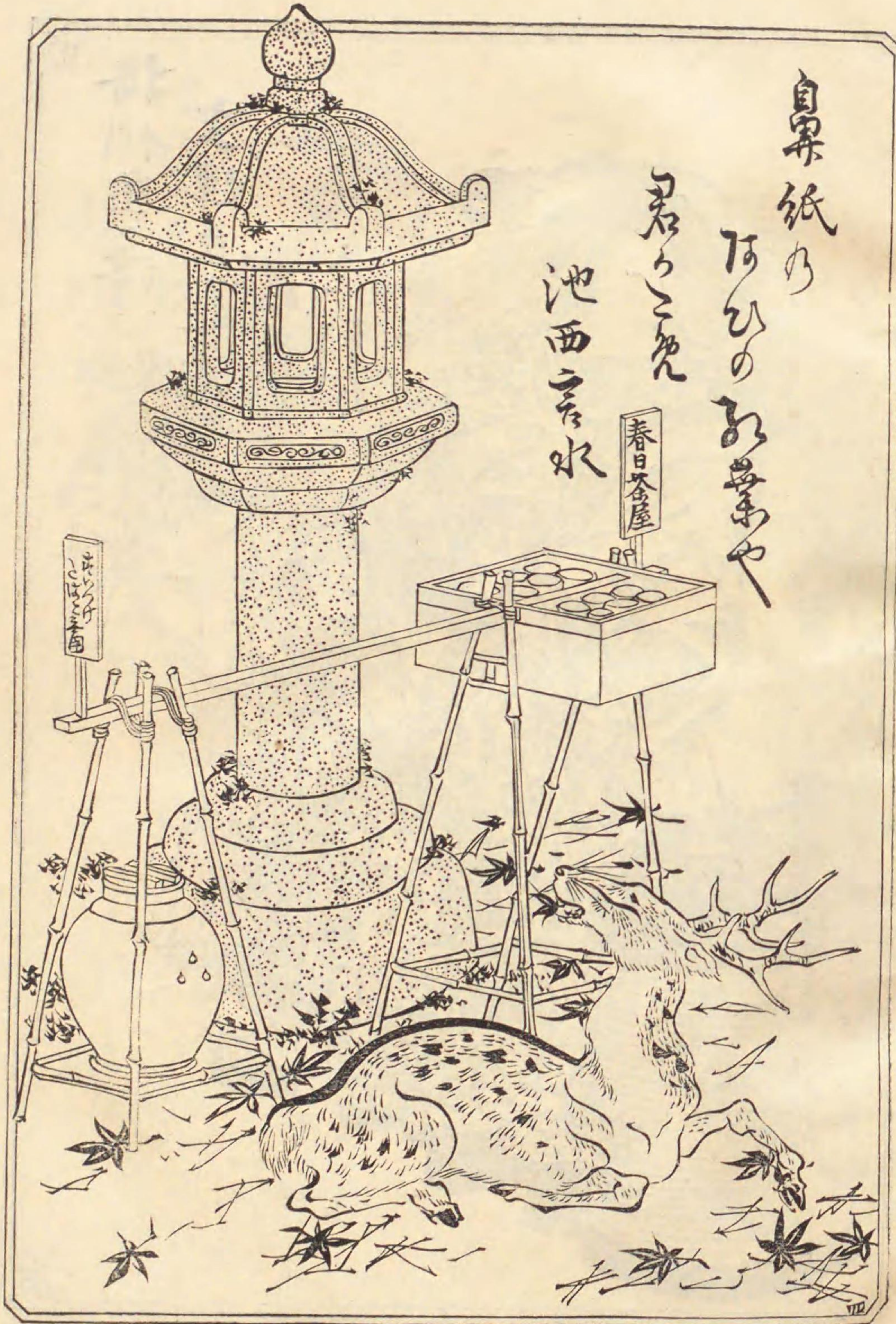
285340

小波屋の娘
阿加奈



近江の國鏡の宿
小波屋の傀儡女
阿只







浮嶋の尾従

篠野権三



播州室の津

空蟬屋の遊君

疾梨

禿
こまも
ろくろ







處女菊兒



天
津
幸
助



具也
この
世を
うみ
また
み



難波津
三郎の
浦に

石倉尉之助季女
櫻木

長柄長者彌子
濱名十三郎





尾崎
 新參
 石川
 政勝
 奥守
 城主
 洞九郎



佐々木
 現之助
 盛春

訂校 邯鄲諸國物語總目次

○ 近江の卷	一頁
○ 出羽の卷	四五
○ 大和の卷	五七
○ 播磨の卷	一四三
○ 伊勢の卷	二三九
○ 遠江の卷	二八七
○ 攝津の卷	三四三
附錄 續種彦傑作集	
○ 詭染逢山鹿子	五〇三



- 水木舞扇猫骨……………六七三
- 忠孝兩岸一覽……………七〇七
- 柳糸花組交……………七四一
- 南色梅早咲……………七八一
- 三 蟲 拇 戰……………八一
- 忠孝義理物語……………八四五
- 合三國小女郎狐……………八七九
- 淺間嶽煙之姿繪……………九一一
- 堀川歌女猿曳……………九四三
- 操競三人女……………九七六

邯鄲諸國物語目次終 目次

邯鄲諸國物語

近江の巻 前帙

是繪冊子は西鶴諸國ばなし、其磧諸國物語等に
 らひて、作りいでしなれば、種彦諸國物語と、よびな
 さんと思ひしが、愚名を標題に顯さんも徑延く、取
 どころ無實無、夢物語といふ意にて、邯鄲の二字に
 替つ、又手説いづる近江の巻は、狂賊筆策を吹の話
 にて、耳食録に事ふり似れど、更にそれを翻へし、善
 人にあやまちなく、懸想どちは夫婦となり、最愛た

き草紙にて、是に出羽の巻を附、前帙後帙八冊にて、
二箇國の壽全く終れり、

天保五年甲午開端

柳亭種彦著

郡鄂諸國物語

近江の巻前帙

柳亭種彦

『鏡山かみやまの立寄たちよりて見てゆかん。あふみのや鏡かみの山やまを立たたれば』など。古ふるき歌うたに數多あまた見みへたる鏡山かみやまは。近江あまみの國くに蒲生はらへ郡しほなり。麓ふもとの道みちをも鏡かみといへり。今いまは守山もりやま武佐ぶさのうまやいと賑にぎしくて。其間そのあひだに挾はさまれたる鏡かみは。面影おもかげ計はかりなれども。昔むかしは此宿街道このしゆくかいどう一の繁華はんかにて。既すでに牛若丸うしわかまるが羽道はつどうを討うちたるも。此宿このやまりにてありしこと。法眼はうげん物語ものがたりに見みへたり。偕ともても文龜ぶんき永正えいせいの頃ころかどよ。此鏡このかみの宿やどに小々ささ波屋なみや鹿右衛門しかゑもんと云いふ旅籠屋はたごやあり。年としの頃ころは四十計はかり。其妻そのつまをお山やまといひ。三十路みそじの上うへを五六いっくむつつ。はや越こなから色香いろか失うせず。萎しめる花はなと云いふにもあらず。唯一たゞ一人ひとりの娘むすめを持もてり。今年ことし既に十じゅう七歳さい。雪ゆきの肌柳はたやなぎの腰こし。彼かれが面貌おもてに競くらては。櫻さくらの花はなも花はなならず。去されば夫婦ふうふの寵愛ちゆうあいは。手ての内うちの玉たまの如ごとく。未だ定さだまる媚むてがぬもあらざれば。遠近えんちんの少年せうねん達たち。縁えんを求め傳手つてを尋たづね。文ふみを送おくるも多おほかる可べし。彼かれの鹿右衛門しかゑもんは先祖せんぞより。田畠でんばた多く持傳もちつたへ。いと／＼豊ゆたかの暮くれにて。あぢやれどか呼よぶ人留女ひとどめをんなの。眉目まゆめ善よきを數多あまた抱かへ。家いへも廣ひろく住すましければ。往來ゆきの旅人りょじんも其その名なを尋たづね。必

らず宿泊を求め。愈繁昌したりけり。又此家に粘助とて。年まだ若き手代のあり。彼は漸く去年の春。抱へし者なから。生だち實明にて。些少も主人の物を掠めず。朝夕氣輕に立廻り。客の機嫌を善く取りつ。兎に角家に得分の。付く様に計らひければ。鹿右衛門は善き者を。抱へたりと喜びつ。万事を彼に打委せ。心長閑に暮し、が。さいつ頃より娘のお加奈。心地悪し、とて一室に籠り。物見遊山と進れども。氣六ヶしく出て出もやらず。打臥てのみあるにもあらぬど。更に心の浮立ぬを。見るのみ夫婦は胸苦く。おじやれ女の其中に。お只と云て最さがしく娘阿加奈の氣に入りて。年も同じ程なるを。遊相手に付け置きつ。藥よ針よともて騒ぎ。鹿右衛門は守山なる。帆柱の觀世音へ。七日詣をなしけるが。其利益にや娘の病氣。少し怠る様なるを。鹿右衛門深く喜び。七日の日數は果たれども。今日も御寺へ詣んと。忙げに立出ければ早く歸らせ給とて。女房お山は外門迄送り。立歸りて娘の室へ入らんとせしか。何日になき笑聲して。何やらんお只が伽の物語。母が様子を尋なば。却て娘の氣詰と。心察して拔足に。常の居間へぞ歸ける。既に先にも記し如く。お只は利發の生故。阿加奈が機嫌を竊ひて。其様に御髪も亂れ。お中刺が進て居ると。御氣分が一倍悪い。御熱はさつぱり無い程に。御湯を召ても大事ないと。御醫者様も御仰ります。さア、梳て上ませうと。浮世話に紛され。癖が付いて結い悪くからう。それならさつと結んでなりと。此のまア頭垢の出來た事は。額も襟も生毛

たらけ。久振で鏡を見たら。私の顔ではない様など。につこり笑ふをよい機會と。お只は聲を打ち潜め。貴女の此度の御病氣の。元を知つたは私計り。其の様に明ても暮ても。くよく御思召ましては。どんと全快う様はない。旦那様は帆柱の。觀音様へ御詣りなされ。御神さまは餘念もなく。本を讀で御居でなさる。丁度善ひ首尾粘助殿を。此へ呼んで委細を打明け。相談なされて御らうとせと。進められて顔打ち赤め。なんぼあれが才覺でも。此事計りは私のまに。いへく左様御仰ります。諺に云ふ膝とも談合。殊には万事如才のない。あの人を含み込だら。どうか仕様も御座りませう。と云ひつゝ廊下を差覗き。幸ひ帳場に欠伸して。もし粘助さん。おかなさん御用がある。一寸と此處へ打招けば。はいと答へて摺足なし。一々郎冠者を召させられしは。都の歌舞伎物語。偕ては東の流行歌。左様の儀にこそ候はめと。鹿爪らしく座になをれば。あのまお真面目な顔わいな。さア彼の事をおかな様。さう御仰つて御覽じませと。進められてももじく。言ひ出し兼ねるを焦躁がり。お只がすつとさし寄て「左様なら私が。かい摘んで話ませう。粘助さんは知るか知らぬか。八幡町に。名高い竹花屋の若旦那。鯉七さんと言ふ御方。近年武佐へも店を出して。そこへばかり來てなるが。年の程は二十一。色白で凜とした。目元で一寸見られると。どんな女子も消て行く。女郎に適藥娘に禁物。毒程が口當りの。善ひ者かして其のお人と。おかな様が去年の秋。八幡祭禮の夜宮の

棧敷。屏風仕切も鬱陶しいと。取てしまふて献つ酬へつ。四方の人は酔ひ倒れ。ごろ／＼と轉
げた後は。如何なつたのか手水に行て。私も知らぬがそれから度々。花見や雪見御寺詣り。な
んのかのどて女子衆や。男衆が取り持て。逢せましても旦那様は。未だ子供の氣で御座んす故
御心は附かねども。御女主さんがあれが相振。合點が行かぬと目を附けて。仲立をした女供は
其れとなしに暇を遣り。其からはおかな様の。處へ御出なさるにも。己れも行こうと御自分も
保養の積りで何時でも番人。御静臥る其時御夫婦の。中へ挟み油斷が無いで。遇ふ瀬も絶へ其
からの病ひ。其りや善ひ事ではなけれども。互に女なし夫なし。不義とやらでも御座んすまい
如何かして上げましたら。御病氣もつい全快うと。聞て粘助打ち笑ひ。「其は何より容易い事。
鯉七様といふ御方は。近付ではなけれども。竹花屋は誰知らぬ。者もない大身代。御年頃も御
似合ひなり。婿君殿に貰ひ受け。額に寄する小々波や。共白髪まで變らぬ御夫婦。何故其事を
打ち明けてと。言はれておかなは打ち萎れ。「鯉七様も御一人子。御兄弟とてもなし。忍び逢ふ
た其時に。其方の親さへ得心したら。表向から言ひ入れて。明日にでも結納を。送らうと言ふ
てなれど。私も外へは行かれぬ身のうへ。「ホイこいつはちつと六ヶ敷い。して旦那様や御女主
様は。鯉七様を御存じで。「いへ／＼ほんの御女主様が。怪しい素風と推量計り。鯉七様を知て
居るのは彼の祭の時御供をした。私計りで御座んすと。お只が答に粘助は。につこり笑て小膝

を打ち。そんなら今夕久し振で。鯉七様に御逢ひなされ。談合なされて御覽じませ。又善ひ事
も御座りましよう。貴女の御髪を御只殿と。ちつとも違はぬ様に結せ。日が暮れたらばかう／＼
と。二人りの耳へ口を寄せ。何をやら私語けば。おかなは喫驚興さめ顔。「御目に掛るは娛しい
けれど。如何してまアそんな事が。「はてさ其角か發句にも。たけ狩りや花の先なる歌がるた。
手前の松髪は目に見へぬと。毛唐人も申とやら。近くば氣附く氣が附かぬ。斯く申す粘助も。
かゝる筋には昔より。事馴れて候へば。ちつとも梓りは致しませぬ。我身の懺悔物語。事長け
れど聞こし召せ。抑も拙者は野崎村。久作の息子にて。久松と言しもの。瓦屋橋の油屋へ。奉
公に出たところ。娘のお染にふと馴染め。在所では許嫁の。お光めが氣が違ふ。是では行かぬ
と心を定め。高野山に逃げ昇り。桑之助と名を代へて。小姓を勤めて居る内に。神谷の宿のお
梅といふ。娘が又も昇り塞め。死で呉れろに持てあぐみ。其よりそこを隨得寺。もう寺勤めも
いやになり。前髪を取たなら。斯る難義もあるまじと。元服なして茂兵衛と名乗り。京へ出で
大きな主人の。處へ手代に住み込み。是れで樂じやと思ひの外。下女のお玉が彼是と。言ふ計
りかけ内の女房。おさんと又も浮名か立ち。漸々其處を立退き。此方に隠れて居りますにど。
につこりともせず眞面目顔。お只はつく／＼打守り。「祭文や淨瑠璃で。噂を聞たは粘助さん。
御前の事で御座んしたか。もう十年も過ぎたなら。とら石町の右側へ。おびやの店を出しやし

やんせ。私かお絹と名を代へて。お前の女房になつて上げ様。しかし滅多にお半さんと。伊勢
參宮に行かせはせぬ。さア行なら行て見たがよいと。胸倉取て突廻され。あゝそう上手が出ら
れては。長右衛門閉口。どうやらこうやらおかな様の。御笑顔がやつと出た。永い事はい
りませぬ。鯉七様へ一寸一筆。委細の譯は私がどつくり御話申升。お湯も丁度沸きました。
汚ぬ内に召まじと。忙し立て、おかなの文。取るより早く尻はしより。武佐迄是より一里半。
息を切て大星力彌。是で吾主の大御役。どれ行て参りませうと。武佐の宿へぞ馳行ける。其日
も既に暮にけり。女房お山はお只を呼び。今日はおかなが珍しう。湯を使ふた様子ぢやが。又
寒氣でもしはせぬか。よう氣を付てと言ひければ。い。御案じなされますな。御髪も櫛へ
て上げましたれば。どんと病氣は忘れた様など。針箱出して人形の。衣物を縫て何日にない。
御機嫌のよい御顔色と。答ふに後に粘助が。お只さん。私が引て來た客人共は。たつた一
人なれど。大和廻りを伊勢へ掛け。一向急がぬ遊山旅。空合も六ヶ敷そうな。雨になつたら晴
る迄。茲の内に泊て居う。藝子を呼でとあつた故。四人座敷へ出して置た。一人夜伽が御座り
ませぬと。夜中か御寒ふ御座りませうと。進めて見ても客人が。年若だけに力身があつて。臥
るには一人が樂でよいと。何んだか味に煮へきらず。外の者では治らぬ。お前どうぞ出てくん
な。餘程生氣な男だぜと。背中叩けばつんとして。何に私よりまだ外にと。言ふをお山がひつ

取て。其にはほんにお只が宜からう。此頃おかなの看病で。久しく客を取らせぬ故。乙甲でも
あらうけれど。粘助とも私も頼み。今お茶代を頂戴た。御禮に菓子を持って行く。其方も一所
に出て給もと。進められてあたふたと。衣物着代へて顔なをす。お只を打伴れ女房お山。座敷
に至り。其客をつく。見るに粘助が。言ひしに違はず年はまだ。二十の上を多くは越ねど。
立振舞も利發げに。最好き男にありければ。かゝる人をおかなの婿に。取りなば嬉しかるべき
と。惚れくとして思はずも。座敷をば退かず。銚子を更へ魚を添へて。藝子と共に待遇しつ
夜もはや四ツと覺しき頃。今日の道に疲しとて。客の眠りを催しければ。其に驚き床を取らせ
善く氣を付けよとお只にも。懇ろに言ひ教へ。お山は常の部屋に歸り。やがて臥床に入りにつ
り。驛路の鈴の音絶へて。降り更りたる村雨や。軒端を廻る風の聲。夜はしんくど更け渡り
家内ひつそと静まりぬ。おかなはそつと起出で。右と左に打眠る。父と母との寐息を窺ひ。枕
に近き燈火を。かき立てながら燈心を。そろ／＼へらして薄暗がり。人に知らさじ聞かさじと
吾身を盗んで廊下を傳い。彼の旅人の臥したりける。屏風を合圖のつまはじき。内にはお只が
聞き取りて。其儘起出で小聲になり。ほんに菓子を預けられた。私は狼の心持。ちんと番して
居りました。是から積る物語。しつぱりおしげりなさりまじと。互に寐卷の小袖を取り代へ。
「七ツを打つと私が。又茲に参ります。もうちつと／＼と。未練を御出し成れますな。寒くなつ

たど爪立足。お只はそろ／＼廊下を戻り。おかなが寢屋にそつと入り。額ぎはまて夜着を被り
 様子をよく／＼窺ふに。鹿右衛門は夫婦共。前後も知らぬ様なれば。己れも其に心緩み。其儘
 すや／＼眠りけり。彼方の部屋には夢心。鯉七は忍聲。「粘助とか云ふ男。其方の文を持ち來り
 旅人の姿にて泊れ。かう／＼して。遇せて遣らふと言ふた故に。來て来て見たが此事が。若し
 知れたなら御前の身の上。はて知れたとて大事な。すぐに其方を泊めて置き。親類中に媚披
 露め。そをしてしまへば私も安堵と。後目でぢろりと打見やれば。鯉七も微笑を含み。「其方は
 安堵か知らねども。あれもまだ内には兩親。我儘にはどうもならぬ。チ、いたい細指だが。色
 々の男をつめて。上手なせい。餘程股にこたへた。聞ておかなは腹立聲。「私が何處の男
 をつめた。さアそれ聞う。其聞うと涙ぐみ。ほろりと計り花の露。こぼれかゝりし前髪の。
 胸へ冷りと風になる。戸にも驚く忍聲に。男は四方へ氣を配り。「あゝこれもつと静に言や。直
 ぐに泊めて媚にする。其方もおじやらを言やつた故。つい己もよしない口。きいたが悪くば
 勘忍しや。是手を付て。謝た。言はれておかなは片類に笑み。「勿體ない女房に。何の謝まる
 事があらう。私は寢床を抜けてくる。それ迄は身もわなく。斯うなつては落付た。見付けら
 れたら御前の家へ。伴れて退てくださったんせ。「いや見付からずともそうした方が。早く方が附く
 だろうと。互に年の若き同士。何を言ふやら埒もなく。つい八ツも打ち七ツも鳴り。名殘惜し

さは山々ながら。お只が音信なきを案じ。明日は茲に滞留し。又更けてから斯う／＼と。約束
 堅めて起き別れ。おかなはそつと吾寢床へ。戻らんと身をひそめ。障子の隙よりさし覗けば。
 お只は餘念他愛もなく。夜着より片手差し出し。幽に響くいびきの聲。母のお山は目を覺し。
 起き代りつゝ行燈の。火にて煙草を吹ひ付けつ。聞き耳立つる其の風情。南無三寶とおかなが
 仰天。猶も片邊に耳を寄せ。息を呑んでぞ隠れ居る。お山は其と氣も付かず。鹿右衛門を揺り
 覺し。「何か近所がさわ／＼と。もし人聲がする様な。言ふに枕を側立て。鹿右衛門も聞き澄
 し。「成程合點の行かぬ物音。まア粘助を起すかよいと。言ふ内つき出す早鐘の。聲に吃くり夜
 着はねのけ。帯引き占めて鹿右衛門。立出んとするかの戸を。外よりけはしく打ち叩き。「盜
 人が今大勢。春林寺へ押込だ。宿中が總掛り。縛れくゝれと大騒動。皆出て下され／＼と。
 呼べる聲に鹿右衛門。「其れ脇差を取て呉れ。粘助は用心棒。おかなが夜着から半分出て。又風
 を引きをるだらう。引き掛けて遣るがよいと。せはしい中にも夜の鶴。暗夜を照せる提燈の。
 光りを知る邊にかけり行く。「お山も外戸迄走り出で。延び上り／＼。「御前は指圖をさしやんし
 て。傍へ寄てくださんすな。若衆に委せたとて。誰も指の指しての無い。粘助如才はあるまい
 が。随分共に氣を付けてと。呼べる聲も届かねば。詮方投首立歸り。「ほんに此の子は踏割いで
 ついぞない寢像の悪さ。夜着引掛けて遣りませうと。言ひつゝ手を取り打ち守り。此まア肥た事

はいな。そして手首をたいはくで。結んでこんな事。人がらが悪いとて。一度も爲やつた事はなし。合點が行かぬと引きまくり。顔規て呆れはて。お只〜と呼び覺され。びつくり飛起きうろ〜と。はい御女主人さん。私は手水に行た歸りがけ。遂に迷間を致しました。御客がさぞかし腹立て〜と。逃げ出すを止むるお山。機にくわたり倒るゝ障子。其處に居るのはおかなぢないか。はいでは分らぬ此方へおぢや。其方も大方矢張戸迷間。外の事は聞くに及ばぬ。何んで寝巻を取り代へて。着ていやるのかさアどうぢやと。問はれて消へも入りたき思ひ。言はんも何と顔見合はす様子を聞いて鯉七が。胸を定めてすつと出で。いや申し御家様。斯うなれば仕方ない。何にもかも打明けて。瓦羅理と申しませう。私は八幡の町に。しにせた晒布問屋。竹花屋磯右衛門の一人息子の鯉七。ふとした事でおかな様と。去年から忍び合ひ。大事の娘を悪い奴と。無かし御腹も立ちませうが。全く弄玩物慰み物に。する等と言ふ氣は更に御座りませぬ。初より女房に持ふ。女房にならうと互の心中。是も前世とやらからして。定まる縁と諦らめて。御不足では御座りませうが。私にくださりませえ。榮耀榮華をさせますと。言ふてはきりの無い事ながら。時々流行物。彼の子の望み相應な。不自由はさせませず。両親は本家の住居。私は武佐の出店を。預て居りますれば。氣のつまる事もなく。鬼千足とか諺に言ふ。小姑は一人もなし。機嫌氣襖を取るにも及ばぬ。心と心を打明けて。鹿右衛門殿へも執

成してと。聞てお山は太息をつき。ほんに虫が知らせたやら。宵に御目に掛つた時。あんな御方をおかなの婿に。どうぞ取て遣りたいと。心に思ふた程なれば。添したいのは山々なれど。何を言ふても一人の娘。物堅い鹿右衛門殿。彼れをやつては血筋が絶へると。急には得心なさるまい。した縁と時節とやら。又折々にそろ〜と。言ひほぐしたらお心の。まゝにならぬ者でもない。娘も短氣を出しやんなよ。一對の白むく合々傘。淨瑠璃や繪草紙に。仇な浮名を流さすに。ありや皆親が堅過ぎて。あつたら蕾の花と花。無情の風に吹き散らされ。後悔涙に暮たどて。最うそうなつては詮ない事。子よりも親が因果じやと。世界の人の笑草。チ、いやな事〜。此頃のおかなが相振。合點が行かぬと思ふたが。人に知られた竹花屋の。若旦那から起た病氣。其で少しは落付た。もう〜薬も祈禱も止めて。お只を連れてぶら〜と。遊びに出れば其れで本復。しかし御君が其の先から。遂何處かへおかなの影を。隠してもなさるゝと。成る相談も破れてしまふ。まア二三年茲の内へ。預けて御置きなさる積りで。切ない思ひも却て樂しみ。誰しも覺のある事と。言へば浮氣の様なれど。今でこそあの様に。眞面目な顔して居らるれど。若い時は鹿右衛門殿も。如才のない利發な男。私しや屋敷に奉公して。居た其の時にと言ひかけて。あれまアとんだ母様ぢやと。娘がぢろ〜私の。顔を見て笑ひます。例へば錦を身に纏ひ。肩と裾とを結んでも。思ふ男と連添が。女と生れし本望ながら。二ツ取

りなら世帯の苦もなく。好た男を持つのは僥倖。ほんにあかなは働き者。もし鯉七様。餘外ほ
かから女房を。お持ちなさるゝと。彼の子にはかけませぬ。御婚禮の其の晩に。私が振り込ん
で。存分を申します。其の代りにはあの加奈に。婿を外から取りましたら。切りなりと突なり
と。御心任せになさりませ。御両親はまだ確。お若い様に聞きました。もう一人男子を。造し
らえてくださりませと。御催促を遊して。御後取りが出来ましたら。其れこそは野宮高砂謠う
て。直ぐにこちらへ婿入り。こう打わつて申すからは。今無理に貰ふの。情死せうの失踪のと
御不長見は假初にも。御出しなされて下さりませ。是れからは宿の前は。善ひ様に取つて
ろい。彼の子を遊びに出しませう。はて盗人の暇はあれど。守りての暇はない。其の盗人で思
ひ出した。鹿右衛門殿が歸られて見付られては言譯の。私も共に仕様がな。御食こしらへで
勝手は起る。人の目に掛らぬ内。お只と寐巻を取り代へて。知らぬ振でお加奈は寐屋。鯉七様
も奥の間へと。事に馴れたる取り捌き。鯉七初め兩人の女。何と言ふ可き言葉もなく。各々臥
戸に引き退く。早や起き出づる泊り人。手水よ膳よと上を下。ごたつく中に鹿右衛門。粘助率
き連れ立ち歸れば。お山は次ぎ迄出迎へ。大分御手間が取れました。若しや怪我でもした者が
「いや〜誰も先づ無難。其の代りには騒ぐ計りて。大勢掛つて盗人は。一人も縛り居らぬ。し
かし早くかけ付けたで。春森寺は先づ僥倖。二三十人押し込んだが。塵葉一本取る間もなく。

皆散り〜に逃げ居つた。鹿右衛門が話の内。お只に送られ出で来る鯉七。様子知らねば粘
助が。貴君今日は御滞留の。一チ、積りにしたか雨も晴れ。あんまりな善ひ日和。ふら〜出掛
け様と。草鞋はけばお山も側へ。立寄りながら「夫れお只。御笠を取て上げ申しな。昨晚は取
り込んで。御粗末を致しました。大和を御廻り遊したら。御歸りは來月初めか。必らず御待ち
申升。あれも待て居りませうと。お只になそへて娘の事を。打かすめつゝ言ひければ。鯉七は
只だ點頭計り。そこ〜にこそ出で行きけれ」。此頃近江の國司は。箕作判官知輝殿とぞ申ける
足利將軍義澄公の幕下に屬し。時の管領音川政元の婿となりければ。世の人此知輝を。尊恭な
す事大方ならず。去れども善く其の己を謹み。仁を以て人を馴付け。徳を以て家を治め。武に
猛く文に詳しく。詩歌管絃の道にさへ。疎からざる良將なり。去れば室町守護の爲め。久し
く都にありけるが。何とやらん領國の。騒しき由聞へければ。西近江志賀の郡。飯室より辻が
平尾のあたりへ押し廻し。かきあげの城を築き。茲に居城をしたりけり。去て或日判官知輝。
老臣青崎藏人景範と。言ふ者を呼び出し。竊かに仰せありける様。今此國に藥王太郎熊頼。藥
王次郎鬼門とて。兄弟の賊首あり。彼等は是れより程近き。柚の木原の醫者の子なるが。幼き
時より劔法を好み。諸國を廻りて習ひうかめ。其の上力量逞しきが。却て其の身の仇となり
彼の頼光が四天王になぞらへて。三星綱作。足柄雲八。碓水の綻三。末嶽管内なんと言ふ。あ

ふれ者を手下に付け。或は道に被剝なし。或は人の家に込み入り。財寶を掠め取り。民の禍
大方ならず。吾軍兵を引き従へ。國內を狩り求め。彼等を討たんと思ふなり。此の事如何ある
可きと。密々と語りければ。藏人景範阿々と打ち笑ひ。人の國を押領し。室町殿へ弓を引く。
反逆人にあらんには。御尤ども申さんが。物數ならぬ盗人に。君の御馬を向けられんは。あら
勿休無き事にぞある。是等しきは御家の老臣に。命せらるゝ迄もなく。吾息子武者五郎景信に
仰の趣言ひ聞かせなば。喜びて直ぐに討手に向ふべしと。憚る色なく申けり。判官是れを聞し
召し。汝が彼に傳へんよりは。吾直きに對面せん。是れへ呼べとありければ。そは有難事なり
とて。藏人直ぐに私宅へ歸り。やがて五郎景信を。引き連れて御前へ再び。罷り出でけるとき
近うくと判官知輝。武者五郎を近くまねき。まだ武の助とていと幼なき。其の時逢ひつるま
まなるが。いと健かに立立ちしな。抑々汝父にも告げず。十六歳の時とやらん。武者修業に出
國なし。十ヶ年が其間。遠近を經廻りて。自から武者五郎と名を改め。去年歸國をなしたる處
物堅き父藏人。私に出家せし。段々の不埒をとかめ。勘當なさんと言ひたるを。藏人が相役
たる。石倉尉右衛門久兼。只管に是れを止め。汝が修法手練を試み。用にも立つ可き者なりと
て。彼の家に止宿させて。藏人を言ひなだめ。此頃漸く父の元へ。歸しやりしと石倉か。竊か
に語り聞せし故。床しく思ひ居たりしに。幸ひ今日の事共は。父より家にて聞きつるならんと

仰せに猶ほも身を平れ伏し。尊命承知住ると。言ひつゝ少し面を揚ぐるを。藏人は睨み付け。
「儲ては石倉久兼が。息子が不埒の事共を。御耳に入れたるか。はや此の上は包むに由なし。仰
せの如く十年以前。例へ部屋住なればとて。君へも願はず吾へも告げず。出國なしたる不届者
をば。由さんと存せしが。石倉に支へられ。實は某持てあぐみ。此度の討手の大役。任遂すと
は存んぜねど。彼の盜賊の手を借りて。彼の命を絶つときは。石倉の恨もあるまじ。やよ息子
今路々も言ひ聞かせし。盜賊の首領。兄弟手下四人を悉く。討取て来りなば。吾は其の座に
刀を捨て。武の道は一生言はじ。住終ざる其時は。對面も是限りぞと。言葉を放て言ひければ
判官は打微笑給ひ。運命全く藏人が。刀をば捨てさせよと。御佩刀を給はりければ。武者五郎
は更にも言はず。父もはつと頭を下げ。有難涙に暮にけり。判官重ねて宣ふは。彼の盜賊に附
従ふ。手下も數多ありとやらん。何程の兵士を添へて。打立たせんとありければ。父の言葉も
待たずして。武者五郎進みいで。某兼て國中の。風聞とくと承給るに。熊瀬鬼門兄弟は。並々
の賊に非らず。水晶山にあるかどすれば。平々嶽に身を竊め。或は沖津島を取り切り。或は黒
瀧の谷に隠れ。由没自在居る處。さだかに其を知る事能はず。去れば勇を以て討んとせば。味
方の者にも怪我あらん。智を以て搦めんには。何條事の候べき。先づ瀬田の橋に新關をかま
へ。夜は往來を固く止め。晝とても油断なく。獨りゝに怪しげなる。摸様の有りやなしやを

窺ひ。松本坂本真間堅田。渡し口へ布令流し。舟を禁ずる其の時は。西と東と此近江は。凡て二ツに分る可し。其の上にては及ばずながら。施す可き計策あり。又有志の面々を。數十人附け給ふとも。若輩なる某が。如何でか下知に従ふ可き。左ある時は助にならず。却て是れより禍起らん。只石倉尉右衛門久兼が息子。尉の助久秋一人。某に附け給ふ可し。其餘は雜兵二百人。吾下知を聊か背かず。手腰の如く働く者を。添てだに給はらば。強賊悉く討平げ。民の憂を除かん事。方寸の内在り。彼の石倉に止宿の内。劍術取手の相手となり。尉の助が手練の程は。見極めて置き候と。言葉すしく述べければ。言ふ事道理に當れりどと。判官大に感じられ。尉の助を呼出し。此の事漏さず言ひ聞せ。是れにもやがて一腰の。差添へを給はりければ。冥加にかない候とて。數多度をし戴き。各御前を退きけり。去れば判官知輝は。此由室町殿へ訴へ。手配大方調ひければ。武者五郎は先づ湖水を渡り。東近江を尋ぬ可しと。十人餘りたくまじき。武士を擇みて伴に従へ。頃は如月十五日。松本へ至りしときは。日もはや暮て一輪の。月は三上の山を離れ。おぼろくと霞みゆく。玉と絹以て包むが如く。そよめく風に岸打つ波は。黄金をば碎くに似たり。かもめは遠く沖に遊び。からすは近く渚に浮かれ。名にしほふたる鴉の海。あら面白の景色やと。暫く眺めて武者五郎。たゞむ折から一人の男後よりおづ／＼小腰をかため。用意の舟場へ行かんとする。近衆の武士に打向ひ。「拙者事は草

津の田舎。中在村の者なるが。幼なき頃より書を好み。比叡山の西塔に。身寄の者の候間。是れに在りて詩文を學び。只今にては堀川に。小家を借りて妻を娶り。寺小屋とかいふ手跡の師南。大學論語の素讀など。教へて幽かに世を渡る。鳥川破門と申者。然るに兄と諸共に。中在にまかりある。老母が今日をも知れぬ大病。急き參れと此如く。兄より知せの文通を。讀むと其儘取る物も。取りあへず最前より。瀬田の橋迄來りしどころ。此頃は盜賊はびこり。其れを退伐あらん爲め。判官公の御近臣。石倉久秋とやらん。新關をかまへられ。夜明けざる其の内は。往來ならざる由を聞き。ほど／＼當惑仕る。宿るにも旅用に乏しく。よし其は兎も角も老母は早や七十歳。何卒して存生の。内に對面したきが願ひ。承れば殿様には。此宵是れより御船を出され。矢走へ渡り給ふ由。板子の下にも差し置かれ。未後の水に間に合ひなば。生々世々の御高恩と。後言ひさして涙に暮れ。言上願ひ候と。彼の手紙を差出せば。武者五郎も立止り。様子を聞て居たりしが。哀れの事やと近く寄り。其の人を熟々見るに。色赤ばみたる黒小袖の。最薄きを一ツ着なし。柄は解れ靴ははげ。今様ならざる無ぞりの大小。心せきてか草鞋もはかず。みご草履は半ちぎれ。布呂敷包を肩に結掛け。年若かけれど沐浴もせず。身内垢付きびん亂れ。いぶせき様にありければ。しきりに不憫の心起り。くだんの手紙を讀み終り。「嗚かし心もせくならん。苦しからず此方へど。同船を許しければ。破門嬉さ面に表はれて

只手を合せふし拜み。是れこそ誠によどしくせん。例へば母が世を去るとも。極樂往生うたがいなし。先づ此の如く俱誓の船に。乗らせ給はん有難やと。又も涙を流ししが。漸々心を取り直し。御船出に不吉の言葉。恐れ入り候とて。物語を外へ移し。照らず雲らず春の夜の。朧月にはしくものなしと。詠みたるもげに。理なり。彼の盜賊の事だになくば。今宵こそ善き御遊山ならめ。漕ぎ出づるに従ひて。早や松本も遠くなりぬ。船行きて岸を移す。去れど月を運ぶべき雲はなけれど。薄霞又なき景色に候と。打ちまぎらせば武者五郎。打ち點頭てにつこと打ち笑み。よし盜賊の事ありとも。今是に居るにもあらねば。吾も道服よのはかま。各方とても用心無用。此宵は月見て遊ばんと。酒肴をもたらしたり。夫々とありければ。ねざめ賢しう割籠なんど。追々に持ち運び。盃を廻らしつゝ。猶ほ破門を近けて。試みに和漢の事を。問へば言葉の下に答へ。物語に善き相手なれば。是れに暫く時を移し。酒酣になりけるとき。近衆の武士言いはけるは。御氣に入りの鹿藏が。羨しげに御次ぎより。差現て候なり。彼にも一こん飲ます可きやと。伺へば此方を見かへり。やよ鹿藏。盃にてはまどろしからん。天目持ちて此處へ出よ。それ注で取らす可しと。武者五郎が言葉聞き。さも嬉しげに伴の鹿藏。徐々としてい出づるを。彼の破門に差示し。此奴は己れが鎗持にて。躰は肥て力なく。面躰もかしこけなれど。世にも稀なる愚者。去れども心正直故。目を掛けて取らすに。中々興となる事あり

此頃雪の降りたる朝。我は寢屋にありたるが。軒の雪を拂はんとてか。此奴早く庭へ來り。大層に降りたりと。咳くを吾聞きとがめ。早や睦月も末になりぬ。去程に深き雪にもあるまじ。何程か降りたる。障子越に問ひたるとき。去れば候厚みはやう。三五分には過ぎざれども。横幅も縦の長さも限り知られず。大層に積り候と。最賢げに答へたり。是れ鹿藏。盃を。そゝぐ可き水を吸みて。力の程を客人に。見せ申せと言はれて。鹿藏ずつと立ちて。桶を提げ階梯を下り。彼の桶の半に足らず。水を汲み上げ。總身の力を入るゝと覺しくて。兩手を掛けて顔を赤め。鬢のあたりに汗を流し。漸々に持ち出で。殿には吾に力なしと。常に笑せ給へども。是れ見給や波々。言ふにはあらねど底の處に。ひた。程と云ふにもあらざと。したり顔に盃を。洗ふ器に水を盛り。さて其水を二口三口。くつと飲で小首を傾け。偕て不思議や斯計の。海に鹽氣は更になし。舳の方は如何にぞと。桶を提げて行かんとすれば。破門は可笑さ袖を引き。此は聞へし近江の湖水。既に鹽なき海とも言ふ。鯨よるとか歌には詠めども。例へば大な泉水にて。何れより汲みたりとも。皆な斯の如くの眞水なり。無益の事ぞと云ふを聞き。鹿藏はたど横手を打ち。其にて思ひ當りたり。何やらんさい前より。魚のひら。飛び上るを。訝しく思ひしが。かの鯨にてある可きなり。いで。取りて御肴に。參らす可しと言ふより早く。すそいと高くまくり上げ。つるはぎあらわに湖水の中へ。既に入らんとしたりしか

ば。破門を初め人々も。こは如何にぞと押し留むれば。鹿藏からくくと打笑ひ。「去る頃も御庭の御泉水へ。先づ此の如く。つるはぎにて立ち入りて。鯉を手取りにせし事あり。此處も大きなる。泉水と言ふ事なれば。何程の事あらんと。止まる氣色の非ざれば。武者五郎聲を掛け。「今破門ぬしが言いつるは。例と言ふ者にてあり。水を泳げる事も知らず。捕へる事はさて置つ魚の餌むきとなる可きなり。よし水練を得たりとも。湖水の中に落ち入らば。如何でか命を全ふせんと。叱りつけられ鹿藏は。いと本意なげに投首し。ともの方へぞ退きける。武者五郎打笑ひ。「彼奴所謂空馬鹿ならんと。今迄は思ひしが。池水と思ひ違へ。湖水に命を捨てするは實に至愚と言ふ可けれ。武士の家に養ふは。心ある可き事にこそと。數度嘆息し。又破門に向ひ。「某はらつふを好めり。御身は諸藝に達せし様子。何ぞ學び得られしかと。問はれて破門手をつかへ。先刻も申す通り。子供を集めて讀書の開。漸くとうぼく高砂の。小謠を教ゆるのみ。らつふの道は更に存せず。只だ筆策を。一二曲藝となしたる事ありしが。今は煙も立て兼ぬる。世帯にかまけて手にも觸れず。去れども元より好きの道。たしか包に入れ置きしと。笛を出して見せければ。さては樂を好まるるか。其こそ何れ興ならめ。何ぞ一曲所望せんと。言はれて辭する色もなく。陵王を吹き立つるに。風の林を渡るが如く。波の岩根を洗ふに似て。玲瓏として澄み渡る。音色に感情起りけむ。武者五郎は目を眠り。頬杖つきて餘念なし。此時

近衆の武士の面々。酒に亂て禮義も忘れ。彼處是處へ打ちまらるび。用に立つ可き様にもあらねば。破門は片頬に微笑を含み。「盜賊追伐あらんこと。思ひ止まり給ふ可し。其の故を如何と言ふに。盜賊は殿を知る。去れど殿は其の賊の。目の前にあるを知らずと。あざみ笑へば此の言葉。いぶかしと武者五郎。きつと四方を見渡せば。只村雲の起るが如く。何處よりかは數多の賊船。矢を射る如く漕ぎ來り。船を二十重と取り巻ひたり。破門後目に打見やり。武者五郎のたわけ者。「汝が尋ぬる藥王太郎。熊瀬とは我事なり。さア搦めどれ首打てと。刀を取り立ち上れば。酒に酔い臥し今迄は。前後も知らぬ數多の武士。心得たりとむつくと起き。手早く袴ひつちぎり。上衣を面々ぬぎ捨れば。或は腹巻或は又。鎖襦袢に褌を掛け。得物くを引提けて押ッ取り圍まれ了得の熊瀬。呆れてためらふ其の内に。真近く寄せたる賊船より。用意の熊手繩梯子。船べりへ打ち掛けく。乗り移らんとなしかければ。熊瀬は聲を掛け。思ひも寄らぬ此の船には。手堅き備へのあんなるぞ。近き寄らば味方の者に。多く過ありもやせん。一先づ引くと下知を與へ。隙さずひらりと飛び乗つたり。逃がしは遣らじと立騒ぐを。武者五郎制止め。某思ふ仔細あり。穴勝に追ふ可からず。遠矢を以て射て取れと。言葉の下より合圖と覺しく。耳を貫く一聲の。太鼓の響と諸共に。舟に仕掛し隠し矢間。一度にばらりと開きけり。賊船之れに氣を呑まれ。散々に漕ぎ去るを。合圖を待ちて船底に。埋伏したる剛強者共。つる

音高く射出す矢は。恰もいなごの飛ぶが如く。薄の穂の散るに似たり。熊瀬之れを事どもせず左に櫓づかを掻い捉み。右に白刃を打ち振て。短く來る矢を切り拂ひ。又打落しかい潜ぐる。元より木葉を浮めし如き。棚無し小船の事なれば。此方に漂ひ彼方に傾ぶき。比良の嶺嵐しに吹きもどされ。危さ言はん方もなし。去れども彼は水邊に。人となりて。舟の道は。最と事馴れて居たりしかば。櫓を押切つてやうくど。己れが此頃隠れ住む。鳥の渚へ漕付けけり。彼の熊瀬が手に従ふ。足柄雲入。碓水の錠三。未嶽管内初とし。其の外數多の小盗人。熊瀬の指圖に従ひ。筆葉の音を合圖とし。武者五郎の船を取り巻き。打ち取らんと思ひの外。計策の裏をかかれ。辛じて隠れ家へ。歸りし頃は望月の夜の。月は山に入らんとして。夜も早や明くるに程近かし。去れど彼の熊瀬の。乗りたる船の見へざれば。心元なき事に思ひ。迎ひの者や出ださんと。かたれ時未だ暗きに。松明を燈しつれ。渚へ出れば熊瀬も。折能く此處へ歸り來つ。吾が飛び乗りしは武者五郎が。しようせんの通ひ舟。去れば遠くへ行き通ふ舟とは。製作の異にして。ほどく難義をしつるなり。方々怪我は非ざるかと。問へば運入さし出て。彼の射拂ひし矢に當り。薄手を負ひし者はあれど。命を落しし者はなしと。聞て熊瀬心を安む。小盗人を従へて。隠家へこそ歸りけれ。

近江の巻前帙終

邯鄂諸國物語

近江の巻 後帙

附言

前帙發販して、後表紙を見るに、既に種彦諸國物語と記したるは、是書房のさかしらなり、故に勿爲と制しければ、永壽堂笑つて曰、隨筆漫畫譜は更なり、赤本にも家の化物、十六利勘を初とし、よくは暗記せざれども、あの物のと幾等もあり、近年は繪雙六にも、畫人の名を題も見ゆるか、原來童子の玩弄もの、聞えの好きが賣には善しと、答へて更に改め

ず、所謂六日の菖蒲にて、彫なりて後なれば、意に耻
て予も止ぬ、此編近江の巻終りて、出羽の國にあり
しといふいと短き話を附たり、是近江の物語に、次
ぎたるにはあらねども、自然に又縁由あり、

天保五年甲午春

柳亭種彦記

郡部諸國物語

近江の巻後帙

柳亭種彦

藥王太郎熊頼は、近頃迄は高島郡。外羽ヶ峯の山寨に。多くの手下の指揮をなし。朝妻鏡の遊
君を。妾となして側に居らしめ。肉の林酒の池。人の寶を我寶と。榮華を極めてありけるが。
當時諸方の國司。義澄公の命に反き。上洛せざる者多く。音川政元討手として。和泉河内にせ
んこうあり。義只は諏訪に在りて。九州の武士を語らい。三好は京に亂入し。音川佐々木心を
合せ。是を追伐なすなど。世の中穩かならざれば。藥王兄弟の沙汰に及ばざりしが。漸くに
世は靜謐して。光栗判官家臣に命じ。討手の向ふ由を聞き。熊頼は大きに驚き。外羽ヶ峯は光
栗の。館へは陸地の續にて。便宜の地に非ざれば。沖津島に人の住まざる古寺のありける故。
是に住居を移し計事を施して。武者五郎景信を。討て捨て思ひの外。散々に討て遣られ。幸
に手傷は負ざれども。波を舟に打ち込まれ。しどいぬれたる衣服を着代へ。一息ほつとつく處
へ。足柄雲入。碓水の錠三。一人の男を引立て來り。一頭の乗りてもどり給ひし。舟の内に此奴

めが。はい隠れて居たりし故。敵の間者どひつ捕へ。穿議なさんと思ひしに。吾は騒の事のと
きに。過ちて舟に陥入り。肝玉も消へ失せて。其れより更に前後も知らず。命を助け給はれど
打ち。慄て生躰なし。如何計らい申さんと。言へば熊頼彼の男の。顔づくく〜と差し覗き。一開
奴めは武者五郎が。鎧かたげの鹿藏とて。取り處なきたわけ者。吾も心の急くまゝに。舟へ落
ちしは知らざりし。命を絶んも無益の殺生。去ればとて放ち遣らば。隱家を敵に知られん。其
の儘に止め置ば。用ゆる時も又ある可し。やよ鹿藏。是より吾に従ひて。鐵をきり壁を穿つ。
鋸かたげになる可なり。次へさがりて休足せよと。言れて鹿藏恐しき。夢の醒たる心地しつ
網の魚の又再び。淵に躍る思ひにて。數多度拜受して。やがて其の座を退きけり。
小々波屋の女房お山は。約束堅めて鯉七を。歸せし後に折を見合せ。夫鹿右衛門に打向ひ。一娘
阿加奈の此度の病氣は。元氣鬱より出でたるなれば。自から全快せん。年頃の盛りの花。香に
引れて蝶の寄り。よしや浮名の立てばとて。露なき風に散らさんよりは。其れこそ遙かましな
らめど。つまの氣質の物堅を。能く知るからに打ちかすめ。其れどはなしに聞へければ。鹿右
衛門も豫め。其の意を悟りてしいても留めず。其處の開帳彼處の神事と。お只計りを伴に供
れさせ。お加奈を遊山に出し。かば。忽ちに本復し。顔の色つや美しくありしよりはなをしし
づきすこやかになりけれ。然るに又母のお山。久しく月のさわりを見ず。三十路もどくに過

たれば。常の事にてある可きと。心も留めず居たりしが。何事やらん胸苦しく。食も碌々進ま
ざれば。醫師を招きて見せけるに。是れ血塊と云ふ者にて。疎かならぬ事なりと。直ぐに藥を
與へけるが。其の効更になく。日に病重りければ。お加奈が嘆き一方ならず。如何にかせ
んと思ふ時。粘助が言ひけるは。此頃より目をなやみ。久しく御家に滞留する。浪人めきたる
旅人は。形狗齋とて占を。世渡りとなす者の由。私に申様。御家方の病を。吾筈して判断す
るに。恐らくは懷妊なる可し。其を塊物なりと思ひ。碎かんとする藥の逆し。却て惱み給ふな
らん。己れ少しは醫書の端をも。覗きたる事のあり。よし其の職には非ずと言へど。田舎醫者
には優らんか。先づ試みに容躰を。見せさせ給へと望まれぬ。如何申し候はんと。聞て人々打
ち喜び。直ぐに是れへと請ひければ。形狗齋は入り來り。脈を窺ひ腹をさぐり。懷胎にまされ
なし。悼しいかな庸醫にまどい。命をも過ち給ふ可しと。證を引き理をつめて。解ささすとす其
の辨説。恰も水の流るゝ如く。年若かけれど人柄も。立ち上りて見へければ。各々是に屈服し
法を乞ひて藥店より。藥を求めて服すること。未だ幾日も非らずして。お山は心地すくしくな
りぬ。鹿右衛門お加奈は更なり。家内の喜び大方ならず。形狗齋は目の病み。癒へたれば。旅
立たんと。言ふを只管押し止め。心を用ひて待遇しけり。一偕ても其後熊頼は。武者五郎が武勇
のみが。智略の深きに恐れけん。此に潜みて國中を。襲い騒かす事もせず。弟次郎鬼門が。音

信を待ちて數日を送り。如月もいつか立ち。彌生半の事となりけるが。或る夜月最と快く晴れて。秋にも優る景色なれば。部下を集めて酒宴を催し。妾に抱へし傾城に。今様を唄はせて。各興にぞ入りにける。彼の鹿藏は湖水を。泉水と思ひ違へ。裳を掲げてつる脛と。なりたるが可笑とて。名を鶴脛と呼び代へさせ。呆けたる事を言はせ。折節伽をなしけるが。此の席に居らざれば。彼は如何にと呼びけるととき。未嶽勘内答へていふ。「鶴脛は宵よりして。心地悪しと夜着をかつぎ。打ち臥して候と。聞きて熊瀬打ち笑ひ。「此の夕暮迄常の如く。可笑事のみ言ひ居りたれば。左迄の事の有りとも覺へず。彼にも酒を飲ます可し。此へ呼べと言ひければやがて勘内此の由を。鶴脛に傳へけるにぞ。恐る／＼下座へはい出で。「さいつ頃舟へ落ち入り矢響は耳を貫き。頭よりは波をかつぎ。今も命の消へ行くかど。なんぼう悲く思ひしも。かゝる月好き夜半なり。去る故に月を見れば。其の事のみを思ひいで。今も生きたる心地はなし。あな恐しの月の影やと。色青ざめ身は慄き。わつと計りになき出せば。熊瀬一しほ興に入り。「汝が至愚を見定めて。武士の家には養い難しと。武者五郎も既に言いつ。去すれば彼處に在るときは。はや此の程は屋敷を退はれ。寄るべなき身となる可きを。吾舟へ落ち入りしは。却て其の身の幸なり。憂を拂ふ玉簪木。一獻汲んで心を晴らせと。只管に勧められ。初めの程は盃を。取る氣色だになかりしが。言葉に是非なく數盃を傾ぶけ。恐しかりし事も早や。打忘

れしと覺しくて。次第に席を進み出で。聲いどだみたる田舎節の。小謠を歌ひ手を打ち叩き躍なんどなしければ。人々はつきしろひ。打ち笑ふを鹿藏は。したり貌にて熊瀬の。ほどり近く差し寄りつ。「其夜におかしき音の出でたる。笛を己れに貸し給へ。吹きて聞かせ參らせんと。言へば熊瀬手箱の内より。取り出し手前に置き。「是は筆筈と言ふ者にて。習はねば音の入り難し。先試に吹きて見よと。言ふのも待たず鹿藏は。手に取り上げて是れも。又鬨と吹き出すに。其の調子能く調ひ。神意を澄ます計りなれば。熊瀬は心に驚き。顔をじつと打ち守れば鹿藏片ほに打ち微笑みて。手をつかねて討手の者に。早く捕へられ給へ。其の事を如何と言ふに。討手は善く賊を知る。賊は討手の大將の。目の前にあるを知らずと。言ひさま其れなる雲八が。帯びたる刀取るより早く。勘内か首打ち落し。あはやと驚く錠三を。只だ一刀に切りさげたり。熊瀬はあきれはて。開いたる口を塞ぎもやらず。打守りて居たりしが。四方に起る鬨の聲。耳を貫く太鼓の音。南無三寶と馳出す。向へ。鹿藏立ち廻り。「光栗の近臣青崎藏人か一子。吾こそ誠の武者五郎。景信と言ふ者なれ。さいつ頃船中にて。武者五郎景信と。假りに名乗りて汝を計りし。石倉尉の助久秋が。筆筈の響きを合圖に。はや此島は取り巻きたり。しよせん逃れぬ網代の魚。尋常に腕を廻し。繩を待てよと言ふ内に。石倉久秋手の物引き具し。左右より込入り。或は討ち或は搦め。凡て島にこもりし賊は。一人も漏さず平げたり。此時

に武者五郎。生擒死屍の面を檢ため。首領藥王太郎熊瀬。足柄雲八は既に搦めつ。確水の錠三
未嶽勘内。兩人は討ち留めたれども。遺骸きは熊瀬の弟、藥王次郎鬼門。手下の内聞へたる
三星の綱作は。何處に隠れ忍ぶにか。某此處にあるうちだ。様子をどくと窺いしが。此の島に
嘗て居らず。是等を討たん計策は。後にてゆるく商議せん。又是に居る女共は。熊瀬が掠め
取りし。黄金持て受け出し。朝妻あたりの遊君にて。更に罪なき者なれば。夫々に歸し遣らん
ど。尉の勤と云ひ語らひ。切り捨てたりし小盗人の。首をあげて舟に積み。細付き引かして判
官の。館に直ぐに立ち歸へり。事の由を訴へければ。御喜び大方ならず。熊瀬初め盗人の。首
をねて牢獄の。門に掛けてぞ暴されける。彫狗齋が言ひしに違はず。小々波屋の女房お山は
愈々懐妊の景色知るく。取り上げどか呼ぶ産の道に。事馴たる老女を招き。其の様子を窺はず
るに。早や五月の程なれば。好き目を擇て腹帯の。祝と家内さゝめき渡り。其の夜は彼の取
り上げの。老女をも留め置き。此宵は幸ひ此に宿る。旅人も左迄多からねば。襖間障子も取り
放し。家内の男女打ちこぞり。彫狗齋を待遇なすど。歌ひつ舞ひつする程に。各々酒に酔い
倒れ。夜中も過ぐる覺しき頃。漸くひつそと静りぬ。怠る折から小々波屋の。外戸の戸激し
く打叩き。宿はずれの閨屋にて。産の氣の付きたる故。取り上げの老女を迎ひに。住居迄行き
たるが。此に泊りて居らるゝ由。はやく共に行き給へど。呼ばれば精助が。寐耳に是を聞き

付けて。應と答へて外戸の戸を。何心なく引き明れば。雲突く計りの大男。數十人込み入りて
あはやと驚く粘助を。高手小手にしはり上げ。猶ほ奥深く込み入れども。晝よりの酒につかれ
下男は皆前後も知らず。其の外は言ひ甲斐なき。女どもの事なれば。會々之れを知る者も。夜
着引きかついで念佛唱へ。支へ留むる者もなし。此の物音に眠りをさまし。こはそも如何にと
驚くお山。生躰もなく泣き惑ふ。あかなを制して鹿右衛門。胸を定めてずつといで。汝等は元
財寶を。心に掛けて入つたるなる可し。其さへ渡さば言ひ分あるまじ。罪なき者に過ちさすな
ど。言へども件の盗人ども。猶ほも心を許さずして。鹿右衛門を押つ取り巻く。折から彼の彫
狗齋は。静々と出で来り。皆退けしと言ひければ。はつと計りに強盜共。さながら主人を敬
ふ如く。手を付き各々平伏す。彫狗齋は上座に直り。内方にも御息女にも。早や恐しき事はな
し。先づゆるく打ち寛ぎ。吾云ふ事を聞き給へ。己は元西近江。柚木原の何某とて。人に
知られし醫者の子息。兼て音にも聞かれしならん。藥王次郎鬼門とて。強盜の今は張本。され
ばとて御身等に。聊か刃向ふ心に非らず。盗人にも猶ほ道あり。吾遂に人を殺さず。火を放ち
し事もなし。不義の金を貯ふる。其家には猥りに押入り。有る限りを掠め取り。行ひ正しくあ
りなから。貧しき物の有るときは。施し與ふる時もあり。御身の如く不義にも非らず。自から
に數多の金を。積みたる家に入るときは。其の半は取ると雖ども。我故世帯を失はせ。路頭に

人を迷する。不道の事は嘗て好まず。既に此家の財を目掛け。目を病と偽りて。便宜を伺ひ此に止まり。手下の者を引き入れしが。色は思案の外とやらん。耻しなから御息女の。おかな殿の姿に迷ひ。例へば今藏を開き。黄金を積み置かるゝとも。元より掠む可き心はなし。此へ滞留なす内に。吾兄太郎熊瀬は。早や光栗討手の者に。捕へられ給ひしと。部下の者が竊かに注心。遂には吾も天の網。掛らん事の恐しやと。其時悪念發起して。髻を切り拂ひ。姿を代へんと思ひしが。噫断ち難きは輪廻の羈絆。彼の面影の目にちらつき。寐てもさめても忘れられず。此の者共に言ひ付けて。お加奈殿を盗み行くは。元より易き事ながら。初めにも言ふ如く無道の事は更に好まず。此のあたりを好く聞き分け。己れを婿にしたまはずや。面躰知つたる者なければ。誰かは賊と思ふ可き。未だ千兩二千兩の。黄金は塞に貯へ持てり。不足は非らじと言ひければ。鹿右衛門打首肯き。一儲てはうはさに聞き及ぶ。鬼門殿にてありけるか。悪に強きは善にも強し。其れこそ望む處なれ。殊にはお山も其元の。醫療を得て全快しつ。娘の爲めにも恩人なり。然しなから此の儘にて。我家に留まり居給は。人の疑ふ事あらんと。聞て鬼門につこと打笑み。明日より七日を経て。改めて婿入せん。何を言ふにもあの如く。荒くれし男共。大勢にて取り巻き居れば。御内方や御息女は。恐れ慄き我が言へる。道理も善くは耳に入るまじ。後に悠々説きさとし。首尾能く事を計らひ給へ。若し又七日の其内に。光栗へ由

を訴へ。捕へんとたくみなば。此家のみか宿中へ。火を放ち焼き失い。煙の内に何れもを。討て捨て、某も。潔く生害せん。能く心を定めてと。手を以て胸を打ち叩き。其れくと指圖して。粘助初めいましめし。者共に繩を解しめ。數多の手下引き従がへ。優然として出で行きけり。お山お只は更にも言はず。降つて湧たる災難に。鹿右衛門當惑し。如何かせんと思ひまどひ。一日二日過しが。或る夕暮にまだ若き。商人らしき旅人の。三人供を伴れたるが。此の小々波屋に宿りを求め。彼のお只を見て酒の相手に。なす由を望みけれど。久しく阿加奈の相手として。客に出し、事なれば。外の女子にしたまへかしと。お山が断り言ふを聞き。お只は障子の間より。其客を透し見るに。色白く目元涼しく。いと好き男にありければ。ふと心に戀情起り。お山に向ひて言いは。幼なき時より我身をば。娘の如く養ひ給ひ。始めて客に出でたるは。漸やく去年の冬にてあり。其の程もなく阿加奈様の。御病らいのお伽をし。遊山物見の御供計り。勤めの道は疎かにて。餘りと言へば冥加なし。此宵は只管彼の客に。我身を出し給はれと。願へばお山も心を察し。兎も角もとて許しければ。客もお只が打解けて。物語ふか悪くからず。我身の上を大凡に。其夜お只に言ひ知らせ。足を痛めし躰にもてなし。滞留せんとなしければ。此頃既に形狗齋に。家内の恐れし上なれば。幾日も客を留めんは。掟に背く由を断り。立たせ遣らんとしたるを。お只は主人の前に出て。彼の客は國司光栗家に入

の刀や。外原屋倉藏様とて。持たせ給ひしあの荷物は。判官様の御家来より。誂らへられたる
刀の箱。怪しき人には侍らず。此に留めて置き給はし。お家の爲にもなるべしと。事有りげに
言ひけるにぞ。鹿右衛門も是を聞き。彼の者國司の光栗家へ。近しく出入る者ならば。若し彼
の次郎鬼門を。防ぐ手段になりもやせんと。お只が望みに打まかせ。倉藏を留め置きけり。待
たざる日はいと猶ほ。速に過ぎ行きて。彼の次郎鬼門が。約束固めし婿入りの。日もはや今
日とぞなりにける。女房娘を人なき所に打ち招き。御身等を誘ないて。一先此を立のかんと
其の用意はしつれども。出口くしに手下を廻し。用心堅固の有様なり。去ればとて光栗へ。此
の事を訴へなば。我家のみかは宿中の者の難儀となりもやせん。畢竟先づ何氣なく。吾家の
婿となし心を許させ。折りを見て訴へ出でんに如くべからず。其も不仁の事なから。是れより
外にせん方なし。情を知らざる計らいと。阿加奈は怨み思はんが。多くの人の爲めを思ひ。身
を汚して呉れよかしと。男泣きに泣きければ。阿加奈憂ふる顔も見せず。茨を抱いて添ひ臥す
も。暫しの程にて侍べる可し。左迄に嘆き給ふなど。言ひ慰めて其處を退き。己れが部屋に閉
籠り。例へ鬼神なればとて。我身を捨てなば憐れと思ひ。此家に仇はなすまじと。彼の鯉七と
人知れず。忍び逢ひし事共を。懇ろに書置きしつ。庭の井筒に身を跳らせ。飛び入らんと爲し
けるとき。折好くお只は縁側を。通り掛りてあなやと驚き。袖に縫りて止むるを。情に死なせ

て死なせてと。阿加奈は其れを振り切りつ。尙ほ飛び入らんとなしければ。お只は愈々忙てま
どい。手に當るを幸ひと。雪見形の燈籠の。笠を取て件の井戸の。ふたに被いて立ち隔たる。
其の間に阿加奈はすりぬけて。表の方へかけ出し。東を望んで走りけり。鏡の宿を引き離れ。
此に一ツの小川あり。水上は鏡山の。麓より流れ出で。二流合して湖水に入り。末は二保川と
いふ。阿加奈は茲にかけ來り。念佛の聲諸共に。身を沈めんとなしける時。思ひ掛なきお只の
客。倉藏後より追ひ來り。飛び掛て抱き留め。節義に迫り捨身の覺悟。お只に詳しく様子は聞
けり。我だにあれば其鬼門。押して婿に來るとも。事なく治まる手段あり。心易く思ひ給へど。
言ひ宿る内粘助お只。追々に馳せ來たり。先は阿加奈か無事を喜び。共々に言ひ慰さめ。漸々
伴れて立戻れば。鹿右衛門夫婦ども。此事を聞き付けて。狂氣の如く門戸口へ。走り出づる出
合頭。阿加奈の顔を見るよりも。嬉しさ餘りて物をも言はず。右左より取りすがり。やがて居
間へと誘ひ行く。後より一人の旅虚無僧。會釋もなく打ち通り。己れは斯く姿を扮し。武者修
業を爲す者にて。弱を助け強を挫き。親しき疎きの差別なく。人の難儀を救はん願ひ。見受け
し所此の家の御息女。何故河へ身を沈め。命を捨てんとし給ふかと。言ふ其の言葉の頼もしけ
れば。主人の言葉を待たずして。粘助が進み出で。事の様を物語れば。修業者阿々と打笑ひ。
「其れこそ望む處なれ。其の奸賊を引き入れて。弔殺しにして呉れん。吾御息女の夜服を着なし

燈火を遠避けて。寐屋へ屏風を引き廻し。打ち潜みてある可き間。其の鬼門が来りなば。娘は此頃病氣なりと。賺して其處へよこし給へ。斯く家内打ちしめり。憂の色を表しなば。却て賊の疑ふ可し。常の如くに旅人を留め。左あらぬ躰にて居られよと。聞て少しは力を得。酒肴を持ち出で。彼の虚無僧を待遇す時。倉藏はお只と共に。阿加奈が又もや隙を窺ひ。走り出づる事もやと。付添ひてありけるが。倉藏庭を指さして「最前にお加奈殿の。身を投げんとし給ひし其時に。石燈籠の笠をもて。あの如く井戸を被ふいて。止たるお只の力の恐しさ。我は手に持つ扇子を落し。呆れて言葉も出でざりしか。其の隙に阿加奈殿の。表の方へ出でられしに。又驚きて後を追ひ。漸くに止めたれど。初め命を助けしは。お只の力故なりと。聞て人々げにもと見遣り。打驚けばお只は。我手を打ち振りながら。小首を傾け物をも言はず。庭へ下り。件の石の笠を取り。彼處是處へ打ち振るに。さながら扇子を使ふが如し。お只につこと打笑ひ。「古此の國に住みし。お兼とやらん言ふ女は。放れ馬のはづなを踏み。初めて力の有るを知る。丁度吾身も其の如く。今迄は此力を。夢にも知らずいた故に。此頃の盗人にも。阿加奈様の御身の上。案じながらに怖さの儘。行燈部屋の隅に隠れ。泣て居たのは口惜い。もう〜御案じなせれますな。五人十人來居ても。先此様に粘助が。襟髪つかんで宙に引立て。投げんとすれば。あゝ是れ〜。其の張合に投られたら。己れが頭は粉微塵。そつくり置て貰ひませ

う。やれ〜是れで安堵した。いつぞやは帯やのだんで。どう〜己が言いまける。兎にも角にもお只どのが。あの大力では何百人。來ても配慮ふ事はない。素知らぬ顔で私に。見ほしにで〜参りませう。然しながら婿君の。御里が何處か知れぬ故。空な者ぢやと言ひながら。彼の虚無僧を後目に掛け。羽織打ち掛け粘助は。表の方へ出で行きけり。「宵は人目を憚りてや薬王次郎鬼門は。亥の刻も過ぐる頃。麻上下を爽やかに。黒小袖の上に着下し。晴がましく打扮たる。人品骨柄世の常ならず。箱提燈に途を照らさせ。供人二人從へて。用心の躰もなく。静やかに打通れば。鹿右衛門はお山と共に。さらぬ躰にて出迎へ。ある可き程のあいさつ終り「娘阿加奈は昨日より。風の心地と言ひたるが。寒氣立て堪へがたしと。寐屋に籠りて打臥たり去れど重き病に非らず。先づ行きて問ひ給へと。指さして寐屋を教へ。其身は遠く引退く。鬼門は打點頭。彼の間へつと入り。屏風へ手を掛け開くるかど。思へば左はなく聞き耳立て呼子の笛を吹き鳴らせば。庭の植込み縁の下。其處是處より數多の盗人。手鎗を引提げ顯はれ出で。屏風をぐるりと取り巻たり。其時鬼門聲を揚げ。「やア卑怯なり武者五郎。汝尋常の勝負はせず。虚無僧と姿をやつし。我々を尋ぬる事も。問者を以てとくに知る。此小々波屋は財寶を。數多貯へ置く故に。是れを奪ひ取る可しと。四天王に擬らへたる。我手下の其唯一。三星の綱作を。去年より入り返ませ。粘助と言ふ手代是なり。此頃彼が手引にて。安々と入つた

れども。猶も其と知らさじと。粘助を眞先に。戒しめたるは反間苦肉。盜賊の計策にも。遙に劣りし己れの白癡。水滸傳に事ふりたる。嫁御寮への水祝。冷やりと參らす鎗襖。血しほに染る色なをし。「心得たりと手下共。鎗の鋒先を突き入るゝを。」先づ待て〜と鬼門制し。まだ云ひ聞かず事のあり。己れ最前吾を釣り寄せ。なぶり殺にしてくれんど。高言を吐き出し。娘の寐屋に臥したる事も。迎へに出でたる粘助が。道すがらの物語。なぶり殺にして見ぬか。何うぢや〜と鬚かきなで。彼處是處と眼を配り。見れば家内に人氣もなし。「逃げ去たのか隠れてか。怖い事はちつともない。然し此頃言ひたる如く。情を思ひ道を立て。義を磨いては盜賊の頭と人は敬わず。穩便やかに歸りしは。光栗へ訴へさせ。武者五郎をおびき寄せ。斯く計らはん其も手段。娘と金の有りだけを。呉れてしまへば仇はせぬ。いやだと言へば可愛娘か。可愛がる鯉七を。見て居る前で生け造り。人質に伴れて來いと。粘助を早や最前。武佐の住家へ遣たれば。鯉七からさゝを引き通し。鯉七をば提げて歸へるであらう。先づ青崎の青首から。メてくれんど下知を傳へ。つばなの鋒先と屏風越し。突き入れて〜も。手むたへもせず聲もなし。こは心得ずと立寄て。屏風かい遣り差覗き見れば。娘の振袖を。行燈に打ち着せて。藥王次郎鬼門を。此に捕ふる者なりと。墨黒に書たりけり。鬼門は齒がみをなし。南無三寶計略の。裏をかかれし油斷すなど。向ふをきつと打見遣れば。粘助歸り候と。首を疊にすり付けた。心

急くまゝ能くも見留ず。様子は如何にと焦躁てば。「去れば候仰せに従ひ。武佐の宿へ馳せ向ひ鯉七を擲取り。伴來たらんと思ひの外。彼が力量思の外。抜群にて手に餘り候故。難方なく切て捨て。斯くの通りと鬚を。捉んで首を差出せば。鬼門大きに氣色を變じ。人質になす可き奴を。討ち留ては其甲斐なし。持て退れと腹立紛れ。蹴飛す首は燭臺のほとりにまろんで有々ど。見ゆる面を鬼門は。何心なく打ち守り。「や、此首級は粘助と。名乗らせ置たる三星綱作。持ち歸りし其方ほど。立寄る處をばつたと蹴据へ。吾こそ青崎武者五郎。此家の娘の寐屋に入り。打臥したる様にもてなし。姿を扮して竊かに抜け出で。汝の來たる途すじに。隠れて様子を窺ふに。いと親しげに粘助と。己れひそ〜打語らい。武佐の方へ走らすは。あらいぶかしと後を追ひ。粘助を引捕へ。究問して白状させ。先づ此の如く打留たり。又倉藏とて五六日。此宿へ滞留なしたるは。光栗家の近衆の武士。石倉尉の助久秋なり。汝か計れば吾も計り。彼の久秋を商人の。様に待遇なし刀の箱へ。武具を仕込て廻し置き。商人百姓さま〜に姿を代へ形をやつし。此宵泊りしは。皆光栗の強剛共。翹あらばいざ知らず。所詮逃れぬ道はなしと。辨舌淀ず言ひ流せば。鬼門ははつと計り。差うつむいで居たりしが。漸あつて頭を揚げ。僅十人廿人。手下の者を伏せ置て。用心のなき躰にもてなし。各々を釣り寄せて。討たんと計りし吾が愚かさ。天なり命なり早や是れ迄。さア繩打て引かれよと。大小投出し座を占む

る。「神妙なりと武者五郎。立寄る處を身を跳らせ。兩足かいて投げんとす。さしつたりと引つ
ばずし。直ぐに蹴倒し膝押掛け。要意の早繩打しごき。鬼門の腕ねじ上げ。高手小手に縛し
めける。小盗人等は屏風の中に。人なきを見るよりも。皆氣を吞まれて鬼門を。助けんと云ふ
心もなく。突き捨しまし、槍をも取らず。ひそく其場を逃げ出すを。尉の助を初めとし。家來
の面々手配し。其處よ此處よと追ひ詰め追ひ詰め。中にもお只は吾か力を。此宵こそは試みん
ど。尉の助が荷物より。くさり帷子取出し。雪の素肌引掛つ。焰へ立つ計りに紅なる。絹を
しごいて襷に掛け。花々しく出立て。度を失ひてうろたへ廻る。盗人共を引捕へ。曲球なんど
を取る如く。ばらりくと投げ出せば。件の討手の武士共。あら目覺しの力やと。笑壺に入り
つゝ折合く。お只が投げれば取て押へ。一人りく繩を掛け。凡て此家に込み入りし。鬼
門が手下の盗人。一人も餘さず擲めけり。お山お加奈を初めとし。凡て家内の物共は。武者五
郎か差圖して。先に此家を竊かに出し。宿はずれの持僧堂へ。立退せて置たりければ。お只は
此處に走り行き。「先づく御安堵なされませ。大將鬼門其外の。手下も残らず珠數繫き。味方
は少しの怪我もなく。打さめいて皆々が。酒の爛する肴をさがす。序に是れからすはきを
して行かうとて無駄口だらく。倉藏様と言ふ御方に。初めて私が出た晩に。一昨日此に鬼門
と言ふ。盗が押入りて。内の娘に心を掛け。又婿入りに來ると聞く。其迄己れを泊めて呉れ。

家内の難儀を救ふて遣らふ。然し先づ此事は。主人にも沙汰するなど。口堅めはせられたれど
其れとはなしに彼御方は。泊めて御置遊ばせと。私と言ふに違ひなく。尉の助久秋さまとて
彼の盜賊の討手の頭。旅虚無僧は武者五郎。景信様とて御相役。其勇さこきびの善さ。御歸
りなされて御覽じませと。物語其折から。竹花屋の鯉七は。息を計りにかけ來り。小々波屋に
騒動ありと。馬追ひ共か言ふを聞き。取る者も取り敢へずと。言ひつゝお只が着込みたる。鎖
じゆばんを打見遣り。こはく如何にと驚けば。お山はありし事共を。鯉七に語りつゝ。打連
れ立て家に歸り。過なかりし事共を。各々つといて喜びけり。「去程に青崎景信。石倉久秋兩人
は。生捕の賊を引かせ。光栗の館へ歸り。言上に及びければ。判官大きに感むられ。賊悉く
征伐終り。偕て件の兩人は。まだ部屋住にてありける間。別に家祿を與へ給ひ。是れよりして
は父と共に。勤仕怠る事なかれと。懇ろに宣ふにぞ。景信久秋は更にも言はず。父尉右衛門藏
人も。面目を施して。愈々忠勤を勵みければ。光栗の家益榮へ。國中穩かに治まりて。民百姓
に至る迄。安堵の思ひをなしたりけり。「偕て小々波屋鹿右衛門は。其の日阿加奈か書置にて。
竹花屋鯉七と。忍び逢しを知しかど。思ひ掛なき災難を。逃れたる嬉しさに。是等の事は更に
どがめず。去ればとて望みの如く。竹花屋へ送らんとは。まだ言ひ出でねど鯉七と。是よりは
一家の如く。親しく互に行き通ひ。夏も立ち秋も來て。女房お山の臨月に至りけるが。お只も

又懷妊にて。早や五ツ月の程になりぬ。外に客を迎へさせねば。尉の助か滞留中に。其の胤を宿し、は。いと知るき事なれども。打出しても言ひ難く。相ばらみどか同じ家には。忌者なりとて此事を。鯉七に語りければ。さらば我家に預りて。善き様に計らはんと。お只を誘ひ歸りけるが。日ならずして此方のお山は。玉の如くの男子を生めり。鹿右衛門は四十歳。生れし子も健やかなれば。是れに家を譲るとも。遅かるまじと人も進め。吾も其の心に決し。娘阿加奈を竹花屋へ。送りたき由言ひければ。彼の兩親も大きに喜び。結納を取り換はし。其れ彼れをも取り急ぎ。日を擇て竹花屋へ。阿加奈を迎へ鯉七と。祝言芽出度調ひけり。

近江の巻後帙終

郡鄂諸國物語

柳亭種彦

出羽の巻

出羽の國節海郡鳥海山の麓。月光川のほとりに。語代關右衛門と云ふ浪人あり。父は九州の武士なりしが。此處に世を避けて後。關右衛門は生れたり。幼時より弓を好み。遂に其の妙を極め。針をさげ木の葉を釣り。的となして矢を放つに。凡て目に遮る者は。中らずと言ふ事なし。殊には廣き此國にも。並ふ者なき強弓なれば。善き主取りして後代の家名を。引起す可き者なりとて。人も褒めのノめきけるが。此關右衛門は運拙なく。廿計りの年なりけん。父も母も此世を去り。妻を娶りて一人の。女子を設けしが。其子三歳計りの時。妻も又歿したり。是等の事に貯へし。黄金は残らす使ひ失ひ。今は煙も立て兼て。生が嶽に竊かに分け入り。猿兎の類を射止め。是を賣りて漸々。露命を送る其内に。或時山を陥みすべり。肩の骨をひきちがへ。其より弓をも取る事能はず。既にせん方盡きたりしが。此家に久しく奉公する。帆助と言へる男あり。彼は元生立。老實しき者なる故。斯く貧しくなり行きても。暇も乞はず此

にありて。日は其處此處の日雇に頼まれ。夜は馬のくつを作り。我だに斯くてある内は。如何にもして養ひ申さん。心容易く思ほす可しと。最と頼母しく仕うるに。關右衛門は力を得て。仕官の事は思ひ絶へ。貯へ持ちし武具箱を。賣り代なして書を求め。是れより終日終夜。勤學する事十餘年。螢雪の功積り。内典外典に能く通じ。詩を作り文を綴るに。是れも又近國に。右へ出づ可き者もなき。博覽とこそなりにけり。去れば城下に隔りし。片田舎に住むと雖ども聞き傳へ語り傳へて。門人となる者多く。彼の鳥海山の奥の院。赤瀧山靈水寺へ。常に立ち入り。わらびか岳の坊中も。大方弟子となりければ。富ると云ふにはあらざれども。飢ず食ひ寒からず。衣を打着て世を送るに。いと安き身となりぬ。偕て或る日彼の帆助。一人の若き男を誘ひ。關右衛門の前に出で。己れ十歳計りより。此御家に仕へ參らせ。昨日今日の様なれど。三十年にもなりなんか。心は左迄變らねども。力も抜け身も弱り。若き人には及び難し。此男は紀の國吾妻野の邊の者なるが。心も正しく年も若し。書を好めども家貧しく。求むる事の難き間。御家に奉公なしたきとて。此頃より吾を頼めり。是れ幸ひの事にてあり。是を二代の帆助として。吾には暇を給はる可し。老後を安く送りたしと。親切に聞へければ。關右衛門打うなつき。「最もなる願ひなれど。汝は元此國なる。高羽田の生なれば。暇を乞ひて本國へ。立歸へると言ふにも非らず。二代の帆助諸共に。此家に止まりて。吾儘に振舞ふども。誰かはどが

むる者あらん。去りながら其事も。心任せになすべきなり。只言ひ聞かせて置く可きは。汝吾が正直なるに。人の心を引くらべ。良もすれば欺かる。是れ慎みの第一なり。又二ツには弓射る事を。其昔し吾に習ひ。閑だにあれば野山に遊び。鳥獸を狩暮し。是を上なき樂と。思へるは僻事なり。眼前に我を見よ。抑此鳥海山は。大物忌の神社と崇め。倉稻魂の命是なり。かゝる靈山に併び立てる。生々嶽へ竊に分け入り。猿兔を射たる神罰。忽ち肩の骨を違へ。嘗て弓を取る事能はず。よし靈山に非らずとも。物の命を取るときは。忽ち其身に報ふなり。其よりひたすら後悔して。鳥海山の御神を。信じたる徳に依て。又文道にては名を知られぬ。汝常の忠臣には。引換へて神を信ぜず。殺生を好む事。實に玉に瑕と言ふ可し。吾家を出づるとも。心に掛けて守る可しと。細まゝと説き諭し。少どの金子を與へければ。帆助は己れの胸巻より。小判を數多取り出し。藁を見れば繩をない。くつを拾へば寸苙に切り。斯くの如くに貯へ持てり。彼の金子は受け收めず。古里の高畠へ。訪れんと出行きけり。關右衛門か推量の。意見に違はず彼の帆助は。獵者にならんとて。暇を乞ひて出たるなり。去れば古里へは足をも向けず。よこね山の麓より。昇る事八丁餘り。只二軒ある離れ家の。其一軒を買ひ求め。見苦しからず作換へ。一人此に住なして。猪猿狐兔の類を。日毎夜毎取り暮し。市に賣りて錢に換へ。有福の身となりぬ。抑々此横根と言ふは。鳥海山には及ばずなから。峯高く谷深く。

人里に遠く離れ。彼の一軒の隣と雖も。間合三丁も隔たりて。是へも此頃何處よりか。夫婦の者の引移り。住まふ由は聞きつれども。互に未だ音訪れず。其の面だに知らざりけり。斯く物淋しき處ながら。關右衛門が肩を傷め。殺生を止めてより。己れも共に弓射る事を。久しく止められしかば。今は憚る事もなく。住めば都の思して。春も立ち夏も過ぎ。頃しも秋の末つ方月いと明き夜なりけるが。此宵は狩にも出遣らず。麻袋打かつぎ。宵より眠り居たりしに。夜中許りと覺しき頃。帆助起よと言ふ者あり。ふと目を開きて軒端漏る。月影にすかし見れば。五ッ絹を身に纏ひ。緋の袴踏したき。さも尊なき宮女なり。彼女につこと打微笑み。妾は別の者ならず。裏の御玉に仕へまへらせ。命婦の位を授かりて。山に年經る狐なり。此頃汝が矢先に掛り。吾眷屬を失ふが。嘆かはしさに此に來れり。是よりしては野狐を。心の儘に招き寄する。呪文を授け得さす可し。是を射留めて眷屬をば。必らず過つ事なかれ。先づ試みに妾と共に。早やノ來れと立出づれば。帆助少しも疑はず。矢を負ひ弓を携へて。彼女の後を付き昇る事十餘丁。只ある處に件の女。緋扇子を差かざり。打招くと見へたるが。尾花の中より一匹の。狐ひらりと飛び出づる。帆助は直ぐに射て落し。繩以て腰に結付け。愈女の後につき。思はず數多の道を過ぎ。八劍がそはと言へる。此横根第一の。險阻へこそは至りけれ。其時女先の如く。彼方此方を打招ぎ。あれ〜數多出たるに。いで取らずやと進むれども。帆助の目

には遮ぎらず。そは何れにと山岸へ。何心なく立寄る處を。女ははたと突落し。かき消す如く失にけり。帆助は其儘絶へ入りて。更に前後も知らざりしが。日も高く上りて後。漸々に正氣付き。熟々と顧り見るに。身に傷は見ずと雖も。螺の如き岩のはざ間へ。落入りし其の上に。大石の覆ひ重なり。僅に首の出づるのみ。身を動かす事も能はず。既に先にも記し、如く。山第一の難處にて。落ちる者は上らずとて。地獄谷とも名を呼べる。恐ろしげなる處なるに。其上に大石の。斯の如く覆ひたれば。昇らん事は思ひも寄らず。此時に關右衛門が。意見初めて骨身に應へ。後悔しつゝ涙を流し。吾此國に生れながら。鳥海山を信せずとて。彼の御神の符守を。主人より給はりて。今猶ほ首に掛けてあり。かゝる深谷へ落入らば。身は粉に碎けて果つ可きに。些少傷も受けざるは。此御守の徳なる可しと。頻りに彼の山の方を。伏し拜みて居たりければ。鶴計りの大さなる。目馴れぬ鳥の一番。ぐみの如き實を結びし。木の枝を嘴にくわへ。是れを帆助に與へけるにそ。帆助其の實を口に含むに。氣力を増し飢を忘れ。忽ち心涼しくなりぬ。是れ疑もなき鳥海山の。御神の加護なれば。此處を出づる事もあらんと。頼母しく思ひて。愈信神なしにけり。休題却説或時語代關右衛門。今の帆助に打向ひ。吾は元武の家なり。文字を以て世を送るは。如何しても本意に非らず。去ればとて肩の骨を。傷めし上はせん方なし。是を療治なさんには。鳥海山に靈草あり。能く是を知り。鶴の卵を傷めし時に。彼

の草を取り來り。巢を打覆へば例へば一度。湯に入れたる卵なりとも。孵らずと言ふ事なし去りなから御神の。惜み給ひて取る事能はず。此頃聞けば横根山の。八劔がその下にも。彼の靈草の生ずる由。彼しこは俗に地獄谷とて。降り難き難所とやらんと。不圖語り出しければ今の帆助首を傾向け「己は紀州熊野に育ち。天狗が峯など言ふ。恐しき山に昇り。籠を釣りて其へ乗り。いと險しき崖へ寄り。岩茸を取る事を。童の時より習ひたれば。取れざる事はよも非じと。覺へし如くに籠を作り。綱の用意も調ひければ。主人と共に彼處へ行き。草の模様を詳しく聞き。大木に綱を纏ひ。籠に乗りてつる／＼と。谷の底へ下りけるが。稍有て綱をたぐり。元の道へ昇り來り。「思掛なき初めの帆助。斯様／＼の事共にて。此深谷に落てあり。去れども大石打覆て。吾力には助難しと。語を聞て關右衛門。大方ならず打驚き。「彼久しく音信せず。訝しと思しが。吾意見をういずして。此に隠れて居たりしよな。家來なからも吾貧苦を貢ぎたる恩人なり。救はずんは道に非ずと。籠に打乗り谷に降り。大石を跳のけて。先帆助を籠に乗せ。今の帆助に綱をたぐらせ。又再び籠を卸させ。己れも續て昇りければ。初めの帆助は夢見しが如く。ありし夜の事よりして。飢に望む其時は二ツの鳥の交／＼に。木の實を運びて與へし事など。落もなく物語。伏し拜みてぞ居たりける。此時に關右衛門。左の手を數多度。振り動かして大きに喜び。吾大石を押のけんと。力を極めし其時に。此左の肩先にて。が

つきりと響しが。喰違ひたる彼骨の。元の所へ治まりけん。昔に變る事はなし。早や靈草を得るに及ばず。初の帆助は此山に。今は住居を求めしとか。其へ行きて休息せんと。三人打連れ下りけり。初めの帆助指さしつゝ。「あれこそ己か住居なれ。久振にて歸りたれば。嵐に傾き塵も積り。見苦しく候可きと。言ひつゝ近くなる儘に。能く々々見ればあら不思議や。軒は新に萱にて袍き。破障子も張り改めて。有しよりは清げに出來。夫婦と見へてまだ若き。二人は此家を吾物顔に。悠々と住み居れり。呆れて暫し佇みしが。拔足に其處を立退き。少し道に遅れたる。關右衛門と今の帆助を。木影に招きて言ひけるは。見給ふ如く吾家には。早や人の來て居れり。鬚抜きて居る男の顔は。更に見知らぬども。緋の袴を外戸口にて。洗いで居る女房は狐なりとて山深く。吾を連れ行き彼の谷へ。突き落したる女に似たりと。聞て左こそと關右衛門。打領さずつと入り。鬚抜き鏡を持ちたる手を。振ち上げて提緒たぐり。伴の男を戒めたり今の帆助も彼女を。襟の緒にて搦り上げ。突き並べて引据へければ。初の帆助か今此へ。歸り來るを打見遣り。夫婦は暴抗ふ言葉もなく。「情に命を助けてと。打慄きて居るのみなり。關右衛門きつと居直り。「抑も汝等は何物にて。何等の譯にて彼の帆助を。害せんとは計りしか。包まず語らば望の如く。助遣らんと言ひければ。恐る／＼顔を揚げ。「己れは小羽田小兵衛次。門人の旅役者。薩破總藏と云ふ者なり。女房は柄抄とか。世に仇名する坂田の遊女。連れて驅

落したりしが。廓よりの追手厳しく。街道には佇兼ね。此よりは二丁程。彼方の家を買ひ求め
 是に隠れて住む内に。帆助殿は金も貯へ。着類も多く持たれしと聞いて。不圖悪念起り。持て
 居た官女の鬘衣裳で。女房の姿を作ろい。狐を一匹求め置き。吾は芒の内へ隠れ。女房が招く
 を合圖に。彼の狐を放遣り。誠と思はせ山深く。引入れて突落させ。上りし體も見えざれば。
 其身は碎けし者ならんと。此に移りて住みけるなりと。物語つゝ詫びければ。若氣に速やる今
 の帆助。天命知らずの奴原かな。公に訴へんと言ふを。制して初の帆助。偽りかたりと言ひな
 から。誠は神の彼等に託し。殺生の報を知らせ。著るき利益の程を。見せ給ひしも知る可から
 ず。去すれば怨は更になし。殊には己れが貯へし。金は柱を深く堀り。其處へ隠して置たれば
 探し得ずして其儘あり。彼等が持て來し衣類の類は。取り揃へて返し與へ。其儘放遣る可しと
 細解きほどけば。關右衛門も其意に委任せて二人の者へ。様々教訓ななければ。夫婦は蘇生の
 思をして。伏し拜みく。鯉藏は猶ほ身の上を。懺悔して言ひけるは。己れ元此國の。福又の
 生なるが。十五の年より三が年。近江の國へ武家奉公。今も知る人家中にあれば。當春は越前
 より。近江を掛けて世渡りの。其傳でに彼の御家へ。訪問し時古朋輩。善き折からと招き入れ
 汝か生國。鳥海山の一王子の大堂へ。一面の繪馬を懸く可き。若殿の奥方の。御願に依りて既
 に出來。生國の事なれば。是れより直ぐに立歸り。彼の繪馬を奉納せんや。路銀は申し下す可

しと。聞て畏み候と。直ぐに繪馬を受取りしが。既に此處迄歸りながら。古葛の底に打込み。
 今に於て繪馬を納す。其爲にとて給はりたる。路銀は酒色に使ひ失ひ。其上かゝる悪計。あら
 恐しの神罰やと。彼の繪馬を取り出せば。關右衛門つくく。見るに。長亨二年三月四日の誕生
 かめ。父居まさば神力にて。知らせ給へ。近江の國光栗家の近臣。石倉尉の助久秋の室と記し
 てあり。關右衛門顔色變り。懺悔に付て吾も亦。懺悔なす可き事の起れり。十六年の昔なりし
 が。己れ妻を失ひて。まだ三歳の女の子を。身貧に迫て養ひ兼ね。親知らずとか言ひ習わす。
 音信不通の契約にて。或人に遣りたるが。此繪馬の主こそは。疑ひもなき吾娘。偕ては無事に
 てありけるかど。額を抱て泣ければ。初の帆助も機嫌能く。私か懐へ。入れて其處此處乳を貰
 ひ。御育て申すと言ひ張たを。貴君様が御心強く。沙汰なしに御遣りなされ。腹の立たは今も
 忘れぬ。直ぐに御供と氣は急げども。何を言ふにも岩の中に。日敷を重ねて居た故。思ふ様に
 は歩行もすまい。此御行衛の知れたのも。鳥海山の皆御利益。又一つには鯉藏どの。懺悔よ
 りの事なれば。愈怨は残らぬと。頼りに喜び居たりけり。旅仕度に日を重ね。寒空に向ひな
 ば。發國は煩はしと。關右衛門は取急ぎ。今の帆助を供に連れ。漸く近江の國に着き。着代の
 衣物に形を改め。彼の石倉の屋敷へ行くに。棟門戸高く立續き。堂々たる構へなれば。心の内
 に驚かれ。己れ如きの貧しき者の。娘を娶る者ならば。僅か五石か十石の。武士ならんと推量

し。鯉藏に能くも問はず。若し聞き違へにあらんかど。遠侍の敷板へ。恐るゝ匂ひ寄りて「鳥海山へ掛けられたる。繪馬に付きて若殿の。奥方に申さん事あり。語代關右衛門參れりど。傳へ給へど述べければ。武士此由奥へ通じ。暫らくあつて此方へど。關右衛門を案内し。奥深き坐敷へ誘ひ。彼の武士はすべり出でぬ。此時に向方の繪襖子間。右と左に押し開かせ。花の如くの獨りの女衆。静やかに立出たり。大枚の笄は。地無し小袖に輝き合ひ。四方眩き心地して。思はず善くは見分難く。躊躇暇に近くより。「慰の助か宿の妻。満月とは妾なり。侍元共は遠避けつ。四方に憚る者もなし。是れへ〜とありけれど。關右衛門其威に呑まれ。はつど計りに躡まり。言葉なければ満月は。いと親しげに會釋なし。臍の緒書付と御姓名の。合ひたれば。疑ふには非ざれど。別に正しき證據もありや。幼かりし其時に。母上過ぎ行き給ひしは夢の如くに覺へながら。其餘の事は更に知らずと。若し關右衛門が名を知る者。偽りて來りしかど。心を引見る様なれば。關右衛門進み出で。臍の緒の其中には。鳥海山の守符。一枚を入れ置くのみ。此守ありし故に。一王子へ件の繪馬を。奉納ありし者ならん。曾祖父の時迄は。弘齋と名乗たるが。赤松に職せし時。汝奇代の力量あれば。是を以來名字となせど。舟に立たる五大力の。幟を主人満祐より。給はりし其後に。力は腕にあればとて。字を書き變へて梧代と呼び。赤松斷絶なしてより。父は出羽へ引籠れり。此血脈を受續ぐ者。非力なるは獨りもな

し。御身も力ありや無し哉ど。言ひ様三尺餘りなる。唐銅の手水鉢に。水波々と湛へしを。片手に受て見せければ。此時初めて疑解け。「偕ては誠の父上か。今奥方と冊かれ。思掛なく世に出しも。力を受續く故にてあり。妾を後に養ひたる。其人々も死失て。鏡の宿に賣り渡され。其時の名は只と呼べり。去れども主人の情にて。左迄憂き目も見ざりしが。初めを言へば斯様く。終りを言へばこうくにて。若殿の御種を宿し。彼の竹花屋に在りけるが。身の治りは如何にぞと。文して是に訪問しに。此方の父上尉右衛門。久兼様の御耳に入り。左迄力量ある女は。君の御役に立つ可なり。巴の子には義秀あり。善き孫を得るならん。例へ賤しき女にせよ。何かは苦しかる可きと。勿躰無御自身に。武佐の宿迄御迎へ。蒔繪の乗物狭箱。長刀持たせて鏡の宿を。打たせて通た其時に。彼の小々波屋の御夫婦は。實の娘の出世の様に。門戸へ馳出で御喜。此正月に安々と。生落したは殊に男子。虫氣も知らず丈夫な生れ。鳥海山の御利生にて。斯く父上には御目に掛る。早や此上には望はなしと。互に手に手を取り換し。嬉し涙に暮れにけり。「斯くて後石倉親子。關右衛門に對面し。數日此家に留め置て。より〜に試みるに。弓は更なり武術に達し。十餘年の勤學にて。又文道にも暗からねば。主人判官に推舉して。直ぐに光栗の家臣となしければ。關右衛門も大きに喜び。娘満月に言ひけるは。「御身が斯く有難。身の上となりたるも。元力ある故にてあり。其力有て武術を知らざるは。智有て學力

なきが如しど。是より長刀鎌。心を用いて教へければ。満月も誓古を勵み。多くの年を重ねずして。悉く奥技を極め。夫婦の中睦まじく。猶ほ數多の子を設け。舅姑に好く仕へ。家は愈富み榮へ。芽出度事のみ重なりて。程なく竹花屋の女房阿加奈も。男子を生めりどぞ。

出羽の巻 終

邯鄲諸國物語

大和の巻 前帙

忠臣不事二君、貞女不更二夫とは誰々も知る史記。田單附傳王蠋が詞なり、是卷は鐘三郎が二君に事て、災禍其身を亡じ、小篠が二夫を更て、苦辛するの談柄にて、巢林子二万翁の册子より出たれども、悪を記し善戒を垂とを旨趣として、事實の如く編りしかば、淨瑠璃歌舞伎に准へし、繪草紙よりは殊更興なく、繪様も又花美ならねど、竹馬芥鷄にかへて童子の翫弄と去給ば、勸善の端ともあらん歟。

天保六年乙未發春

柳亭種彦

邯鄂諸國物語

柳亭種彦

大和の巻前帙

近江の巻に物語し。光栗判官知輝の家臣に。茂山鐘三郎的具と言ふ者あり。彼が生立を尋るに
 往時よりして此光栗の家に仕へ。庖丁の事を預る。いと輕き料理人にてありければ。刀は佩せ
 ども諸武士に。肩を並べて交り難く。祿僅なれば家も貧しく。主人の用なき折々は。家中は更
 なり近き邊に。婚禮法事何くれと。客ある家に雇れて。料理の事を取賄ひ。謝禮を受て雜費に
 當て。果敢なく世を送りしが。此鐘三郎は父祖父に優りて。其業妙を得て。例へば金味いと鈍
 き。庖丁にもあれ彼が手して。打切るときは如何なる大魚の。頭も瓜を割か如し。此頃光栗の
 館へ左迄遠からぬ。稗が辻と言ふ處に。稻積一有齋とて。世に聞へし武者あり。或時家に客
 ありて。彼の鐘三郎を雇しかば。例の如くに左に眞魚箸。右に庖丁取持て。俎板に打向ひ。常
 の手練を顯しけるを。一有齋つらく見遣り。傍らの鯛を取り。「此魚鱗を引くに及ばず。只最
 中より二つにす可しと。鐘三郎が扣へたる。俎板に投遣りければ。「何にさせ給へると。言ひつ

持つたる庖丁にて。力も用いず彼の鯛を。二つに切りて差出すに。一有齋は驚贊め。「あら奇代なる手の牙へかな。我二刀には凡そ天下に。敵する者は有まじと。心に慢居たりしが。中々庖丁眞魚箸の。左右の働目の配り。其手練には及難し。是見よ只今切たる鯛には。口の内より尾先迄。鐵の火箸を某が。竊に差して置つるを。其と知らずに切たる奇術。憐れ御身是よりして。此翁の弟子となり。劍法を修業なし。其手の牙への太刀筋に。移る時んば三年を。待たずして抜群の。武者者となるべきに。寵の元を立廻り。生涯を送らんこと。あら惜可し。頻に嘆息したりしかば。鐘三郎言ひける様。「己に一人の姉ありしが。先年浪華の商人。福原屋と言へるへ嫁しつ。彼の家富るには非ざれども。世を安く暮す間。僅の米に繋れて。朝夕腰を屈めんより。此方へ來よと言ひ越しつれども。刀を捨つるも本意ならねば。其言葉に従はず。若し御門下に加へられ。万に一つも武藝にて。身を立つる事も有らば。是に越したる喜なしと。其日直ぐに新門して。一有齋の弟子となり。劍術誓古に心を委ね。日夜修精したりしかば實に一有齋が言葉に違はず。幾程もなく其術秀で。多年修業なしたりし。門人さへ彼に及ばず稻積流の奥技を極し。事の由を知輝の。近臣青崎藏人景範。委細に知りて件の趣。殿へ訴へたりしかば。奇特の事にあんなりとて。辱なくも鐘三郎が。料理人の役を轉じ。取來りし祿を増し。諸武士の其内へぞ。召加へ給ひける。抑々稻積一有齋が。妻は先の年に身罷り。只一人の

娘あり。其名を小佐見と呼びたるが。眉目麗しく其上に。伶俐しき生なりければ。或は高祿の侍。由緒正しき百姓。其彼より娶らんと。望む者も多かりけれど。一有齋を許さず。却て彼の鐘三郎に。送らん由を聞へければ。鐘三郎大きに驚き。「師の高恩にて人並に。劍法を覺へたるが。遂に主人の耳に入り。録をも増して給はれども。其も僅の事なれば。漸くに下男。一人ならねば養い難し。何とて尊師の御愛女を。小生如きが申受んと。恐れ入りて言ひければ。一有齋打笑ひ。「小佐美は老後に設し娘。某は七十に。程近くして餘命もなし。持傳へたる家財雜具。外に取る可き子もなければ。賣代となして暮すども。御身夫婦が兎も角も。世を過ぐる程はありなん。恩を知り義を守る。志こそ千貫の。知行に優りて頼母しけれど。強て小佐美を送りけり。是鐘三郎が武術に達し。其心柔和にて。色白く眉秀で。人柄も打上り。賤しからぬを小佐美日頃よりして悪からず。思ふ相振を一有齋も。兼て知りたる故なる可し。鐘三郎は思ひも掛ぬ。師の娘と言ひ特に又。數多の人の心に掛し。かゝる美人を妻となし。婿引手にて世に稀なる。菊一文字の刀は得つ。諸侍の列には加はり。其喜斜ならず。此趣姉にも言遣り只父母の世を早く。過ぎ行かれしのみ残り多く。是より益一有齋を。誠の親の如くに敬い。小佐美も操いと正しく。老實々々しげに仕へければ。夫婦の中の睦じさは。翅をかさね枝を連ぬる。其等の例も者ならず。程なく小佐美は妊身りて。玉の如くの男子を生み。名を京太郎と

呼びたるが。此京太郎八才の。春の頃より一有齋。不圖病の床に付き。水無月末にぞ世を去ぬ其の嘆にや此程より。風の心地と小佐美も打臥し。左迄の事も見へざりしが。思の外に病激しく。命も危かりけるが。療養疎ならざりければ。其驗顯はれて。漸々に本復なし。是より記す事もなく。月日も経て近江の巻に。詳しく説きたる熊瀬鬼門。兄弟二人が國中を。騷せたるは京太郎。拾壹才の時なりけり。去れば茂山鐘三郎も。日頃習ひ得たりし。武術を顯すは。此時なりと。彼の盜賊討手の事を。竊に願ひ出でたりしが。石倉尉の助久秋。青崎武者五郎景信早や先立て命ぜられ。遂に望を失ひて。彼の武者五郎景信は。己を見出せし恩人の。藏人の一子なり。よし左なくとも祿重き。近臣の子息なれば。強て願ひ出でたりとも。及びなき事を知り。只だ空しく拳を握り。祿の少なく身の輕きを。心に悔み居たりしが。或時に女房小佐美。湯を使い化粧して。新しき小袖を着變へつ。何處へか行くならんと。思へど出で行く躰もなく床の間に摩利支天の。御姿を掛け供物を捧げ。劍術誓古をなし。居たる京太郎を近く招き。夫の前に手を仕へ。何事にもあれ妾が言ふ事。必らず驚き給ふなど。つれ／＼と打守れば。鐘三郎眉を擡め。改りたる御身の言葉。驚きと断るにぞ。聞かぬ内より驚かれぬ。急ぎ語れと問ひける時。小佐美は猶ほも近く差し寄り。御覺ても御わす可し。四年以前の今年今日。妾の病甚しく。既に息も絶んとせしとき。父上信心したまひたる。妙定院の摩利支天を。心の中に深

く信じ。せめては我が子の十才迄。命を延し給はれど。題目數返唱へしかば。現に尊天顯れ給ひ。定業なれば汝の命。如何とも詮すべなし。去れども切なる願の趣。天帝へ訴へて。今日より三ヶ年。日に積りて千餘日は。健に此世にあらせん。猶ほも信心怠るまじと。告げ給ひしより清々と。心よくなりたるは。見給ふ如くに侍るなり。其の限りの日の今日なれば。早や臨終の近きに在り。變る姿を見せ申すが。何よりも耻かしければ。髪飾りも此の儘にて。柩へ納め煙となし。母様は眞言宗。御骨は高野の山に在り。父は知ろし召す如く。法華の堂場妙定院に。御亡軀を葬りたれば。妾の骨をば二つに分け。一ツは父の御側に納め。一ツは人にあつらへて。高野へ送り給はる可し。とくにも申す筈なりしが。御嘆の程を察し。今日迄包みてありし故。死に行く身とは知り給はず。御物好きの此小袖。下されたは五日以前。今が着初めの着納めど。成るも定まる命數なれば。嘆かせ給ひそ妾も嘆かじ。此小袖をば旗に縫ひ。何所なりとも納めてたべ。京太郎よ是よりは。父様一人になり給へば。愈々孝行盡す可し。言ひ置くる事も是迄ぞと。武術に心を練り給ひし。父の氣性を受繼げば。涙も落さず潔よく。言ひ終りて小袖を脱ぎ。白無垢着變へて覺悟の躰。泣よりも猶ほ哀なり。鐘三郎は茫然と。只打守り居たりしが。漸々に口を開き。思ひ出づれば御身の惱み。危く見へたる其時に。頻に空を伏し拜み何やらん。言ひたるが熱に侵され四度もなき。漫言を呟くならんと。心も留ず居たりしが。偕

ては其時尊天の。現に拜まれ給ひしか。其疑には非ざれど。今日は常より顔色善く。聊か病める氣色もなき。御身が何とて左る事有らん。先思はしき白小袖。脱ぎ代へて酒吸み交し。氣を爽に持ち給へど。進ても聞入れず。「何とて摩利尊天の。偽を告給ふ可き。若し生存なば優曇華の。花の御顔再び拜まん。夜明くる迄妾の寐屋を。必らず開き給ふなど。兼て用意やなしたりけん。一間處に閉籠り。内より樞を確と差し。押ども更に開かざりければ。鐘三郎は只呆れに呆れ。京太郎も早やあるくは。物の辨ありける程に。うろくとして泣惑を。様々に言ひこしらへ。先女房の言葉に従ひ。彼の一間は其儘差し置き。夜もすがら尊天の。御姿に打向ひ。心を凝して明くるを待ち。東明頃に一間に立寄り。差したる戸口に耳を寄せ。稍暫らく窺ふに。潜まりかへつて音もせず。大に怪しみ戸を開放ち。内に入て見てあれば。小佐美はきつと畏まり。西に向て手を合せ。顔色も更に變ぜず。眠が如く死てあり。斯は抑も如何にど打驚き。若し亡き魂の歸り來る。事もやあらんと様々に。祈り等せさせけれど。其甲斐更に涙に暮れ。親子兩人が其嘆きは。愚かの筆には書取難く。大凡にして皆漏しつ。斯くてあるべき事ならねば。其次々の夜遺言に。委せて野邊の煙となし。有爲轉變の世の有様。昨日の花の顔も今日一掬の塵となり。只香を焼き花を捧げ。後吊ふより外詮術なく。打濕りたる鐘三郎が。身の上には引代へて。石倉久秋。青崎景信。彼の盜賊を打平け。さんざめきて歸りしは。此小佐

美が初七日の。逮夜に當りし頃なりけり。國中ゆすりて彼等が功績を。賞めのめくを聞くに付け。又今小佐美が新々しき。位牌となりしを見るに付け。鐘三郎は兎に角に。浮世の中に飽き果て。仕官なすべき心も失せ。程なく忌も明けて後。青崎の藏人は。大人役なり殊には又。初め推舉の人なる故。彼處に趣き案内を乞ひ。面會なして長の暇を。給はりたき由願ひければ藏人暫く思案なし。御身何日ぞや盜賊の。討手を願ひ出でられしが。吾息子等に命ぜられ。其望を失なひしを。不快らず思ふの餘り。身退かん所存なる可し。此の處を善く聞かれよ。今治りし御世ながら。反逆を起す輩。あるまじきとも言ひ難し。其時には最先馳。功名手柄を顯すこそ。武士の本意と言ふ可けれ。此度のは多寡で盜賊。小息子共に相應故。御身に限らず武士らしき。者は彼處へ差し掛けず。見處ありて君に訴へ。御家臣の其内へ。加へ入れたる御邊の事。何とて粗畧になす可きと。道理正しく言ひければ。鐘三郎はつと平伏し。「某此頃手を挫き筆取るさへも儘ならねば。太刀拔く事は猶ほ更なり。じせんの御役に立ち難き。不具に近き身となりて。君の祿を食はんは。空恐しく候間。回國修業もなす可き存念。偽ならざる其記を。頓て料紙硯を乞ひ。右の腕の病に依り。武術の事は思ひも寄らず。よし御暇給はるとも。武藝を以て二君には。事へざる段々を。神文に認めつ。思込で願ひければ。藏人は兼てより。鐘三郎が廉直なるを。能く知りし上なれば。彼最愛の妻に後れ。其故の發心とは。言ひ出で難き

偽とは。心も付かず誠と思ひ。左あらばよしなに計らはんが。また年若の事なれば。養生だに加へなば。必らず本復近きにあらん。先其由は言上せん。心容易く思ふ可しと。彼の神文を納めければ。鐘三郎は一禮を述べて。宿所へ歸りけり。此に浪華の大和町に。福原屋徳兵衛とて。呉服商買をする者あり。店は格子戸引閉て。物淋しげに見ゆれども。久しく老舗で得意も増へ。何不足なき暮しにて。まだ若き頃近江より。京見物に昇りたる。娘を見たるが心に適ひ。頓て彼を貰ひ受け。おたえと呼んで妻となし。程なく男の子を設け。徳の助とて寵愛しつ去れば月日に關守なく。徳の助は十三歳。おたえも三十路の上を。五ッ六ッぞ越えたりける。是即ち鐘三郎が。實の姉にてありしかば。此家を頼りて來るにそ。おたえは大きに打驚き。やれ珍しや何として。此度は昇られし。其子は定めて京太郎。目元鈴しく色白にて。女の様な生れ付き。小佐美様も一所にか。まア伯母の側におぢや。ほんに何から言ふやら。此からの道乗も。二十里には足らぬども。私は世帯の暇なく。殊に女の事なれば。供一人でも下り難く其方は主人に仕ふる身。我儘には旅も成らず。只文の取交しで。互の無事を知る計り。遇はぬのはもう十七年。女は變り易ければ。私は昔の影もあるまい。其方は年のふけた計り。見違へるといふ程でもない。喜しげに言ひければ。鐘三郎も打絶へて。懐しかりし事を述べ。一偕て此度態々。私の參りしは。女房小佐美近頃病死。書通で申上げたる通り。光栗の家臣の數に

入りしは彼が父に。師南を受し故なれば。一方ならぬ恩ある妻。なか行末後妻を。向へん心嘗てなし。是より回國修業に出で立ち。先初め高野山へ。遺言なれば彼が骨を。納めて菩提を吊はん存念。羈絆となるは此息子。何卒此へ留め置かれ。若し望みてもあるならば。何處へなりとも遣りてたべ。今迄は鐘術を。怠たらず學ばせしが。今よりは十路盤の。指南をして給はる可し。嗚呼家柄のなき武士は。商人には遙に劣れり。我も此度盜賊の。討手を願ひ出でたりしが。若輩の者にし落され。口惜しさ故暇を願ひ。其事終むと片時も。屋敷に住む可き心なく。此頃風邪に侵されて。長髪ながら立退きしと。有りし事共物語れば。心を察しておたへも萎れ。小佐美様には只一度も。御目に掛らず打過ぎしが。善い御器量と言ふ事は。飛脚に下しし男の噂。此子に似たらば爾うでもあらう。確か御年も三十に。なるやならず果かない事。と言ふたどて嘆いたとて。命計は是非がない。此方にも此頃不幸のあり。徳兵衛殿の弟は。升形屋堂助殿とて。高麗橋にてあら物商買。私が嫁て來ぬ前に。此の家より堂助殿は。其升形家へ婿に行かれ。男の子も出來たれど。三年以前家付の。女房は病死され。去年の夏其後へ。呼び取られしはまだ年若。利發には見ゆれども。家内の示し子供の世話。覺束ないと此方の人も。蔭では噂されたれど。堂助殿の氣に入た。様子故に漸々。此頃披露をするやせず。堂助殿が又病死。後取は子供同然。殊には實の母はなし。兎角に家が不仕だら故。徳兵衛殿の何

かど厄介。今日も早く徳の助を。伴れて彼處へ行かれしが。日暮でなければ戻られまい。其方の事は隔りて。近江に住むより引取て。こゝへ居たら私の頼に。ならう様に昔から。此方の人と言ふてなれば。少しも案じる事はない。京太郎は徳の助と。丁度よい遊び對手。幸ひ風呂も沸たそうな。先緩るゝと休むがよいと。年月遇はねばと骨肉同胞。いと頼母しく聞へければ去らばとて湯あみしつ。打寛で居たりけり。斯くて鐘三郎は。徳兵衛に對面し。妻に後れて發心の。事共を語りければ。徳兵衛是れを委細に聞き。「貴殿未だ年も若し。浮世を思ひ離れんより。永く此地に留まりて。身の治まりを計るこそ。京太郎が爲なりと。初めは承引せざりしが。強て願をかなへてたべと。繰返して言ひければ。止まり難き氣色を悟り。「左あらば先づ回國の。修業者に出立て。高野山へ參詣し。妻の遺骨は納む可し。必らず共に髪を下し。迂濶に僧とはなり給ふな。去る者は疎しとやらん。年月経ちてせんもなき。菩提心を起しと。後悔なしと還俗せば。却て人に笑れん。武者修業なす者ななどが。六十六部の妙典を。修むる姿にやつ事。世になき事に非らざれば。其は苦しかるまじと。漸々に許しければ。鐘三郎大きに喜び。鐘鼓錫杖は更にも言はず。調度を調へ鼻より。譲られたる菊一文字は。幸に尺も左迄長がからねば。まさかの時の用意にと。元の妻の骨と諸共。笈の中へ隠し入れ。既に仕度も調ひて。京太郎が事夫婦の者へ。懇に頼み置き。別を告げて立出でつ。先住吉へ參詣し。堺を廻

り一夜泊り。左に折れて和泉に入り。赤畠の万代八幡。鉢が峯の長福寺。處々を順禮し。遠き道には非らざれど。元より急かぬ旅なれば。暮れば泊り明くれば立ち。只我儘に途を行き。河内に入りて天野山。烏帽子形山河合寺。三日市より清水岩瀬。後に見なして木の目峠。或はきいみ峠とも。所の人と言ひならず。坂道へ掛りしとき。申しと後より。呼止むる者あり。振却て其人を見るに。三十路に足らぬ女なり。いたく途に疲れし躰にて。髪も亂れ衣物は。土塵に穢れながら。襦袢れいと清く。中々斯かる山途へ。供をも伴れず只獨り。來たる可き人ならず。去れども伴立つ人もなく。荷布呂敷の包を背ひ。手に笠を持ちたるが。鐘三郎が袖をひかへ。「下岩瀬の酒店にて。籠昇の仲間喧嘩。息杖持て打合ふを。貴方が見兼ねて先々互に。了簡せいと止め給ひし。其時彼等は却て腹立ち。修業者の無用の妨。是からは己が對手ぞと。兩方一度に打掛るを。其錫杖にて一寸と止め。身を交されると兩人はばつたり。倒たまゝにて起上らず。恐れ入て喧嘩も其切り。はて頼母しいお方ぞと。後に追いて参りました。確に貴方は御侍。御見掛け申して御頼を。何卒かなへ給はれと。様子有りげに言たれば。鐘三郎打鎖き。「言はるゝ如く元は武士。力の及ぶ事ならば。何なりと云ひ給へど。傍への石に休らへば。彼の女は嬉しげに。猶すり寄り云へるやう。「私夫は浪華の商人。近頃病死致せしが。臨終の折吾骨は。高野山に納めよと。呉れゝの遺言故。手代一人を供に伴れ。御覽の如くの旅立。思掛

なや彼の手代。慾に迷ふて心の變り。態と有られぬ道へ誘ひ。旅用は元より着類の類。皆かき集めて夜の間に欠落。まだ幸は夫の骨。片時も身を放たねば。其は残りて包にあり。僅計りの小間金を。鏡袋に入れ置しを。思出して茲迄は。漸々に來りしが。はや其さへもかれくりに。なり行くのみか道は知ず。女の身空で只獨り。心細さを推量あり。何卒山の麓迄。御伴れなされて下さらば。宏大無邊の御慈悲ぞと。涙を流して頼むにぞ。鐘三郎も目をしば叩き。「世に似た事もある者かな。吾も此頃妻を先立て。其骨を遺言にて。彼處へ納に行く道なり。身につまされていとをしく。心使ひをし給ふな。泊りくも取賄ひ。又歸るさも浪華迄。送り届て進んず可し。某とても參詣は。初てなから此山を。越れば紀の路の橋本なり。いざそろくど連立たんが。旅の女中と呼ばんのも。耳立ちて聞悪くかる可し。名は何とか言ひ給ふと。問はれて少し口籠り。「今では小篋と申します。「何に小篋。みの字の一字違ひし計り。覺へ能くてよし」と。思掛なき連を得て。浮世語りに疲も。忘れて何時か峠を下り。はや橋本に着きけれど。日もまだ高く見えければ。緩るくと打休み。籠を雇ひて小篋を乗せ。かむろの宿に至りし頃。漸く雀いろときなり。偕て此宿には近き内。大和の國の郡司。何某殿の到着にて。滞留ある可き用意とて。本陣初め家外戸廣きは。旅人を留めざりければ。混雜大方ならずして。泊る可き處なし。左なきだに鐘三郎は。修業者の事にてあれば。果敢々々しき方を頼み。宿るべ

き身にも非らず。漸々にして軒端も傾き。いと佗しげなる殖生の小屋。水風呂桶のたが切れて湯をさへ立てぬ木賃宿に。今宵は一夜明さんどと。小篋諸共宿りにければ。夫婦の連ぞと思ひ違へ。是にて一つに寐給へど。夜の物も多く貸さず。詮術なくも背差向け。熟睡んとしたりしが。其名の似たりしのみならず。何とやらん過去りし。女房の面影を。思出して眠られず。鐘三郎はそつと起き出で。香を焼て心を清め。箒を開て本尊に。燈光を捧げつ。念佛唱へて夜すがら寐ず。朝未明に飯しため。兼て御山は坂道多く。駕籠にては昇り難きと。聞き置きたれば女の足の。後に疲れん事を案じ。小篋は昨夜能く寐て。はや疲れも忘れしと。言ふのを強て此より三里。神谷の宿迄駕籠にて誘ひ。歩行路となれば猶更に。心を付けて勤りつ。音に聞へし不動猿。四十岩等いと險しき。路を漸々攀ち昇れば。歩むに安き平地となり。左の方に聳へし山を。後にあてし造りしこそ。彼の女人堂なるべけれど。兩人は立寄り伏拜み。案内を乞ふて彼の座敷へ。打通りてつらく見るに。百人を留むるに。猶狹まからず作りなし。篋を以て山水を。直ぐに風呂屋の内へ取り。見上ぐる計りに薪木を積み。其自由さ宏大さ。聞きしに優る御山の。富は此より先顯はれ。目を驚かし打寛ぎ。茶を飲み飯を契して後。鐘三郎の言ひける様。「奥の院へは僅に一里。殊には道も平にて。更に難所もなき由なれば。吾は直く様參詣せん。向ひに見えたる木戸めく者の。内へは女を入れずと言へば。此に留まり待ち給へ。故

主の館在し時。此の坊にも知る人あり。其を尋ねて今宵は宿り。御身の夫と吾妻の。骨を治めて立ち歸らん。日ッ拜をも付け給へ。立替置く可き用意はありと。深切に聞こへければ。小笹は只泣きに泣き。御禮は言葉に盡し難し。左あらば是をど夫の骨に。法名月日を書き付けたる一ひらの紙を添へ。渡せば直ぐに受け收め。立出でたるが小戻りして。山風激しく今日は冷へぬ。見うけし處が肌薄にて。顔の色つやいと悪ろしと。箆の上なる包を解き。打重ねたる小袖を取出し。言ふのも愚痴には似たれども。仕立し計りに手も通さず。果敢なくなりし妻の片身去れば汚は更になし。是着て寒を凌ぎ給へ。旗に縫はんと思ひしが。人が難儀を救ふのは。其に優りし功德にこそと。小笹に與へて後の事。此の法師に打頼み。女人堂をぞ立出ける。光栗家も高野大師を。久しく信仰給ひて。此の御山の何々院は。度々近江へ下りし故。鐘三郎も能く知りつ。其より彼處に尋ね行き。手の傷にて暇を乞ひ。回國修業に出でたる由を。物語りなしければ。其は奇特の事なりとて。一間處に案内し。高野山の七度食とか。諺にも言ふ通り。此の習に候と。食上餅よと取變へ引變へ。様々に待遇なされ。愈々道の疲も安うなり。此院に二夜宿し。諸堂を残らず順禮なし果て。別れを告げて又元の。女人堂へ立歸れば。小笹それと聞くよりも。いと嬉しげに出迎へ。御歸を待兼ねしと。言ふ顔を能く見るに。女房小佐美が又再び此世へ歸りし心地せられ。其品形に至る迄。別の人とは思はれず。初めの程より面影の。似た

りと心は付きながら。斯く迄にはなかりしが。あゝ迷ふたりと。取落したる鈴取上げ。眼を押眠りて居たりけり。是は小笹が亂たる。髪を取揚げ湯沐みして。小佐美の小袖を着たりしかば。旅の囊もあてやかなる。姿に歸りて此程よりも。見優りたる故なる可し。小笹の夫は色黒く。形も賤しくありしかば。鐘三郎には比べ難し。去れども心いと優しく。深切なりしに絆されて。小笹は外に娶らんと。言ふ者ありしを振捨て。彼が妻とはなつたるなり。然るに不思議の災難より。鐘三郎を打頼み。介抱は受くる物から。仇めく心の其に又。移ると言ふには非ざれど。割なく勞りくる様と。兼ねては夫に違はねば。思ひ出す事いと多く。果なく過ぎし其人を。頻に戀しく思ひけり。此時に鐘三郎は。佛に懺悔し漸々に。心を静め目を開き。兩人の骨を障なく。納し事を物語り。直ぐに立たんとしたりしかば。小笹は小袖を脱ぎ更へるを振り却り見て押し止め。湯經子を其上に。引掛て端折りなば。左迄に目にも立つまじと。兎角なす間に晝にもなりぬ。支度を調へ立出て。例の險しき坂道も。下りには少し安く。去れども女の事なれば。道果取らず漸々に。神谷をば過ぎたるが。かむろ迄は心許なく。殊に群司の宿りにて。彼處は混雜すると思ひ。其より一里南なる。かねと言ふ處にて。木錢宿にはありながら。聊か廣きへ日暮れて宿り。屏風を隔て。小笹とは。引離れてぞ臥したりける。其夜は村雨吹き注ぎ。風に落葉のはらりと。窓打つ音の物淋しく。鐘三郎は目を開き。見れば近江の住

居にて。小佐美は夜のべに京太郎が。羽織を縫ひ果て。火延を掛けまだ忙しげに起てあり。是れ一睡の夢なれど。今迄現にありし事を。却て夢と思ひ違ひ。是をば更に夢とは知らず。鐘三郎は太息付き。「言はぬも胸の苦しければ。聞ゆるなれど必らずとも。氣に掛給ひそ病もなく。其方は果敢なく此世を去り。吾ら暇を給はりて。回國と志し。高野山へ行く道にて。云々の女に遇ひ。其歸る途にかねの宿にて宿りたる。其迄を長がくしくも夢見たり。窓打つ音と聞きたるは。火延を扇く其團羽の。音にこそありつらめど。始終を物語れば。小佐美は殊に機嫌善く。火延を火入に取移し。煙草吸付け差出しながら。「誠に夢は逆夢と。世の諺にも言ひ習はす。さぞ私は長生を。致す事で御座りましよう。珍しひ其女中と。兩人御泊り遊して。面白そうな處とは。知らずにあたふた立歩き。遂御目を覺さしました。先此羽織も明日から。京太郎に着せられる。どれ私もゆるくど。休みましやうと枕を取る。姿を暗き火の影に。鐘三郎は見覘して。「其方は近頃造しらへた。下着を寝巻になせしやると。咎められて打ち微笑み。「何日ぞや一寸此小袖は。引掛て見た計り。其から何處へも行かぬ故。今日迄仕舞ふて置たれど。何ういふ事か今ふつと。着て見たふ爲つたから。箆笥の中から引出し。着たれば子供の様なれど。肌當りが柔和で。どうも脱くのか嫌になり。世帯知らずの遂其なり。古臭い女房でも。寝巻小袖の柔かな。手探ぐり計りは全盛な。あやまや藝子に變りはあるまい。なアもうし旦那様と。

打戯れて寐たりしが。程なく明けぬと告渡る。遠寺の鐘や鳥の聲。耳に入て鐘三郎。誠に覺て茫然と。四方を見れば思ひも掛けぬ。宵には寐屋を隔てたる。小笹は何日の程よりか。同じ臥房に打眠り。彼の先の程咎めたる。小袖を寝巻に着て居れり。偕ては今迄小佐美と心得。語らいたるは彼なるかど。餘りの事の淺間しさに。思はず獨りつぶやくが。是も寐耳に入つたりけん。小笹も目覺めてはつと驚き。るざり退いて差し俯き。「喃情なやいたずらなる女と。蔑すみ給はんが。有しに違はず過ぎ行きし。夫の様々來り給ひ。「偕ては御身も其夢を。「貴方も御果てなされたる。妻と思ひてこは何とせん。淺間しやと計りに。暫し言葉もなかりしが。鐘三郎形を正し。「今更悔みて歸らぬ事。左はさりながら心より。互に侵し、罪には非ねば。佛に詫びて道心を。我は愈々堅固にせん。御身も益々操を正し。夫の無き後吊らはれよ。元某が生國は。近江なれども幸ひに。福原屋徳兵衛とて。大和町に姉婿あり。御身も浪波の者と聞く。先々是へ同道せんと。聞て小笹は猶驚き。「そんなら貴方は御絶様の。弟子にて茂山様とか。御被仰る御方に侍るかど。問はれて此方も訝く。「如何にも吾は鐘三郎。して又其を何として。御身は知りて居給ふと。言はれて小笹は顔打赤め。「私夫は升形屋堂助とて。御仰つた徳兵衛様の。實の弟子。御たへ様の御身内と。貴方を今朝迄知らぬ故。きいみ時で身の上を。申上げたは大概にて。實は再び升形屋へ。歸り兼ねたる此度の災難。御聞きなされて下さりませと。うるむ涙

を振り拂ひ。すり寄て聲を響め。「私は雪野とて。京都祇園に舞子の勤め。堂助殿が商買に。昇らるゝ度々に。染み重ねてはや六年。お妻女が没去なられ。其後縁あつて迎へられ。表て晴れで女夫となつたは。去ねん水無月末の頃。先々嬉しやと思ふ間も。泣くも泣れぬ堂助殿の。此春よりの大病に。薬も加禱も現しなく。遂に果なくなられしは。何日ぞや申し上げたる通り。去りなから其折は。私の名さへ包み。小笹と言ひしは彼の峠に。多く根篠の繁りしを。其の儘言ひし偽にて。升形屋へ来て後は。野の字を抜きて雪と呼ぶ。此の身は却て消へやらぬと。打嘆けば鯖六とて。彼處に久しき手代の男。竊やかに私へ向ひ。其様にくよ〜と。思召ても歸らぬ事。旦那様が御臨終の。二日前に御仰しやるには。己が骨は菩提所へ。葬る様に人に見せ。隠して置ても雪に渡し。手前計が供をして。高野山へ參らせて。骨堂へ納めて呉れ。福原屋の夫婦が聞かば。定めて留めるであらう程に。家内の者にも沙汰するなど。御遺言が御座つたから。支度は残らず調へました。此夜人の寐静まるを。待て御立なされませと。信切らしき言葉といひ。殊更常々彼の御山を。信仰されしは誠なれば。欺かるゝとは夢々知らず。人に隠れて其夜に旅立ち。元より途も方向も。知らねば頼みは鯖六計り。二日路程も行きて後。龜山途と書いたる記し。堤に立てゝありしに目の附き。心得難く荷物を下させ。腰打掛けて暫く休み。「高野山へ浪波より。左迄に遠くもないと聞く。此は何と言ふ處で。道は是より何程あると

不圖問ひ出づれば。鯖六は呵々と打笑ひ。「是見給へと吾袖を。まくり上げて差し突くるを。見れば腕にお雪命と。何日の間にやら入ほくろ。はつと思へど驚かぬ。風情に態と待遇して。「其方の床りの名は問はぬ。此はもう紀州かど。言ふを押止め身近くすり寄り。「此は丹羽で我在所是からは僅に五六里。其處へ伴立ち申さんと。はや龜山をも越へたれば。高野山へは遙の道。旦那の骨は人に頼み。納めだにすればよい。是れ見せた上からは。今更くど〜言ふにも及ばず遠より御身に執心ながら。流石に口へは出し難し。待てば甘露の日和とやら。家の不幸は我身の幸。よし主人でも今では後家。殊には何程包まれても。元は舞子といふ事を。家内に知らぬ者はなし。あれでは後が治らぬと。徳兵殿も蔭では噂さ。是より若旦那をより立てゝ居られても店の者にも侮られ。口惜き目を見給ふが。何ぼうかいとをしい。吾等が在所へ同道して。身を吾儘に持たせんと。高野山へ行くど偽り。驅落したる忠臣者。悪ふは思ひ給ふまじと。言はれて胸は沸へ返り。喰付ても遣らふかど。腹の立つのを押鎮め。「昔は道の柳にて。往來の人の手折次第。素直に委せし身にもせよ。三日なりども定まりし。夫を待てば園の梅。香も墻の外へは散さじ。御身は幼時よりも。升形屋へ奉公して。大恩受けしと常々話し。其を忘しも私故。辱ないとも言ひ難きは。まだ年のある此軀。多くの金にて身の儘に。なし給はりし其人の。世に御出せねば猶更に。身を慎むが女の道。其程思ふ心なら。堂助殿の存生に。何故打開

けて言ひ給はぬ。當座の花の戯れより。のくに退れず呼取て。下されたれど漸々に。女房の披露はまだ近頃。其前ならば許を受け。夫婦となられる事もあらうに。え、遅かつた、と。泣つ口説の様々に。意見したれば鯖六も。しよせん心に従はぬと。思ふてか初めに變り。悄悄として言葉を和らげ。段々どの罪を詫び。是より思切る間。人に沙汰して給はるなど只管後悔して。一宿戻りて宿りしも。私に心を許さず。矢張彼が偽にて。皆かひ集めて其夜に驅落升形屋では鯖六と。不義して私も諸共に。逃げたと思ふて居るのは必定。今立戻て斯様、と。言ふたどて證據はなし。人にも告げず最夜中に。旅立つたのが身の誤り。幼ない時に父様母様御果てなされて頼りはなし。御骨を納めた其後に。自害と心を定めなから。思ひ掛無御介抱受たが此身の絆となり。今更どうも死なれませぬ。現にもせよ夢にもせよ。約束事と諦めて。伴て退て給はれど。顔に諸袖押當て。伏し沈みてぞ泣居たる。鐘三郎も小首を傾け。堂助殿の死去されて。後添ひが若い故。何にか家内の不仕だらと。福原屋夫婦の話。今思ひ合すれば鯖六が兼てより。此方に氣色のある事を。推量されたる故なる可し。偕て氣の毒は御身の上。吾も共々鯖六が。悪事の事を言ひ解きなば。其の身の明りは立つにもせよ。心の鬼の恐ろしく打連れ立て福原屋へ。のめ、と歸り難し。又打付に吾女房に。給はれと言ひだしなば承引さるゝ事もあらんが。吾なき妻は師匠の娘。恩義の人なり殊に又。十をも越し男子のあり。重

ねて妻は迎へむと。言ひ放ちたる言葉の立たず。吾身捨つれば御身は死ぬ。とあつて行くべき家もなし。はて何とせん、と。思案に暮るゝ表の方。御亭主は御宿にか。禿の宿より來ましが。知ての通り一昨日から大和の郡司。花城千早の助様が。玉津島御參詣の御歸りに。御滞留中御連れなされし。御料理人が病氣故に。種々と手を盡くして。差上げて町風の獻立では。殿の御意に入り兼ねる。殿様方の上る者に。馴れた者はあるまいか。思召にかなふと直ぐに。御扶持人になれるが。尋ぬる所には無い者と。彼處の宿の歩にや。語る高聲耳に入り。鐘三郎は心に領き。吾武を以ては仕へむと。既に誓紙は書きたれども。其だに深く慎まば。上の谷の恐はなし。幸なるかな是に取り入り。小笹と共に兎も角も。身の治りを計らんと。思案を定めて表に出で。己は武士の浪人なるが。四條流。大草流。凡て料理の一通りは。能く心得て候なり。口入頼むと言ければ。彼男大いに喜び。此の主人は能く人の。世話する事が好なる故一里の道を能々と。頼みに來たが其れを待たず。此方がいつて下さらば。事が早く濟でよいと言ひつゝ、つゝ、打見遣り。何程料理が巧者でも。六部殿の姿では。どうも連れて行き悪くひと。もむ、すれば打笑ひ。袴はなけれど着更大小。見苦からぬを用意せり。髪結は呼べまいかど。言ふに小笹は立寄て。善くはなけれど月代も。何うやら此うやら剃ります。御心持地が悪くとも。早い方が善さそうなど。宿の女に櫛道具。借りれば件の男も心得。月代の湯を汲

み來り。兎角なして鐘三郎。支度も頓て調ひければ。彼の男と打連立ち。かむろの宿へ急げり。抑々先にも記し、如く。花城千早の助知一は。大和の國に聞へたる。高市郡の司にて。彼の光栗には及ばずながら。系圖正しく家富みて。名高き家臣も多くあり。未だ紀の路を遊覽せざれば。此度態々思立ち。高野山を初とし。和歌の浦加田の浦。名所くを打廻り。供の者の疲を休め。歸國せんとして禿の宿に。暫し滯留ありけるなり。去程に先の男は。鐘三郎を誘ひ來り。云々の由言ひ入れければ。花城の老臣本竹喜太夫。其れ此方へと招きいれ。立出で面會なし。吾名を通せし其後に。生國姓名尋ねられ。鐘三郎は謹みて。某は美濃の浪人。落窪鍾三と申す者。元より田舎武士なれば。武藝は更に存せねど。御用の筋は幼きより。好の道にて聊か計り心覺の候と。名を畧し名字を變へ。生國をさへ隣國に。取つくろいて聞へければ。喜太夫は打領き。夕御膳を取急げば。何かの事は用果て。明日又聞かん此者を。臺所へ案内せよと。言ひ捨て、立けるにぞ。鐘三郎は是よりして。其々の指圖を受け。久振にて庖丁は。持てども名を得し上手なれば。人々の目を驚かせ。其夜は彼處に留められ。夜明けて後に本竹喜太夫。再び彼を近く呼びて。其の許の御手際。主人ことなう心に格ひ。浪人ならば直ぐ様に。召抱へんどの事にてあり。武士受とか言習はず。屋敷の規もあるなれど。大和へ御供された上。取り極めて遅からず。昨夜より和殿の様子を。吾もつらく打見るに。人柄の打上り。立振舞も賤

しからぬは。確に由緒のある人。思定めて出所をも。強ちに聞糺さす。召連れられ候とも。當人たに得心せば。差問なしと言上せりと。懇に言ひければ。鐘三郎はつと平伏し。有難き仰せの趣。何とて違背仕らん。武士の身寄は候はねど。浪華には徳兵衛とて。姉婚の一人あり。吾子息をも彼のものに。預け置きて候得ば。御受は彼を頼まんが。直くに御供を願ひ難きは。愚妻を連れて只今は。高野山より戻り道。即ちかねに待たせ置く。彼を獨り捨て置きてと。言さして太息を付き。此故に候と。聞て喜太夫につこと笑ひ。其のみならば配慮あるな。貴殿一先かねへ戻り。内方をも同道あれ。當宿にて又別れ。一軒の宿を吩咐。先其に留め置き。御立の節は我々ど。諸共に和殿は御供内方をば。一日路後より大和へ。送の駕籠は用意させて。置く可きなりと。聞て益々打喜び。さあらばとてかねへ戻り。斯様く小笹へ語り。修業の道具は望手も。あらば譲りて遣り給へと。其宿に残し置き。小笹を連れて又再び。かむろへこそは來たりけれ。かゝりければ落窪鍾三と。姓名を呼び改め。其日直ぐに千早の助が。目見へ首尾能く相濟みて。袴。野羽織。足袋の衣類は。彼の喜太夫が承はり。取揃へて渡すにぞ。元の武士の姿に返り。二三日過ぎて後。まだほの暗きに此宿を。千早の助の出立にて。鐘三も供の内に加はり。行列亂さずだいな笠立笠。松の木の間伊達道具。見えつ隠れつねり行くを。後に残りし小笹も立出で。打見居りて佇む折しも。是も同じく花城の家來。黒塚の官六郎。出立さ

れたる旅宿の片付。手づから提燈提げて。隅々迄も打廻り。表へ出ればほのくど。はや人顔も見へ渡るに。何心なく小笹を眺め。眉を擡て下郎を呼び。あの女は何者ぞ。彼に知らさず側に。此頃内の旅宿の女房。立列で居ること。幸竊に問ひて吾に告げよ。提燈消せと言捨て。足早に立ち去るを。小笹は心付かざりけり。去程に千早の助。程なく高市の館に入られ。新参りの落窪鐘三も。其日住む可き家を給はり。明くれば小笹も恙なく。駕籠にて送られ來りしが。福原屋より其子をはや。呼寄せて遇せ給へど。頼めば實にもと人を雇ひ。小笹の事は深く包み。再び仕官の事をのみ。大和町へ言遣りければ。徳兵衛夫婦は初より。鐘三郎が發心を不得心にてありし故。此書状を見て大きに喜び。向ひに寄せし人のみにては。安心せずとや思ひけん。手代を添へて京太郎を。彼の高市なる花城の館に。頓て送り遣しけり。小笹は折善く外戸に居て。兼て知りたる福原屋の。手代の來たるを遠目に見付け。云々と鐘三に囁き一間に隠れて面を遇はさず。鐘三は去あらぬ風情にて。返事を認め送りを歸し。京太郎を小笹に遇はせ。斯りし後は媒介も頼ず。遂に夫婦となり。次の年に男子を設け。梅の助と名付しか。小笹は心從順にて。實子より猶ほ京太郎を。心を付けて恤りければ。彼も又眞實の。母の如くに孝を盡くし。凡て家内睦む。兩人の子供の生長を。夫婦は樂しみ暮しけり。

大和の巻前帙 終

郡鄂諸國物語

柳亭種彦

大和の巻後帙

花城の館に程遠からぬ。東大寺の鎮守の神は。正八幡宮なりけるが。靈顯事に著しく。参詣する者いと多し。千早の助も信仰ありて。此度新に社の傍りに。繪馬堂をぞ立られける。高市の者其れく。奉納したる其中に。盃に鍵を卸し。願主大申團吾と書きたる。小さやかなる額のあり。或日彼の落窪鐘三。家内の者を引連れて。彼處へ参詣したる時。不圖此の繪馬の目に留り。其所以を知らざりければ。彼れは如何なる言はれぞと。茶屋の女に尋ねけるに。女笑て答へて言ふ様。知り給はずや。彼の類は。近頃流行者にてあり。酒の上の悪き人。又は病に關ると知りつ。酒を過ぐす人など。神に誓ひて酒を絶ち。盃を再び取らむと。其記に彼の如く。鏡を卸して捧くれども。良もすれば其を破り。罰を被る者もありと。語れば小笹は打微笑て。止められぬ程なれば。神を頼むに及ばぬ事。なアもうし此方の人と。言へばほくく打領き。己か様に生付ての。下戸には更に分らぬ事。どれ茶を今一杯此の様に。呑では茶に酔かも

知れぬ。茶子杓へ錠を卸した。額でも上げずばなるまいと。打戯れて何氣なく。立歸りしが。心の内に。つく／＼と思ふ様。吾一有齋の教を受け。劍術を勵しより。心に滲て面白く。忘れ難きは此道のみ。去れどを恩人藏人へ。誓ひし言葉もあんなれば。慎みに慎めども。家中の者が法に外れし。劍術を學ぶを見るに。心の底に焦躁く。其は斯々是は斯うと。教へて彼等に立合はんと。思ふ事度々なれば。盃の額に倣ひ。八幡宮に誓を立てんと。木刀へ錠を卸し。繪馬を彼處へ奉り。夫より愈々武道の事は。物語にさへ慎みつ。只人の無き折々に。京太郎へは教へけるが。彼能く父の手筋を受續ぎ。十五歳の程には早や。稻積流の奥義を極め。未頼母しくぞ思はれける。當殿花城千早の助は。其年未だ幼しと雖ども。月を眺め花を賞づる。遊樂は却て好す。只明暮兵術の。誓古に怠りなかりしかど。上を見倣ふ下とやらん。家中の者も武を磨き。大ぼろ組小ぼろ組とて。走使の。いと輕き。侍迄も劍術柔術を。心掛けざる者はなし。此大ぼろ組を預るは。彼の本竹喜太夫なり。彼も武藝は秀でながら。老年故に人用いず。小ぼろ組の頭役。黒塚の官六郎は。其年漸く三十餘。まだ盛と言ひ鎗劍法。凡ての武術に秀でたりと。其噂高かりければ。家中は大方彼に従ひ。既に當殿千早の助も。去頃よりして官六郎に。指南を受け給ひけるにぞ。其勢花城の館に。肩を並ぶる者はなし。抑々彼が人となり。奸嫉にして邪智深く。人を侮り身を高振り。吾に諛言諛らふ者は。馴付け置きて誠に。君へ忠義無

二の人々も。己に疎は諛言し。其行一ツも宜からず。例へて武術に詳しくとも。斯かる無道の侍を取り用ひ給ひなば。御家の亂るゝ端ならんと。心に思ひ竊々。嘯く輩はありなから。君の寵臣殊には御師範。小ぼろ組を預り持つは。重役といひ迂濶には。言出難くて胸を摩り。拳を握り官六郎を。憎める者さへ多くあり。偕て或日官六郎。弟官八と差向ひ。己が家に他人ませず。酒打飲みて居る處へ。不圖入り來たるは天原流波。是は近年官六郎が推舉によりて花城より。扶持を給はる醫者にてあり。一寸と式代盃を。差すのも待たず直ぐに取上げ。俗に申す口果報。さて善ひ處へ參り合せた。御兄弟計りでは。貴方がたも御淋しからう。すりや兩汰目と申す者ど。獨呑込み續けて四五杯。官八は打笑ひ。「何日も氣輕な流波老。兄者人の氣の浮く話が。あらば何ぞ聞きたいもの。知ての通り不幸に遇はれ。兎角御氣の結ばれか。御顔色も宜しからず。其故一二種魚を造しらへ。燗を付けて始めた處と。語れば流波太息を付き。「御總領の綾七様は。まだ確御五ツ位。其を御殘遊して。御年若で御新造が。御果てなされた事ぢやもの。どう輕口を申したとて。御氣の浮ぶ筈がない。愚老が。治療を御受けなされば。御本復は遠からずと。申上げてても御用なく。扱て是非なき造化と。眞面目になれば官六郎。「話相對に丁度能く。來たと思へば百か日も。濟んだ女房の又悔みか。其では愈々氣が迷入る。悴綾七は乳母に能く。馴じて居れば苦にもならず。女房はあれよりも。若い美しいのを世話して呉れ。官八

肴が餘りない。何ぞ淡泊した者との。言葉に流波取次で、「確旦那は擦り芋に。酢を掛けたのが御好物。幸ひ持たせて参つたを。御目に掛けんが御話が。悔に聞へて叱られた。其後へ又精進者ど。愈々御氣に入らぬも知れぬ。と。座を退きて供の者に。擔かせ來たりし自然薯の。長芋を臺に載せ。捧げ出るを黒塚兄弟。見れば其丈二尋餘り。太さは二尺も回りつ可し。「斯る芋も有るものか。是は是はと賞けるにぞ。流波は扇を釋に取り。したり顔に押直居り。「抑々是はと言ひ出すと。何うやら飛だ禮法の。言立の様になれど。吉野の奥せいごうの。瀧のほとりに年經る山芋。藥にせよと彼の地より。今日到來仕る。自然薯は散薬とて。藥にも使へども。左迄功ある者にも非らず。粉にして呑むは此様に。大いにも及ばぬ事。其より此儘使方も。ありさうな者と存じ。藥箱の棒に結び付け。擔がせて参つたが。何と是を擦芋にと。言ふを押止め官六郎。「世に珍しき物なるを。無残々々食はんも心なし。幸ひ今日は殿様に。御客來四五輩あり。此儘にて献上なさば。何よりの御待遇なし。善い物を呉れやつたと。言ひつゝ立て此頃抱へし。木偶内と言ふ草履取。心利たる者なるを。縁先迄近く呼び寄せ。「自然薯の此長芋。折れざる様に御臺所へ。持て参て御料理人。落窪鐘三を呼び出し。御獻立の其外に。然る可く是れを料理し。先づ盛り上げて置く可きなり。旦那後刻出仕の時。一通り檢分なし。其上上へ差上げんと。申付て置く可しと。言ひ終りて又元の。座敷へ戻れば流波はにこ〜。「自然薯が鱧昇りに。出

世して御前へ上げれば。此上もなき愚老の大慶。いや出世と言へば鐘三が悴。京太郎は偕て善い氣量、幼衆好きの殿様故。奉公させたら千石取り。今日も確親と一所に。御料理の間に詰て居た。もし官八様貴方は又。京太郎の母を、御覽なされましたが。召使も小女一人。家内の賄子供の世話。紅かね付ず作るはず。憔悴しだいて居り升が。其美しさ〜、先第一に年が若い。どうしてあんな大きな子が。あるかと御家中一ぱい評判。何と鐘三は僥倖者と。言掛けて四方をきよろ〜。「官八様は躰の悪い。人にさん〜口を叩かせ。挨拶もなく何處か〜といと。どうも座敷に堪らぬと。言ふ程酔ひもなさらぬかと。立を引止め官六郎。「小聲になつて。「是流波。今云ふ鐘三が女房は。雪野と言つた祇園の舞子。以前京の御倉邸へ。己が詰て居た時に。五六度も座敷へ呼び。金を償ひ祇園を引かせ。手掛にせんと言ふたれど。兎角に彼は承引せず。兼ての馴みし大坂の。升形屋と言ふ商人へ嫁入したと言ふ噂。其後當殿和歌の浦を御遊覽の御歸り道。かむろの宿を御出立。後方付に引残り。夜も白々と明る頃。何心なく行列を。見送る女の顔を見れば。疑もなき雪野なり。吾は其儘立去りて。家來に吩咐け旅宿の。女房に彼の女は。何者なるかと問はせしかば。名は知らねども當宿にて。召抱させ給ひたる。御料理人の女房なりと。答へし由を歸りて告げ。其より心を付け見るに。道にて出遇ふ其時は。顔を反向け見ぬ振して。足速に行過ぐるは。古の客と某を。彼も見知りて居るなる可し。雪野が年の大

凡を。數へて見るに。十四五の。子をまだ持つ可き筈はなし。京太郎は確に繼子。何の故に鐘三の。女房になりしか。一圓合點行かず。包むとすれど弟官八。是等の事を知る故に。御身がうか／＼鐘三が。妻の。噂を言ひしを氣の毒に。思ひて此座を外したのじやと語れば流波溜息付き「結城妃は漢埃に消へ。小野の小町は秋風の。吹くに付てもあなめ／＼。美人の運の悪い事。唐も倭も昔も今も。其ためし最と多けれど。鐘三が女房は不僥倖。其時貴方の御手掛に。成て居ると此度は。押晴れての御本妻。活計。歡樂引代へて。小身者の悲しさは。人に逸れて前垂襟。此頃も京太郎が。弟の梅の助が。ちど風の氣ぢやと私を。鐘三が呼びに參たから。一寸と見舞に寄りましたれば。彼の顔貌をやつした姿で。洗濯をして居りましたが。いやもう久米の仙人なら。雲からばつたり落つる處。昔御迷ひなさつたも。無理ではないと扇ばち／＼。官六郎は進上り。其は善いが綾七は。乳母を伴れて東大寺の。八幡へ參つたが。もうとくに歸る筈と見遣る。此方の襖子を明け。上下引掛出で來る官八。「い／＼御案じなされませすな。綾七は只今歸り。庭に遊で居ります。何時もよりは大分遅ひと。供の女に問ひましたれば。彼の社の額堂へ。御組下の大串團吾か。奉納した盃の。繪馬の錠が粉未盡に碎けて。落たのは不思議ぢやと。群集をなすをうか／＼と。見て居たと申事。其は差置き先程鐘三へ。仰付置かれたる。料理も最早調ふ時分。いざ御一緒に出司せんと。進むれば官六郎。衣服改め打伴立ち。直

ぐに御殿へ罷り出で。先料理の間を差覗き。先刻家來に申付け。送り越したる大長芋。定めて煮上げ置きつらん。檢分の上差上げんと。言ふを鐘三は心得て。恭しく臺に載せ。持出づるを官六郎。近く寄りて打見れば。常にあるべき芋程に。小さく切りて盛りてあり。はつたと睨み聲荒らげ。大なる儘輪に切りて。煮てこそ是は珍しと。御賞美こそある可けれ。斯くむきなしては世に稀なる。大長芋の詮はなし。煮直して差上げよと。今申し付けたりども。又とある可き品ならず。其職に在りながら。心得のなき奴かなと。打擲もし兼ねまじき。氣色に鐘三はつと平伏し。仰せの通り又とあるべき品ならぬ故只常の。長芋程に切りたるが。料理の古實に候なり。其れを又何故と申すに。貴人高位は下々の。事は詳しく知ろし召さず。大なるまゝ差上ぐる。御國の土が芋に適ひ。斯う出來るかと思召し。御同席の御附合。御物語の序に。拙者の國では長芋が。此皿へははいらぬ程。此位に出來ます。いや其は珍しい。どうぞ其を頂きたい。早速に差上げませうと。受合て御歸り遊ばし。先達の様な芋を。何某殿へ遣はせと。御仰た時に國中を。探してもない其時は。殿様を虚言者と。人に笑はす様な者。春の初茸。秋の蕨。時ならざるを食はずと。聖人の教を守る。計りでもなく何うしてか不圖出來て。盛り代への無い者を。差上げぬのは右の理由。去りながら大きなる。儘にて御覽に入られん。お思召をもどきの段。謝り入て候と。只管に詫びければ。官六郎言葉もなく佛頂顔。立端を失ふ風

勢を見て取り。早野矢軍次。原北門作。其外大勢若侍。次の詰所を立出で、「是は先生の御早い御出仕。兼々御話申たる。拂物の此刀。無銘ながら何うか古さう。御目きくを受けまして。求めどう存ずると。好の道より氣嫌を直し。日頃最負の鐘三故。此場を事なく濟まさんと。取繕ろへば能きしほど。官六郎刀を受取り。「此は暗い其次ぎの縁先でとくと見ませう。あゝ備前く。成程古ふて随分美事に。柄があれば長光と。申しても憎ふないが。範光の初代か二代目。先にも確御求めなされ。私のをも先生ついでに。拙者も吾もと持ち出づる。刀を膝のほとりに併べ。先小口より四五寸抜き。是は關物大坂打。北國。鎌倉。新刀。古刀。國を差し銘を當てるに。大方違はざりければ。先生の御鑑定。誠に恐れ入つたりと。賞めそやされて官六郎。漸くに機嫌直り。「刀劔を見ます事は。生付て好きなれど。近年は諸方から。餘り度々鑑定に。持て来るで五月蠅くなり。眼病なりと言ひ紛らし。断わつて置申すが。斯う見掛ければ幾腰でも。御持ちなされく。イヤ原北氏。只今見たる其處元の。御差添は餘りならず打。所詮人は切れませぬ。然し刺身は作れるか。鐘三に御聞なさるがよい。庖丁の鑑定は。料理人が丁度相應。定めて鯛の尾を包む。折紙でも出すで御座ろう。イヤ鐘三と言へば戸棚の偶へ。押込んである彼の刀は。落窪の御差領。善い序でちや拜見致さう。取て參れと目配に。官八心得立ち上れば。鐘三は驚き刀を取り。後に隠し手を付かへ。「私風勢の鈍物。何ぞて御覽に入れらる可きと。

耻ぢ入る様を遙に見遣り。「魚を料理るが役目なれば。赤鯛でも身分相應。苦しうない官八早く。兄の機嫌の損ねぬ内。一寸見せれば其で濟むと。進められてもいつかな放たず。「さア身分相應ならば。早速御覽に入れますが。どうも是はと低頭平身。官六郎又急立。つかく側へ寄る袖を。早野矢軍次引き留め。小聲になつて。「是れく先生。あの如く襦袢は切れ。鞘は剝て見られぬ躰。中子は確に生箸の。ごゆう鐵さうに候可し。許して遣はされましと。言はれて心に打領き。山の芋にて言ひ込められし。其の返報に耻顔を。搔せて呉れんと弟を突きつけ。鐘三の前に膝突き掛け。「すりやどうしても吾が刀を。見せるとはならぬと言ふのか。「はい抜ます事がなりませぬ。「黙れ鐘三。料理人でも武士は武士。抜かれぬ刀は何で差す。祿盗人めと官六郎に。耻しめられて悪びれず。すく前へにむり出で。「此刀を抜きますは。殿様の御大事か。又は無法な輩に出遇ひ。己れの身の災難か。此二ツの外慰みに。人に抜せる刀は持たぬ。「チ、面白く斯る無法の。者あらば何とすると。言ひなから刀すらりと。抜持て打て掛らん其血向。鐘三も是非なく刀の鞘。拂て白刃を目先に突き付け。「料理人に不相應な。菊と申す御製の太刀。俗に所謂菊一文字、御鑑定下されと。びくともせぬ大丈夫。劍の光は眼を射。五躰の堅の具りしに。膽を挫がれ官六郎。言句も出でねば有り合ふ人々。見掛に依らざる鐘三が嗜み。感じながらに此治り。如何あらんと手に汗を握りて互に顔見合せ。太息付いたる其處へ。慌たしげに

本竹喜太夫。「官六郎殿上意々々々。走り來ればはつと驚き。刀を納めて畏まり。様子如何にと控へ居る。喜太夫は言葉急しく「御組下小ぼろの者。四皿右衛門。熊月輪兵太。門松毬藏。大申團吾。猶ほ此外に近頃貴殿が。抱へられたる御草履取り。木偶内と以上五人。東側の御長家にて。酒の上にて喧嘩をし出し。木偶内は切殺され。大申團吾。半死半生。彼の相手三人は。雜物倉へ閉籠り。土戸を引て切り死と。覺悟を極めし躰なれば。官六郎官八兩人。立向て召捕べし。切られし者は不憫にて。切たる者は道理なりと。風聞もあんなれば。彼の三人には必らずしも。傷付くる事有る可からず。上意斯くの通なりと。捕繩三筋渡しければ。黒塚兄弟眉を擧め。「手に餘らば切捨て。苦しからずの仰せならば。例へ十人二十人。籠りたりとも物數ならねど。聊かも傷を付けず。兩人向て三人を。召捕事は覺束なし。外人に御仰せ付けられど。言果てぬに急立喜太夫。四人の者は御組下一人は御家來なり。此捕方には願ふても。向はる筈なるを斷はらるゝは言甲斐なしと。勵されても兄弟は。默然として言葉なし。鐘三をづゝ／＼伺ひ出て。「此御役は私親子に。仰せ付られ下さらば。上意の通三人に。怪我をもさせず取逃がさず。搦め取て奉らんと。言葉を放つて言ければ。喜太夫は大に喜び。「御邸へ御抱へに。其方が成つたも己が推擧。最負に思へば願の通り。吩咐け度は思へども。何日ぞ武術の手際を見ず。京太郎はまだ漸々。十五計りの若年者。愍いな事爲出して。却て御家に居れぬ様な。首尾とな

つては氣の毒な。其とも覺があるならば。火急の事なり殿様へ。申上げずと苦うない。今より直ぐに三人を。搦め取て手負と死屍は。釣臺にかき載せて。「彼の御庭の御門より御縁先へ引かせて參れ。官六郎殿諸共に。彼にて待たんと言ひければ。鐘三。少し面を上げ。「御心使遊ばしますすな。幸ひ倅も御次にあり。是より罷り向はんと。京太郎を呼出し。耳に口寄せ斯様々。心得たるかと打囁き。三筋の捕繩取上げて。先一筋は袂に隠し。一筋は京太郎。一筋は我手に持ち一禮なして立上れば。喜太夫は聲を掛け。「はや夕暮に程近し。若し夜に入りなば戸前を打たせ。夜明けて捕りても苦しからずと。聞て鐘三頭を振り。「捕物に越く時。時刻を延すと延ばさるは。相手に依りて差別あり。是は急なる方こそ善けれ。定めて籠りし倉の廻りは。をつ取り巻いて逃がさる。備へをなして置かれしならんが。圍を解て親子兩人に。一先委せて置き給へど。表へ走り出でけるが。立止まりて「京太郎。其方は急ぎ家に歸り。手頃なる小木刀を。二本取りて來る可し。大井戸の木戸口にて。待合さんと言ければ。「承給り候と。飛ぶが如くに歸り來る。母の小笹は見るよりも。「此子は何をかけ歩く。今大喧嘩で人が兩人。切られたと上を下。騒動の中へ出て。怪我でもしてはなりませぬ。静まる迄は家に居やと。言ふ其隙に京太郎。木刀取て出でながら。「其喧嘩の相手三人。倉の中へ籠たを。父様と兩人して。召捕に參りますと。言捨てて走出でければ。小笹ははつと打驚き。「鐘三殿は日頃の手練。顯はすは此時と。

思はれたも最もながら。何ほ替古をしやつたどて。まだ骨も堅まらぬ京太郎を。危い處へ連れて行くとは狂氣の沙汰。女にしたら善からふと。人の賞める美しい。顔にひよつと傷でも付くと。取却しはとも出来ぬ。たのや此子を氣を付けなど。乳を啣へて梅の助。すや〜眠るを引放ち。下女に背せて甲斐〜しく。もす引上げ。京太郎の後を慕ふて驅出たり。「鐘三親子は。大小を塀の此方へ隠し置き。只木刀を腰に差し。圍の人数を引取らせ。要心の躰もなく。彼の雜倉の戸口より。「喧嘩の次第逐一に。知るもの有て上聞に。達せし處堪忍ならざる。仔細は道理ありながら。内二人には御不審の。仔細お尋ね有るのみなれば。尋常に繩に掛つて。申開致す可しとの。御仰せに依て我々兩人。召取りに向ふたり。内一人は神妙なる。取計ひを聞召され。御構なしと高らかに。呼はりながら鐘三親子。倉の戸開てずつと入る。内なる三人案に相違し。神妙なりとの御上意は。我事ならん我事ならんと。三人共に己れに迷ひ。寢束刃を合せて切り死と。覺悟の白刃は手に持ちながら。躊躇隙を見澄して。京太郎は皿右兵門。鐘三は輪兵太取て押へ。刀をもぎ取り踏付け〜。高小手手に縛むれば。毬藏は安堵して。非利明白なる御家に仕へ。誠に命の拾ひ者。是は御苦勞千万と。言ふに鐘三は打領き。「其許も御苦勞ながら。暫し細目を受け給へと。一寸あてゝ踉蹌處を。是も難なく搦め取り。ほつと一息付いたりけり

此時既に日は暮れぬ。暗きに紛れて取逃す。事もや有らんと鐘三は。前後に心を配りて。三人の繩の端を。一つに集め引立て出る。倉の外口に佇むを。誰ならんと透見れば小笹なり。物をも言はず行過る。袖を取へて。「御兩人共。御怪我が無て先嬉しい。京太郎が小腕の働。心元なく留め様と。追ふて來ても間に合はず。神や佛を根限り。此で祈て居りましたと。猶ほ何やらんくり掛け〜。言ふをば更に耳にも入れず。初め引かせし固めの者を。京太郎に呼寄せさせ。手負と死屍は釣臺に載て。最前喜太夫が。指圖の庭の小門より。内に入りて見上ぐれば。晝の如くに燭臺を。燈しつれたる正面には。黒塚兄弟初めとし。數多の侍居流たり。喜太夫は嬉し氣に。縁の先迄立出て。「天晴なる働を。殿様にも聞こし召され。恩賞は追ての沙汰、先は當座の賞品を與へん望もあらば言上せよと。只今仰せ出されたりと。傳へれば鐘三は平伏し。「御言葉に甘へまして。申すも恐入たれど。御賞品には三人の。命を助け給はる様。偏に願ひ奉ると。言はせも果てず官六郎。「其はならぬ。二合半でも吾扶持人。木偶内を殺した奴。生して置ふ法はない。白癡者めと叱られても。鐘三恐る氣色なく。「籠りし者は打手を待ち。死者狂の六つの肘。其に向ふは身を堅固に。守るか上に四本の腕。適ふべき道理はなし。其の捕方を望みしは。切られし者は不憫にて。切られたる者に理はありとの。風聞なる由。上の御仰。承給て其より考案。武術も力も何にもいらぬ。手練仕掛の欺捕。手柄と御賞めに預りては。却て赤面仕つる。

吾等如きにやみくも。擲められたが穴勝に。無法者ではない證據。様子を尋ねさせられて。道理に當らば三人の。助命の事は私の。命に掛けても本竹様と。願へば實にもと思ひけん。喜太夫はつツと立ち。繩付是へと廣庭に。引据へさせて向ふを見渡し。木偶内が死屍も其へ運び置て。大串團吾は。深手に言舌分らぬ由。先々其にて藥を與へ。介抱なして置く可きなり。さア中窪。熊月。門松三人。兼ての遺恨か當座の喧嘩か。二人をあやめし様子を言へど。尋ねられて顔を上げ。お頭の手人ながら。吾々とは身分も違ふ。木偶内に候へば。左迄親しく仕らず。顔を見れば目禮計りに。打過ぎて罷り在りしに。十日計以前の夜。酒肴を多く携へ。彼の木偶内吾々が部屋に來りて少し計。心祝の事ある間。何はなくとも是飲んで。給はれと言ふ此三人。團吾も元より好の酒。辭儀なしに引受け。飲て酔伏す其明日の夜も。又明日の夜も木偶内が。酒肴を持ち來る事。昨夕迄も怠たらねば。自然と懇意になつたるが。今日はまだ晝過より。何日にも優りて立派の馳走。例の亂酒となつたる時。木偶内の申様。皆て各に此如く。酒を侷め。參らするも實は己が片腕に。頼まん爲の計策なりと。聞て皆々左もあらん。身に適ひし事ならば。何事にても承たまはらんと。言ふに木偶内打喜び。耻かしながら四五年前先。我惚れ込んだる其女。何言ふ譯か此家中の。人の女房になりてあり。未だに思ひ切り難く。言寄る頼りもあらんかど。此春より黒塚へ。仕付けもせぬ仲間奉公。折々毎に言寄りて。試れど

彼女。いつかな靡く氣色はなし。いつその事に彼家へ。夜に紛れて忍び入り。ひつ纏て立退く心底。元より女が得心で。驅落するなら人手も入らねど。右の始末にあんなれば。吾一人では覺束なし。力に成りて給はれど。只管に吾等に頼み。大串團吾は此時早や。酔ひ倒れて前後を知らず。此に連らなる三人が。顔を見合せ言葉を揃へ。同じ不義でも人の娘。又は奉公する女。定まる夫の無き者ならば。一筋に依りては力も添へんが。是は現在人の女房。殊には得心せぬ女を。盗出すとは大悪無道。ふつつと思ひ留まるか。左もなくば黒塚殿に。申上げんと答へしかば。木偶内大に憤り。人に大事を語らせて。聞入れのみならず。大悪無道と今の悪口。勘忍ならずと切て掛る。此時に取押へ。申上ぐ可き筈なるを。吾々も酒興の上。扱合せて立向ふ。團吾は目醒て様子も知らず。支へ隔つる其後は。眼も眩みてめつた打。次第は斯くの通なりと。交る／＼に三人が。言ふのを聞きて喜太夫が。重ねて問はんとする内に。官六郎進み出で。一死人に口なし已等が。身勝手計併べても。言譯に其れや成ぬ。木偶内が今夜忍び。奪ひ出そうとした女は。先何物の女房ぢやと。問はれて三人口籠り。「さア其女は。」「さア其女は。」「ハイ其女は私で。御座りますると庭木戸より。怖めず臆せず入來る小篋。様子如何にと驚く鐘三。此方は縁を見上げて手を付き。「黒塚様には私を。モシ御見知りも遊ばしますが。只今では鐘三の女房は以前は祇園で舞子の雪野。勤めを引かせて世話しようど。信實に御仰た。去る御方も有つ

たれど。古き馴みの義理に引かれ。野の字を抜て雪と名を變へ。升形屋と言ふへ嫁入り。今日殺された木偶内は。鯖六とて其家の手代。連添ふ間もなく夫は病死。後家になつたを彼奴は。幸と思ふたやら。私へ不義言ひ掛け。心中を見給へど。雪と云ふ字を入ぼくろ。疑しくば死屍の腕を。まくつて御覽なされませ。高野山へ參れと進め。釣り出して衣更へも旅用も。皆ひつ掠て遂に驅落ち。今の夫鐘三へは。ちと水臭ひ言分なから。道には迷ふ飢には望む。せん方なく世話になり。憔悴しい今の世帯も。皆んな彼奴が悪戯故。そうでないど此頃は。何處ぞへちやんと身を收め。樂な暮しをして居ります。なアモシ官六様。其にまア厚かましい。貴方の處へ住んでから。鐘三が番の留守へ来て。種々の繰言を。言ふが五月蠅く是れ鯖六。女ぢやとて以前は主。殊に衣類も金も盗み。途から逐轉した身ぢやないか。途中で遇ふても其方から。逃げねばいらぬ身を持ちて。此へ來るとは何言ふ心。重て淫な事言ふと。夫に言ふて仕様があるど。愧しめてから。此頃は遠ざかつて居りましたか。無理に連れて退ふとは。聞てもぞつとする謀計。彼の衆達が得心して。彼方に加擔をなされると。私はどんな悲い目に。遇ふも知れぬに小氣味善く。打て捨て下されたで。もう是からは一安堵。去すれば恩ある御三人。命を助て上度故。此身の耻を明白に。申上げます黒塚さまと。官六郎が氣を和らげ。初め助命を願たる。鐘三の本意を奏へんと。言葉を盡して言ひければ。今迄きよろしく晩し目を。忽ち

細めて官六郎。打領きてにこく顔。「チ、最もなる其方か願。何れも只今聞かれし通り。鐘三の妻を盗まんとは。憎くい木偶内。三人に罪はない其細解けど。指圖を喜太夫押留め。「先其事は明白に。分たれども今一ツ。大申團吾に手を負せし。此言譯がど眉にしわ。折から庭へ二人の足輕。大申團吾をかき抱き。連れ來たりて畏り。「仰せに従ひ藥を與へ。介抱を致せし處。見掛りしよりは疵も淺く。心も確に罷りなり。申上げ度事ありと。申すに付て御前へ召連れて候と。訴ふれば手を付かへ。「只今の概略は。木戸の外にて承たまはる。拙者は元より酒を飲むと。性根を失ふ僻ある故。八幡宮へ誓を立て。盃に錠を卸した。額を揚げて絶ちたる酒を。木偶内に進められ。此頃内より只もののみしが。聞けば今日彼の繪馬の。錠の碎けて落たる由。神の告にも心付かず。前後も知らず酔伏して。其故受たる此手傷。木偶内の刃に觸れしか。又三人の所爲なるか。切られし我さへ知らされば。切たる人は猶知るまじ。然かれば此儘死したりと。更々以て怨なし。神罰の其のみならず。其昔様々巧んだ惡の報。此位な災難は。なければ成らぬ身の懺悔。己れは佐葉鯉藏とて。若き時は旅役者。出羽の國に有し時。坂田の宿屋が金出して。抱へた女を。盗出し。剩さへ横根山と。言ふ處の狩獵を。彼の夫に言付て。深き谷へ突落させ。其家を吾者に。住なして居たりしが。豈圖らんや彼の狩者。命ありて立歸り。夫婦共捕へられ。既に首をも刎らる可き。罪を許して給はりし。其恩人は近江の國に。御座する由

は聞きなから。遂に一度訪ひもせず。其より諸々を経廻りて。男子一人設けしが。段々との不仕合。其子を付けて女房は離別。親の因果が子に報い。此奴も碌な死をば遂げまい。右の次第に候へば。相手も知れぬ傷を受け。死のも自業自得にて。初に申し上げたる如く。人を怨みん道理はなしと。いと苦し氣にそ述べにける。此にて状條明白なれば。重て問ふに及ばずとて、喜太夫は席を進み。先細付の三人は。小ぼろ組の者に守らせ。手負は尙ほも勞る可し。落窪親子の者共は。宅に歸りて休息せよと。其れく指圖をなし。黒塚と打連れて。頓て奥へ入りければ。鐘三親子は心安まり。木戸の外へ立出る。折から内に残したる。梅の助は眠氣さし。母を慕ふる賺しわび。下女のたのが連れ來たるに。丁度行遇ひ「どれく」と。小笹は其儘抱取り。打連れ家に歸りけり。恠て次の日本竹喜太夫。鐘三を招きて言ひける様。「明日の事共逐一に。上に申し上げたる處。彼の三人は命を助け。國界より追ひ放ち。若し歸り來る者あらば。其時罪に行ふ可しと。今朝早や中窪。熊月。門松の三人は。追放に處せられぬ。皆て御身の武術奇代の早業。吾のみならず遠目ながら。能く見極し家中の者共。追々言上なしたる間。殊の外賞し給ひ。其身は欺取なりとて。聊か業に誇らぬ由。是以て愈頼母し。僅なれど追放し。三人の知行を。先づ々鐘三に與へ。近衆の武士に取立て。後言ふ可きは。劍法柔術に秀でなから。今迄包みし心憎さ。主人の吾を柔弱者と。見侮りての故なるか。誰に頼りて何流を。習ひ浮め

し其を問ひ。官六郎と目通りにて。立會を言付く可し。竹刀。木刀。或は刃引。得物の道具は兩人が。勝手次第たる可しとの。御仰にて候と。謹で述べければ。鐘三額を疊に擦付け。「僅なりとの嚴命なれども。藝もなく能もなき己等が。身には過ぎたる高祿を。下給はる辱なさ。此上は今日の前にて。切腹せよとの御仰なりとも。嘗て違背は仕らず。去りなから黒塚殿との。仕合は御免を蒙らん。其故は申さずとも。知れたる彼方は殿の御師範。私が打勝なば。料理人に敗る者に。今迄指南を受けたりと。殿様を多くの人に笑わする様な者。其は千に一ツの事。散々に此鐘三が。叩かれるのが必定ながら。黒塚様の御手柄にもならねば。此方等の愧にもならず。左すれば無益と申者。西近江稗が辻に。引込みて罷り在りし。一有齋が門人にて。稻積流を少々は。習ひ置て候へば。官六郎殿御多用にて。御迷惑なる子供など。教へる位の御用なら。承り候はんと。懇ろに答ふるにぞ。喜太夫は其趣。又候申上げたる處。千早の助益鐘三が。武術を床しく覺されて。追々近衆の侍を。彼が門下とし給ひて。試み合ふにぞ。其修練官六郎が。及ぶ處に非らずと。思ひ給ひければ。殊更家中の若侍は。鐘三を賞め恭ひて。偏に彼は摩利支天の。再來ならんと囁めきけり。是先にも記すが如く。官六郎は其心邪にして。稍どもすれば纒言して。罪なき人を陥入る事。度々なれば。各々心に憎むと言へども。彼に勝れし劍術者當家中になく。且君の御師範故にせん方なく。心に思ぬ追従を。今迄こそ言い居

たれ。幸にして此鐘三。御見出しに預る上は。彼を立身出世させ。官六郎が威を挫かんと。言合さねど此如く。鐘三が業を善きが上にも。善しとぞ皆々言合ひける。去れば殿に願を立て。稻積に改流する者も。此頃少なからず。官六郎が替古場は。次第に淋しくなりければ。定めて彼は憤らんと。思ひの外に鐘三の。武藝は己の及ぶ處に非ずと。官六郎も家中の者と。諸共に鐘三を慕い。吾方へも繁々呼び。己も際々落窪へ音訪れ。いと親しく劍法の事等問ひ。殿の前に出づる時は。鐘三は御役に立つ可き者と。より／＼聞へ上げれば。官六郎が我慢無きを。千早の助感し給ひ。且彼すらも敵し難しと。言へるに依て鐘三が。武藝に秀でたるを愈知り。善物を抱へたりとて。退々加増を給ひけるが。此程に本竹喜太夫。年老いたりとて退役の事願ひ出たりければ。其意に委され彼の後役。大ぼろ組の頭をば。鐘三に命じ給ひけり。其よりしては官六郎。相役の事なりとて。益親しく行通ひ。其年も何日か暮れて。次の年の彌生中旬。櫻の盛なりける頃。官六郎は酒肴。提重に用意なし。鐘三を誘ひて其處此處の。花を眺めて打廻り。さすかに永き春の日も。西に傾く其頃に。彼の東大寺の八幡宮へ。打連立ちて詣でつゝ。額堂なる茶店に休らい。鐘三心に思ふ様。去年家内を引連れて。此處へ來たりし其時は。身はいと輕き料理人。袴も付けす憔悴しき。姿なりしか此年は引變へ。遊山に出づるも若黨仲間。殿様より拜領の。羽織小袖に我と吾。身を見違へる此出立。是と言ふも過ぎ行かれし。一有齋

殿の御高恩。又當殿の御惠。此の國に移りしより。信仰なしたる八幡宮の。加護に依る處なりと。信心膽に銘じつゝ。又も社の方に向ひ。伏拜む足元へ。がつたり落しを何ぞと見れば。去年己か納めし額の。木刀へ御せし錠なり。はつと驚き立留り。吾身の怨にはなさずと雖ども。折金申ならんと己か刀を。見侮られし一旦の。怒に依つて鞘を拂ひ。其憤りの治まらざる。折節喧嘩の籠物。擲取て見せんずと。其れより段々引續き。武術を顯はし立身出世。何とて誓を忘れしとて。神の咎に疑なし。あら恐しや／＼。今の君の惠を知て。古の主の恩を知らず。あゝ吾なから淺猿しき。心になりしと後悔し。茫然として佇む顔を。官六郎差覗き。「遽かに貴殿は顔青さめ。折節拙者の顔を睨め。口の内に何やら囁き。わな／＼慄て居らるゝが。御氣分ても悪いのかと。谷められて心付き。「いや左様でも御座らぬが。御覽なされあの如く。奉納致した額の錠。碎けて落しが心掛り。知らるゝ如く大串團吾が。事もあればと言ふを打消し。「あれとは違ふて貴殿は下戸。其故別に味淋酒を。用意致して參いつたが。其さへ漸く御原で二一ツ。去すれば酔るゝ氣遣なく。例へ何人援連れて。打掛らうとも御手練では。手取にするにも容易かる可し。錠は愚かさゝらの如く。繪馬か碎けて落たりとも。團吾の様な災難が。貴殿に有らふ筈はない。必らず氣に掛け給ふなど。ほろ酔氣嫌の官六郎。聲高々と打笑へば。「如何様武士にあるまじき。飛んび愚知を申した。家内の者が御目に掛つた。其節にも此事は。御沙汰下さ

るなど口固めして諸共に。道を急ぎて黄昏に。鐘三は家に歸りけるが。神の谷の恐しと。心に掛りし故なるか。何とやらん心地過ぐれず。去ればとて服薬す可き。程にも有らねば寐つ起きつ。次の日は暮しゝが。其夜遽かに熱を發し。血を吐く事數升なり。家内の者大きに狼狽。先近き程なれば。天原の流波を呼び。云々と言ひければ。先容體を窺ひて。小笹を小影に招き寄せ。眉を擡め聲を低うし。「下戸の吐血は治し難し。其上主人今迄に。多く神勞されしと見へ。體の疲のあるなれば。吾力には及び難しと。求むれども藥を與へず。其よ是よと立騒ぐ。其隙に憐む可し。鐘三は遂に息絶ぬ。針よ灸よと様々に。介抱すれども顯しなく。次第に身内冷へ氷り。昨日手折て歸りたる。櫻の枝は花瓶に。今も盛にありながら。思掛なく散りて行く。實に人の命程。果敢なき者は無かる可し。是よりして小笹が縁言。京太郎か嘆の様。くだくしきは例の漏しつ。押量りて見給ふ可し。官六郎は次の朝。斯くと聞より取る者も。取り敢へず馳せ來り。「御心中察し入り。今更申さん言葉もなし。吾も誠に片腕を。取られし心地に候と。懇ろに悔を述べ。家内の様を借々見るに。小笹は只泣きに泣き。まだ若年の京太郎は。嘆き高むて涙も浮めず。只うつとりと差し俯き。梅の助が物心。能くも知らねど。教へられ。ひたすら位牌を拜む等。見捨難くや思ひけん。兩人を様々言ひ慰め。此には頼みの寺もあるまじ。當館の御菩提所。天満山長法寺のたつちうの。住僧は怪來とて。某が元よりの友達なり。彼を頼

みて參らせんと。此國には鐘三夫婦が。身寄のなきと思ふが故。葬式の事は更なり。七日の佛事石塔婆を。立つる事さへ官六郎。取賄ひて京太郎を。直ぐに亡夫の後役に。千早の助に願ひけり。「是は皆て置き。此頃浪波新町に。玉柏葉屋才兵衛とて。音に聞こへしくつわやあり。抱への遊女は更にも言はず。召使ふ者出入の者。下が下迄心を用ひ。能く勞り恵ければ。彼等も又其の恩を。思ひて客を等閑に。成さるる故に。繁昌して。今此廓第一の。福有の身のなるもから。富に矯らず華美を好まず。只だ折節の保養には。龍と名けし下邸。木津川邊に求め置き。是へ行くのみなりけるが。三月末の事なりけん。櫻は早く映ろへど。池の邊の藤の花。咲き出てたりと彼の屋敷を。守らせ置きし塔八と。言ふ者より告越しければ。去あらばとて内の事は。女房に委せ置き。娘のお谷弟の才七。己の目には花紅葉。善ひ子を持ちしと往來の人も。眺むるが先づ樂みにて。二人を立派に装はせ。供はお谷の氣に入りの。仲居のお光其の外に。二三人の男女を連れ。才兵衛は斯處に至り。門に入るより四方を見渡し。「庭の掃除の行届き。池にも落葉は更にない。美しい好きなる者を置き。見違へる迄善ひ庭に。なりしと座敷へ打通り。煎茶の後は才七か。花切作りのめじかの刺身。お谷か焼た田樂にて。酒汲み交し才兵衛の。心地善げなる有様を。塔八遠目に打眺め。「敷紅葉を取た後の。こけにまだ青みがこず。たんばは延び過ぎ葎はいじける。どうで有ろうと思ふたが。先御機嫌で安堵したと。己が部屋に入る後

から。仲居のお光が田樂の。箱を以て走り來たり。且那樣が私を呼んで。塔八に一杯酒を。飲ませうと言ふたれば。絶物とやら下戸とやら。盃を手にも取らぬ。今日は飯の采になるものを。遣れとお仰やるから。さア是を持って來た。お前只の田樂ぢやと。思ふて食ふと罰が當る。お谷様のお慰み。十本焼けば七本落ちる。緋鹿の子の襦袢の袖が。味噌に成るやら金襴の。抱へ帶が焦げるやら。積て見たら大層な。高い者に付て居よう。打笑へば塔八頂戴き。「私は新參者。御家内の様子は存じませぬが。御後取は才七様。御谷様は御嫁付なと見え毎日」。五月蠅程諸所から言込み。まだ御相談は出來ぬ様子。どふいふ所が御望で。御座りますると問ひければ。御光は差寄り小聲に成り。「廣い世界に彼の御子程運の善い者はあるまい。まだ少さい時此方の御家内へ。先に賣られて御座つた處が。如何様實の親達か。玉柏葉屋のが眞實の。父様や母様だ。欺して越した事ぢやから。其晩に御家内さんの。懐へ遠慮もなく。ぐすぐすとはいつて寝て。何と言ふても側を離れず。父さん彼んな衣服が着たい。母さん何んか食べた。いと。其明日から我儘一杯。御慈悲深い且那樣が。矢張其れが愛くなり。子の無い者か人の子を。貰つて不憫を加へれば。本の子か出來ると言ふ。寧ろ娘にしようではないかと。親元から貰ひ切り。披露を成さると其翌年。御生れなされた才七様。其實の御子よりも。未だにお谷様が御秘藏。こんな氣量の好い娘。例へば何程富源でも。悪い男の處へは遣らぬ。男が善くて

彼れが氣に入り。年頃も似合なら。身上には頓着せぬ。嫁にと言は地面でも。金でも付て先へ遣ふ。婿に迎さば元手を入れて。先の男の望の商賣。勝手な處へ店を出して。遣ふと常々言ふてなれど。善い男が近頃切れ物。お前が十七八ならば。打て付てあらふに。惜い事ぢやと言ければ。塔八は首を拵り「そんな無汰は止めにして。お谷様には丁度好い。心當りの男もあれど。私は其處へ行かれぬ身の上。そんなら彼娘は親知らずと。云ふ様な事で御内へ。いへ〜其も且那樣が。何程言ふても實の親子は。逢ひたからうと知らぬ振り。折々は御逢せなさる。母さんけ御果てなされ。今では確父さん計り。其の御人のモシ顔はと。言いかゝる折お光〜と奥より呼ばれて唯々。狼狽廻り走り行く。

大和の卷後帙終

邯鄂諸國物語

柳亭種彦

大和の卷殘編

人の盛なるを見ては。悪事をも善く言ひなし。人衰ふる時は。善き事をも悪しき様に。言ひなすが世の人情なり。去れば斯く迄家中の者の。賞のめきし鐘三なれど。死しての後は誰あつて。憐れ問ひ寄る者もなし。剩へ誰が言ひ出しけん。元彼の鐘三は當殿に。遺恨ある何某の家來なりしが。其れを隠し奉公に住み。家國を亂さん兼ての巧にて。彼に加擔の者もあり。彼八幡へ納し額に。高市と記し其上に。木刀の刃を差向けしは。呪咀の心に疑なし。神は非禮を受け給はず。神罰返て身に報ひ。鏡も碎け其の身も血を吐き。死したるなんど左も有りげに。流言したるが遂には殿。千早の助の耳に入り。強ち誠とするにも非ねど。又有間敷事にもあらねば。何とやらん心よからず。京太郎が父の後役。願ひ出しも取上げ給はず。元服をも言付ず。追て小性に召出さんとの。御沙汰のみにて捨扶持とか。僅の祿に減じられ。元より譜代の者ならねば。是を彼か不足に思ひ。暇を乞へば乞へがしど。言はぬ計りに勤もさせず。只打捨てし

ぞ置かれける。誠に彼等親子の不運。料理人にて何事も。足らはぬ勝に暮したる。其折鐘三か過ぎ行かば。悲しき内にも又後の。取賄方暮し方。手段もあらんに愁むいに。大ぼろ組の頭となり。彼の邯鄲の夢の間は。時めきたるが仇となり。若黨仲間其れに。暇を取らせ元の如く。狭き長家に取代へられ。其不自由さ堪へ難し。小笹は取分け女氣の。悲しき悔しき遺瀨なく。組子の者が此頃迄。若旦那と。尊ひ恐れし京太郎。其身の程より綺羅をも飾らせ。千石取の若殿と。言ふも耻かしからむとて。家中も賞しを今更に。やつしき姿をさせ。侮つらせんは口惜と。思へど僅の當飼にて。漸く飢を凌ぐのみ。詮術なければ人に雇はれ。すぎ洗濯賃仕事。身のくるしみも厭はねど。元が舞子にあんなれば。夫程迄は縫針の道にも。詳しからざれば。心計りに其れも適はず。愈途方に暮けるが。此高市の商家の町人。有徳なるは申に及はず左迄にあらぬ者さへも。娘に踊りを習はせて。彼處の祭此處の神事に。出すを手柄の様に覺へ。互に敗けじと華麗かなる。衣裳物好立派を構へ。月見雪見の遊山はせず。是のみ流行の者となり。京浪華より似合はしき。女の師匠を呼寄せしが。目立つ上手にあらむの。噂を小笹聞き出し。縁を求め手を尋ね。彼の町人の元へ入込み。踊りを教へたりけるが。元より祇園に名代の舞子。見る人毎に大に感む。彼方此方へ招かれて。忽ち門人多くなり。其の謝禮にて京太郎。今迄より猶衣服大小。綺羅美やかなるを求め。着飾らすを京太郎。辱なくは思ひ

なから。父失せ給ひて縁は減じ。万事不足と言ふ事を。諦め知る身は寒からぬ。程だに着つれば美悪は言はじ。辨へ知らぬ梅の助に。是をば着せて給はる可し。此縞柄は華美なり。其染色も美しなど。讓れど小笹は聞入れず。「彼は二男殊には子供。今着せたりとも成人の。後には用に立ち難し。御身は今に召し出さるゝ。大事の身なれば其時の。用意に無くて適はぬと。梅の助には我古きを。剃ぎ合せて着せ置しは。繼母の鏡と謂つ可し。去はさりながら彼が踊りを教へしより京太郎が。身に一つの禍起り。其が却て幸と。末になり行く物語の。端緒を先づするになん。」是に引變へ官六郎。益々御前の羽振能く。即ち弟官八に。鐘三の後役大ぼろ組の。頭を仰せ付けられければ。愈黒塚兄弟の。權威我慢は澎張し。心の内に憎める者。いと多けれど表へには。家中一統尊恭し。彼が無理は道理となり。頭を揚ぐる者もなし。斯く京太郎は世に捨てられ。今迄の友達さへ。更に問ひ寄る者もなきを。如何なる故にか官六郎は。鐘三がありし時より親しく。折節毎に尋ね寄り。「吾先達京太郎に。父の後役願ひしかど。若年故に心元なく。思召されて御許なし。依りて竊に殿へ訴へ。吾弟官八を。先づ彼の役と定めしは遠からずして京太郎に。譲る所存にあるなど。いと深切に聞ゆる程。京太郎は立腹しく。心の内に思ふ様。初めよりして彼か行爲。一として正道ならず。父上の急病にて。果て給ひしも黒塚が。花見に誘ひし次の日なり。何とやらんいぶかしと思へど。詮議の證據もなし。然のみ

ならず過ぎ行かれし。父に反逆ありし名を。風聞させしは官太夫め。己が弟を世に出さん。巧みを却て深切らしく。言ひぐるめるこそ面憎くけれ。抑々黒塚兄弟が。爲には旦暮れ苦しめらる。者の家中に數多あり。彼等だに無き時は。花城の御家は益靜謐僅の間仕へても。主人は主人其御爲。折りもあらば彼を切り捨て。一先此を立退かん。母は年いまだいと若し。流浪されなば縁付ても。梅の助一個をば。兎も角もし給はん。其れよ／＼と心を決し。彼の家中とは引換へて。官六郎に誤はず。言度吾儘言ひ散らし。面會なし其時も。親しく言葉も交はさねば初めの程は引較へて。官六郎も京太郎を。年に似合ぬしぶとき奴と。思へど色には顯はさず兎角する間に秋にもなりぬ。此城下の驅踊り。鬼節も過ぎ八月の。半になれども未だ止まず。此の驅踊りと言ふ事は。此方の町より彼處の町へ。行きて踊るを驅るといひ。其後彼處の町踊り此方へ来るを返へすと言ふ。斯くする程に鬼節踊りの。名も徒らに九月迄も。踊り歩くが古し昔の驅踊りの例しなり。或日村雨打注ぎ。夕暮方より名残なく。晴れて一入爽かなる。月の光は眞晝の如く。城下の町も殊更賑ひ。太鼓の音の此へも聞へ。いと面白き様なれば。たのは弟の梅の助の。ともして踊りを見に出で行き。京太郎は情々と。物を案じて居たりしが。母の小笹に打向ひ。祿を僅かに減じられ。家内の不自由になり行きしを。助けん爲めとて人には鼓舞の師南に出給ふも。元はと言へば私を。不憫と思し給はるから。有難とも中々に。御禮を申

さん言葉もなし。左は左りなから未だ若き。後家の御身に御在すれば。御留守勝なを人知らば善からぬ噂を言ひ出さん。去頃も申したをり。梅の助だに不足なく。養ひ育て給ふ程。手段の有らば足るとして。此事ふつに止め給へど。思ひ込んで言ひければ。小笹は顔を打赤め。ほんの女の猿智恵から。譯もない事仕出して。今では私も後悔する。盆が過ぎれば御城下の。踊りは法度と言ふ噂。其に段々彼の様に。賑ふ事が御殿へ聞こへ。此踊りは誰が教へたと。詮議に合はし此身の上。左うで無うても此頃は。私が指南した事を。家中の者も知た様子。其故家内へ引籠り。最うさつぱりと町へは出ぬ。許して給ふと袖掩ふ。此れは又改たさう御仰ては却て赤面。親に向て差出た意見と。貴女こそ御腹を立てし。下さりますなど詫びにけり。折から泣き入る梅の助を。背中に背ふて歸り来る。たのも只すら涙に暮れ。言葉なければ兩人は驚き「怪我でもさせたが何したと。問はれておたのは涙を拂ひ。此お子が機嫌能。踊りを見て御座る處へ。黒塚殿の腕泊子。綾七がつか／＼来て。見物するに邪魔になる。其方らへ退けど容捨ももなく。此お子を後ろより。押倒さうと仕居つたれど。御少さうても旦那様の。御血筋は争はれず。ひらりと外して脇差の。鞘へ手を掛け何にしをる。無禮な奴と御仰た。御目の配り躰の堅め。大人も及ばぬ凜しい事。綾七は此お子に。一ツ二ツ上なれど。其勢に恐れてか。何此奴がと是れも。又刀の鞘は握りなから。齒の根も合はず胴慄へ。御宥め申して引分うと。思ふ

所へ官六郎。大勢人を連れ來り。私は元より此お子迄。突き遣り突退け綾七を。大事そうに押圍はせ。誰かと思へば梅の助。彼奴の親は料理人。身にも應せぬ侍士に。立交じつたる天の罰其身は滅亡悴さへ。押込め同然其弟なりや。虫けらも同じ事。彼んな物と争するな。人柄が損ねると。髪かき撫で官六殿。さア構まはずと踊れ〜と。空嘯いたその憎さ。旦那様の御手並に。懲り〜して此頃迄。匍ひ躊躇居なつた。思へば悔しい口惜しいと。大聲揚げて泣ければ。小笹は堪らず何やらん。手箱の内より取出し懐へ。確か收め。あゝよい〜。もう泣きやんな。是から直ぐに私か行き。其遺趣晴官六郎に。思入れ耻をかゝして遣ふと。襖端折て驅出す。向ふへ回て京太郎。先暫くと押留め。御腹立は道理なから。官六郎は殊の外。酒の上の悪い性。酒興の上の雜言にて。酔か醒て詫びしたら。高で此方は子供の事。勘忍したとて愧にもならぬ。口より一端言出した。言葉は四ツの馬を掛け。早き車も追ふ事能はず。女の御身殊には夜中。人込みの中へ御座て。聲高に御仰ると。理には勝ても仍なう。聞へて噂も又五月蠅さし。今夜の事は私に。御預けなされて梅の助を。宥めて御遣り遊しませ。あれまだ泣て居りますと。心の怒り押隠し。物柔かに言ひければ。小笹は胸を撫で下し。腹立つ儘の後先見ず。私の悪言はるゝは。厭ひはせぬと過ぎ行かれし。夫の名迄も出す様な。事でも出来ては成程悪い。言やる通り酔か醒たら。彼方から詫びに來るであろう。其方も寝みや私も寝ると。

涙を隠し梅の助を。賺し慰めて抱き上げ。たのに言付け次の間に。床を引かせて打寝む。後には獨り京太郎。心安しと打領き。菅笠合羽脚半迄。旅の支度を取り集め。着更へも共に一布呂敷。包みて竊と外戸へ持出で。又立戻つて箆笥を開け。晴衣にせよとさいつ頃。母が態々物好きに。染め給はりし帷子の。手に當りしを幸ひと。直ぐに着變へて一有齋より。傳來の刀を帶し。母の臥したる襖越し。心の中に暇乞ひ。踊り太鼓の響を知邊。彼處へ行きて見渡すに。官六郎はまだ歸らず。綾七も猶ほ側にあり。天の與へと着代への包は。町家の軒に隠し置き。ゆらり〜と歩み寄り。官六郎が見物する。目先へ態と立閉がり。弟が虫けらなれば。兄も矢張り出ながら。泣きもせねば笑ひもせず。世に嫌がられる疝癪の。虫の大將我慢の頭。指でも指すと餘にする。父が譲りの此庖丁。然し此處等に刃答する。魚は無いとぞ罵りける。彼の綾七に付添ひし。乳母腰元は大に恐れ。顔に似合ぬ恐しい。事を言ふ人が來た。もし我子様に御怪我でも。させましては言ひ譯が。ないを此場の退きしほに。皆打連れて逃げ歸れば。踊りも是れを果て太鼓。どろ〜崩れて行き方なし。官六郎はじろ〜見遣り。誰かと思へば舞の指南。振付の御子息殿。さて善い母を持たれたで。服装は今に變らず立派。父の死んだを幸ひに。毎夜〜母に替古の。功が積で男作り。めき〜と成人した。人の踊りの邪魔するより。内で習ふて居るがよいと。潮弄すればにつこと笑ひ。其踊りが上達故。劍の舞と言ふ者を。御目に掛

けに參つたが。相手が無ければ御可笑ない。御出でなされと一足立。官六郎も目を配り。其と指圖を心得て。逃げ残つたる二人の家來。右左より詰め掛け。抜かんとするを京太郎。踊り太鼓の落散りしを。拾ひ上げて一寸と押へ。「己れ等如きに抜合せ。命を取るも無益の殺生。此頃覺へし音頭の拍子で。立合ふが丁度相應。あゝ彼の歌はあんどやら。ヲ、其れ。一にたへまのひともと櫻。奈良の都は八重櫻。吉野の川にはすむから鮎が。私の胸にはこひか棲む。謠ひなからに刀も抜かず。抜けつく。いりつ兩人が。白刃を踏落し。遠く退て見物せよと。襟髪左右にひつ握み。三間計り投げ退けたり。官六郎も堪り兼ね。打て掛れば京太郎。さしつたりと抜き合せ。上段下段切り結ふ。侍士兩人も漸々に。起き上りしが京太郎が。今の手際に恐れ慄き。膝節慄ふて近付き難し。とありて主人の必死の躰。餘外に眺めて居られもせず。其れよ。と何やら領き。「官八様は御風邪とて。宵から御宿に引籠り。御静まつて御座る様子。それや京太郎が狼藉は。御存じないに極まつた。其程の事何故早く。知らせ居らぬと御叱を。後で受けんも計られず。いで一走りさア來いと。逃げ出すにはふら付し。腰も治りて侍士さへかき消す様に失てけり。後には兩人が根限り。鎧を削り戦ひしが。父の手筋を受け續きて。若年ながら早業の。京太郎か太刀の刃へ。官六郎は敵し難く。三夕所計り薄傷を負ひ。遂めく處を又一太刀。肋腹を掛けて五六寸。うんと上仰に倒る。胸板。京太郎は足踏み掛け。「子供喧嘩

の僅の事を。言ひつゝのりて打果たすは。餘りに無法に聞ゆれども。全くは殿の爲。家中の爲めに害せるなり。佞人め思ひ知れど。止めを刺さんとするときに。官六郎は何やあらん。物言ひたげに悶きしが。早や舌固張て言葉は出でず。其儘息氣は絶へ果てぬ。年頃家中の者共が。心の中に憎み嫉みし。官六郎が打たれしを。心地能く思ふ故が。又京太郎が働の。いと鋭きを恐れてか。更に近寄る者もなく。只だ月獨り中空に。皎々と照り勝りけり。京太郎は彼の軒下に。隠し居いたる包を取り出し。心静に支度を改め。脱ぎたるを又背なかに負ひ。立去らんとなしたるが。不圖後を見返れば。屈強の武士一人。草履取りのみ連れたるが。此方を窺ひ立ち居れり。家中の者の風俗ならねば。怪かしなから其儘見過ぐし。行く事十歩計りにて。暫く佇み得と考へ。心太くも官六郎が。邸の前まで立戻り。つら。と見渡すに。しんと静まり人音せず。頓て立寄り門の戸を。割る。計りに打叩き。「拙者は落窪京太郎。此家の内へ物申さん。別義に非らず此の主人。官六郎殿を打取り。只今立退き候なり。官八殿は風邪にて。打臥して御わずに由り。兄の敵打出て。勝敗あられて然る可し。如何に。と呼べど叫べど。更に答ふる者もなし。偕ては病が重なり。憐れや腰が抜けつらんと。打呟きて落行きけり。斯くて其より京太郎は。彼の浪華なる福原屋の。伯母の元を志し。高市を離れ高田町。横大路へ出づる頃は。夜も早や既に明けんとす。若し官八か人を語らひ。先へ廻て待たんも知れず。大勢に取巻かれ

生擒いけぢめんも口惜くちをし。奈良越ならこしの道筋は。數多あまたに分れてあんなれば。人の心の付かざる方を。夜に紛まぎれて出づるに如ごとかじと。足を早はやめて廣瀨ひろせなる。大福寺おほふくじの傍かたはらに。下女のたのが宿しゆくのあり。是れを尋たずねて其日は暮くれし。暗くらかり越こしが浪華なみはなへは。順路じゆんろなれども往來ゆきの多く。淋さびしき方こそ好このからめと。十三峠じゆしつげの方へ折まれ。龍田たつた町より西の宮。名高なかつたき志貴しぎの毘沙門びしゃもん天を。遙はかに拜はいしふきはたの。坂道さかみち越へて河内かふちに入る。是れ彼の十三峠じゆしつげにて。神立かみたち村迄一里には。足らざる由に聞置きこきしが。不案ふあん内ないなり殊ことには夜中。足を休やすめん茶屋ちやゑもなく。大きに疲つかれ遠とほからぬ。道に思はず夜を明あかし。かくをんじとか言いふ村へ。至いたりし頃は今越いまこし。峠つげに朝日あさひさし昇ある。此邊このあたりは凡すべて彼の。高安たかやすの里にして。伊勢物語いせものがたりの昔も床ゆかしく。南へ行けば高安山。千束水ちつかみづ越こかもの社やしろ。舊跡ふるせき多しと聞きしかば。若江わかえの方の過わぐ道より。忍しのぶに音なり善よからんと。小道せうだうに折まれて花岡山はなおかやまの。麓ふもとを過よるに此に一軒。酒を商あふ家のあり。田舎いなかには珍めづしく。座敷も二間三間に仕切り。いと清きよ氣けに見えければ。幸さいひかなと打喜うちきひ。奥おくまりたる一間いっけんに通とほり。先づ朝あの調しらめして。「吾は伴待つれまちつ者ものにてあり。邪魔じやまにもあらんが暫しばしの中。此を借かしてと言いければ。女房にようばうらしく見へたる女。いと善よく笑わらひて。「御安ごやすい事。繁華はんかの地とは事違ことちがひ。どうで開あいてある座敷。御心ごこころ置き無く御休ごやすみ遊あそせ。御宿ごしゆくりをも致いたします。御伴ごばん様さまの御目ごめ印いんに。御笠ごがさは彼處あそこの外戸かきど口へ。掛かけて置おきます。秋風あきかぜが。大分たいぶん冷ひやしい是れ召めしてと。かい巻枕まきまくらも垢染あかじまぬを。取り揃そろへて出しければ。京太郎きやうたろう心落こころおつき。一昨日おとひ昨日きのうの疲つかれに。横よこになるより他愛たあいなく。前後ぜんごも知らず打伏うちふししけるが。隣となりり座敷ざしきに女の笑わらふ。聲こゑ喧かしましきが耳みみに入り。不圖ふと目を醒さめし日ひさしを見るに。早はやや晝ひるさがる頃ときなりけり。偕いっしょて善よく寐ねたりと思おもひなから。手を拍たたち鳴なげば以前の女房にようばう。嗽手水うすひちようづを持もち来きり。「御静ごしずかまるには彼方あつちの座敷ざしきが。御喧ごけんしうてなりませぬ。私も女にようで御座ござりますが。男おとこと違ちがふて益えきもない。口數くちかずの多い者もの。静しずかにしなと云いふのも聞きかず。此方こゝちらを覗のぞてそはく。若わかい女計にようけいり故ゆゑ。猶なほほ馬締うまぢが御座ござりませぬと。話わの内に京太郎きやうたろう。嗽手水うすひちようづを使つかひし。ほんに今朝けさは静しずかであつたが。何日なにひの間まにか御賑ごにぎかになつた様子ようす。御親類ごしんるいか御客ごきゃくか。問とはれて女房にようばうは傍そばへ寄より。「あれは私が若わかい時とき勤とめました旦那だんなの娘むすめ子こ。浪華なみはなの方で御座ござります。大和廻やまとめぐりの戻かへり掛かけ。此こゝの内うちにも四五日ごにふにいつ滞留どまりう昨日きのうは生駒山いこまやまを見て。鷲しゆの尾おの觀音くわんおんへ。參詣さんぎするどて出でられまして。昨夜おとよは豊平とよへいへ一晚いっばん宿しゆくり。先ましがた戻かへりましたが。今日は五里ごりでも三里さんりでも。行いけ次第しだいに大阪おさかの方へ歸かへると立支度たちしど。今いまに静しずかになります。主人しゆじんだけ身み最負さいおに。賞あめる様に聞きゆれど。随ま分ま奇麗きれいに御座ござります。御規ごのりさまして御覽ごらんじませと。言いへどにつこり京太郎きやうたろう。笑わらた計けいりに色いろを好このむ。性質せいかつならねば見向みむかもせず。吾われも浪華なみはなに急いそぎの用もち。思おもはぬ熟睡じゆくすい暇取ひまどりりしと。又また夕飯ゆふはんを此こゝにて乞こひ。兎角うづかど支度しどをする程ほどに隣となりり座敷ざしきの一群いっしゆんは。駕籠かごを併ならべてさんざめき。立行たちゆく様さまにて女房にようばうも。外戸かきど迄まで送り出ででけるが。頓とんて此方こゝちへ立歸たちかへり。「さア御静ごしずかになりました。ゆるく御支度遊ごしどあそばしませ。御連ごれんれを待まちつと御仰ごう

付つき。一昨日おとひ昨日きのうの疲つかれに。横よこになるより他愛たあいなく。前後ぜんごも知らず打伏うちふししけるが。隣となりり座敷ざしきに女の笑わらふ。聲こゑ喧かしましきが耳みみに入り。不圖ふと目を醒さめし日ひさしを見るに。早はやや晝ひるさがる頃ときなりけり。偕いっしょて善よく寐ねたりと思おもひなから。手を拍たたち鳴なげば以前の女房にようばう。嗽手水うすひちようづを持もち来きり。「御静ごしずかまるには彼方あつちの座敷ざしきが。御喧ごけんしうてなりませぬ。私も女にようで御座ござりますが。男おとこと違ちがふて益えきもない。口數くちかずの多い者もの。静しずかにしなと云いふのも聞きかず。此方こゝちらを覗のぞてそはく。若わかい女計にようけいり故ゆゑ。猶なほほ馬締うまぢが御座ござりませぬと。話わの内に京太郎きやうたろう。嗽手水うすひちようづを使つかひし。ほんに今朝けさは静しずかであつたが。何日なにひの間まにか御賑ごにぎかになつた様子ようす。御親類ごしんるいか御客ごきゃくか。問とはれて女房にようばうは傍そばへ寄より。「あれは私が若わかい時とき勤とめました旦那だんなの娘むすめ子こ。浪華なみはなの方で御座ござります。大和廻やまとめぐりの戻かへり掛かけ。此こゝの内うちにも四五日ごにふにいつ滞留どまりう昨日きのうは生駒山いこまやまを見て。鷲しゆの尾おの觀音くわんおんへ。參詣さんぎするどて出でられまして。昨夜おとよは豊平とよへいへ一晚いっばん宿しゆくり。先ましがた戻かへりましたが。今日は五里ごりでも三里さんりでも。行いけ次第しだいに大阪おさかの方へ歸かへると立支度たちしど。今いまに静しずかになります。主人しゆじんだけ身み最負さいおに。賞あめる様に聞きゆれど。随ま分ま奇麗きれいに御座ござります。御規ごのりさまして御覽ごらんじませと。言いへどにつこり京太郎きやうたろう。笑わらた計けいりに色いろを好このむ。性質せいかつならねば見向みむかもせず。吾われも浪華なみはなに急いそぎの用もち。思おもはぬ熟睡じゆくすい暇取ひまどりりしと。又また夕飯ゆふはんを此こゝにて乞こひ。兎角うづかど支度しどをする程ほどに隣となりり座敷ざしきの一群いっしゆんは。駕籠かごを併ならべてさんざめき。立行たちゆく様さまにて女房にようばうも。外戸かきど迄まで送り出ででけるが。頓とんて此方こゝちへ立歸たちかへり。「さア御静ごしずかになりました。ゆるく御支度遊ごしどあそばしませ。御連ごれんれを待まちつと御仰ごう

たが。未だに御見へなされぬ御様子。後から御出でなさるも知れぬ。貴方はまア何方らの御方御名は何と御仰りますと。問はれてはくく打領き。「深切に辱ないが。些細あつて名も所も今は名乗りて聞かせ難し。世に承らへなば重て來たり。ゆるく禮は言ふ可しと。二度の食事の價を取らせ。つと其處を立出で。是れよりは猶ほ遠きを厭はず。人目稀なる道を求め。山を越へ野を分けて。一里餘りも行過ぎしが。彼の花園を出づる時より。見馴ぬ男兩人計り。後に付き來りたるを。何へ行ける者なるかと。思ひし儘にて捨て置きしが。右へ曲れば右へ曲り。左へ折れれば左へ折れ。更に蔭を離れ遣らず。見へ隠れに今も來るを。心付て京太郎。立止まりて彼の者の。近づくをはたと睨み。「己れら必定黒塚の。官八に頼れて。吾行く先を見極めんと。尻に付きて來りしなる可し。是より歸らば助けて呉れん。強て行かば手は見せじと。刀の鞘へ手を掛くれば。件の男仰天し。黒塚も白塚も。夢にも存せぬ御許しと。雲を霞と逃げ歸れば。其の儘にして追ひもせず。此方も又道を急ぎ。夜通しに漸々と。浪華へ出では出でなから。近江に生れ只だ一度。來りし儘にて其さへも。年月の經ちしかば。道も忘れ人に問ひ。大和町に尋ね行き。確か此處ぞと福原屋に。案内乞ふて京太郎が。參りしと言ひ入れければ。徳兵衛夫婦。喜び大方ならずして。先づく此方へと奥へ通し。「鐘三殿の急病にて。果てられたるは書狀にて。其時知らせられたるが。其後更に便りなし。此方よりも行きて様子を。尋ねる

か左もなくとも。人は遣る可き筈なれど。商買用にて暇なく。無沙汰に過して言ひ譯なし。偕て何用にて出でられし。久しく見ぬ間にも立派な。男になられて芽出度と。夫が賞むればおたへも諸共。「ほんに鐘三が若衆の時に。似て居てあれより又奇麗な。其方か一層女なら。従弟合せで徳の助が。嫁に貰ふと丁度善ひ。何より先に問ひたひは。鐘三は直ぐに女房を持ち。梅の助と言ふ子もあるよし。此方からは小笹の所へ。度々文を遣つたれど。遂に一度返事ををこさず。無筆でも餘もやあるまい。里は何れから貰ははれたと。問はれて眉にしわを合せ。「初めの程は何れより。迎へられしか嘗て存んぜず。ついぞ今まで里方より。便りのありし事もなし。然るに先頃父諸共。籠り者を取たる後にて。懺悔の様に母が自から。昔語りを致たされたを。承はれば其れかと思ふ。事のなきにも非らざれど。何か母の懺訴を致す様にて私から。どうも人には言ひ難し。筆跡も美事に致さるゝが。返事を上げぬは若し手振を。見知て御出で遊すかと。其用心に候可し。其は先差し置て。誠に世界の繼母に。見せて手本にさせ度御氣質。實の親にも優りし御慈愛。其の母上の御腹立。見るに忍びす私は。人をあやめて立退きしと。有りし事共物語れば。夫婦の驚き一方ならず。女は取分け心狭く。おたへは涙目に持ちて。おろおろすれば京太郎。態どにこく打笑ひ。「必らず共に御心を。苦しめ給ふな先づ當分。御隠まひだに下さらば。國の風分聞合せ。身の治まりは思案あり。只今申上げたる通り。人の憎みし倭

人なれば。切り捨てたりとて我行へを。左迄厳しく尋ねはせむと。其の身の覺悟あきらめなから。少しの内も伯母の氣を。安めん者と言ひくろめ。此に滞留したりけり。是よりして京太郎を。奥の二階に込め置きて。内の者にも猥りに逢せず。兎角する間に九月になりぬ。或時に京太郎。手を清めんと下に御り。ふつと部屋を差し覗くに。おたへは文を膝にのせ。悲嘆の涙に暮るゝ躰。心ならずと傍に寄り。伯母さんには何んで泣き給ふと。問はれて漸々顔を上げ。御身の名宛で黒塚の。官八と云ふ此書状。此には居らぬと言はせられたれば。此は鐘三の武士受人。知らぬでは濟まされぬ。居らぬでも置て行く。來たとき渡せと使は歸へらず。兼て噂に聞た官八。其方に見せて勘忍ならぬ。事でも書てあつては悪いと。私が封を切て見れば。尋常に名乗て出で。打たるれば仔細なし。愈々隠れ忍びなば。國に残し義理ある母と。梅の助をも差し殺し。相敵にならうとある。是を私が押し隠し。見せず置かば小笹殿の。親子の身の上。とありて其方に見せたら。打たれにゆくであらうぞと。途方に暮れて居るわいなと。咽び入れば京太郎。何んの。私が。返事を遣れば遂ぞすむ事。御苦勞なされて下さるなど。硯引寄せさらくど。書終て封を付け。下女を呼びて其の使に。渡して歸せと投げ與へ。二階へ上る袖を扣へ。其方が今の返事には。何んと書て遣りやつたと。問はれてちやんと形を正し。御心安めに今迄は。申くろめて置たれど。人を殺せば死ぬのが常法。只今の返書には。兄を打て立退く

段。門を叩て告げ知らせし。其時さへも出で遇はざる。腰抜け武士を相手とし。返り討ちになさんのも。餘り不憚の事なれば。來る廿日主君の菩提所。天満山長法寺へ。行きて某切腹せん。其見て怒りを時らす可し。此由を聞へ上げ。檢試を乞ふて置く可しと。事短かに言ひ遣りつ。偕て此の後は梅の助。定めて是れより頼寄る可し。彼に不憚を掛け給ひ。母の小笹に逢はれし時。何様の御腹立あらう共。まゝ私に。御免なされて世話してたべ。廿日に彼處に趣くに。道中を二日と積り。明日より五日の暇のあり。今迄は人目を忍び。二階に計り住みたる故。此處より近き道頓堀の。景色さへも未だ見ず。此世の名残り五日の間。浪華の名所を見盡くさん。徳兵衛殿は今朝早う。出でられて御留守の様子。宜敷申し給はれと。更に動せぬ健げさを。見るにおたへは猶ほ悲しく。へ應もしかゝかせざりけり。徳兵衛も此由を聞き。悲しき事限りなく。假令落よと進めても。逃げ隠れ可き京太郎が。氣質と見へねば言ひも出ださず。只だ此上は神佛を。頼むより外せん方なし。武士の義理は金づくにて。行かぬ者にはありながら。万一命救はるゝ事もや有らんと。おたへに多くの金を持たせて。大和の高市へ。立たせる用意しつ。とは知らずして京太郎は。貯へ乏しくなりしかば。五日の間の使料。吾に給へと伯母に貰ひ。先白小袖水上下。最後の晴衣を呉服屋へ。誂へ置き名所古跡は言ふも更なり。神社佛閣残る隈なく打廻り。早や五日目の夕暮方。仕立上りし小

袖上下。受取りて其の包を引提げ。直ぐに大和町へ。歸らんとなしけるが。讀賣とか言ふ者の。編笠を打破り。向ひの方より聲高く。此は此度新版の。新町太夫の名寄の評判。御求めなされと言ふを聞き。吾未だ遊女を揚げて。一度も遊し事なし。此世の思出新町へ。此宵行きて大和町へは。早や歸らずして夫より立たん。慰いに今宵歸り。水社社をお目につけ。伯父上や伯母上の歎きを増すは悪しかりなん。生涯に只だ一夜の遊び。名高き太夫に遇ふて見んと。彼の讀賣を呼び止め。求めて見れば玉柏葉屋。柏木太夫とめにあり。此名はどうが覺へありと。打案じて其れよく。彼の東大寺の八幡は。親人の納められし。木刀の額と併らんで。牡丹を書きし名前願主。是も奇縁と新町の。方へ趣く後影。彼の讀賣は打見遣り。確かに夫に違ひなし。合點行かすと後に付き。來るをば知らず京太郎。新町に立ち越へて。玉柏葉屋の戸外に佇み。「不案内なる田舎武士。押し付けがましい事なから。此の抱への柏木太夫を。此宵揚げて遊びたし。若し差合ひならば貰らひとやらが。出來れば頼むと言入る。家内の者共これを見て。幸に太夫様も丁度御暇。しかし此は置やと申して。女郎衆を置きます計り。御客を致すは向ひの揚げ屋。矢張回家で又柏葉屋と。申へ御出なされませ。御案内致しませうと。連れ立ち行けば彼處の仲居。京太郎を座敷に伴ひ。御茶よ酒よと待遇囃す。此方は何かうる／＼しく。手持なければ藝子を呼び。歌はせ舞はせ其を興に。飲まぬ盃打廻らし。待つ事凡そ一時餘り。漸々に

して出て來たる。太夫の様を見るに。花に例へば半開き。麗しけれどいと若し。京太郎心にいぶかり。既に名寄せの初筆に撰ばれ。遠き田舎に額を納め。世に知られし遊君なれば。早や年はふけつらんと。思ひの外まだ盛りにも。ならざるは此頃彼が名を次きし者ならんと。推量しつ初対面の盃を。取交し。偕て打伏して語ふに。何を言ふても呼吸の下に。答ふるのみにて深く耻ぢ入り。彼方よりは假染にも。物言ひ掛くる事もなし。元傾世は手練とか。手管とか云ふ術ありて。客の心を取る者と。兼ねて聞きしが其に似ざれば。御可笑からねと又露計りも。憎む可き處もなし。初見參故何事も。うちそばむ者ならんと。思へど又の逢ふ瀬を契り。再び此へ通ふ可き。身にもあらねば其の儘に。立ち別れんとしたる時。柏木は形を正し。「方様には早や奥方を。向へさせ給ひしかと。例の呼吸の下に問ふ。京太郎は打笑ひ。「また前髪さへ剃らざる身。如何でか去る者あらんと答ふ。「去らば吾か身を妻として。後言ひ兼ねて顔打被ひ。差し仰下けば太息を付き。「偽りにもせよいと嬉し。去はさりながら譯ありて。一生妻は持つまじき。誓を立て、置きつるなり。去らばと言ひ捨て行かんとする。向へ廻り柏木は。用意の剃刀取り出し。既に自害と見へければ。驚き慌て押し止め。「こは／＼狂氣かどつくりと。氣を静めよといふ顔を。つれ／＼と打守り。「仍ない事言ひ出して。御聞き入れない其時は。自害しようとは兼ねての覺悟と。又取り上ぐる剃刀を。布呂敷包押掛けて。漸々にもぎ放し。「女房に持たねば

何うあつても。「私は生きて居りませぬ。」ホイと計りに京太郎。黙念として居たりしが。暫くあつて顔を揚げ。「虚に命は捨てられぬ。其深切を見なからに。振り捨て行くは冥土の旅。是見てたべと伴の包を。引きほどきて投げ出す。柏木は手に取り上げ。「淺黄の上下白小袖。己りや腹切て死ぬ軀。」と云いど恠り驚く柏木。押鎮めて前後を見遣り。「某は大和の高市花城の家中。落窪の京太郎と言へる者。しかくの事に付き。官六郎を打て立退き。斯様くの譯ありて。是より直ぐに國へ發足。明後廿日長法寺にて。切腹して相果つれば。夫婦の堅め思も依らず。最後の衣服を見せたるが。偽りならざる是れ印しと。初め終りを猶ほ詳しく物語れば。柏木は只だ泣きに泣入りて。更に正躰非らざりしが。涙を袖にかひのこひ。「嬉しかりしは只だ夢の間。此身は如何なる業人ぞや。御義理ある母上や。御弟子様を御思召。武家の生氣地はせん方なし。冥土で御目に掛りませう。然し其時御忘れ遊し。彼れは何處の女であつた。御仰た時の爲め。此世は愚か未來永々。夫婦に違ひないと云ふ。誓紙を書て給はらば。私や其を血脈に。心よう死まずと。又打伏して泣き居たり。「其こそは心安し。五十年が百年でも。其方が彼の世へ來る迄は。蓮の臺に暮住み。安じやんなと料紙硯。棚に在りしを取り御し。墨搦り流し筆早やに。書き終る内短か夜の。早や白らくど明け渡れば。京太郎は仲居を呼び。「價は望みの通り遣らんが。大和の高市と云ふ處へ。通し駕籠が頼みたいと。言ひ付け遣りて去りげなき。躰に待遇

なし人々に。暇乞ひして立出づれど。嘆きかうじて柏木は。差し込む癪に胸苦しく。倒れしままに送りも遣らず。様子知らねば仲居共。「又どうぞ御近ひ内に。御機嫌宜うと口々に。言ふを聞き捨て乗り移り。急で頼むと言ひなから。駕籠の簾垂を引御す。彼の木津川の寮預り。塔八は用ありて。よべより此に有りけるが。不圖京太郎が歸りを見付け。不思議相に彼に付き行く。向ひより一人の男。是れも何やらうろく來掛り。塔八が袖を引き。「何んぞ見たか。彼れは確か落窪の若旦那。己れは此頃太夫名寄せの。讀賣をして歩行くか商賣。其を昨日買はしつた。其時に心付き。後を付けて是れ此の玉柏葉屋へ。泊られたを見て置たから。貴様の處へ今知らせに行く出掛け。大和の噂を聞たであらうな。後の月官六郎を。チ、見事に打て立退かれ。彼の官八奴が兄の仇と。彼方の行衛を尋ぬる取沙汰。其れに此から大和迄。通し駕籠を言ひ付けて。敵の中へ行かるは。何んぞ仔細が有るで有らう。近江へ行た最一人も。旦那の供で平野町の。倉邸へ來て居れば。丁度善ひ是れを誘ひ。三人で後ぼつ驅け。まさかの時は。「是れ人か聞く。静かにと後は小聲で囁き領き。二人打連れ出で行きけり。官八は京太郎が、返書を見て憤り。思へど彼れには敵し難きを。己れも知れば却て是れを。幸ひとして臆病者ど。嘲けられしは取隠し。只だ京太郎が人を害し。立退きたる前非を悔い。立戻りて來る廿日。長法寺にて切腹なしたき。願を出し候と。訴へければ千早の助。其は神妙なる事にこそ。世は靜謐の時な

るに。敵打なんぞとて。國に騒動ある時は。室町御所への聞へも如何。只だ穩便にするに如か
む。彼れ切腹だにするならば。官八が怨もあるまじ。疾々用意を吩咐置き。望みの通り京太郎
に。切腹申し付く可しと。長法寺へも此趣を。告げ知らせ給ひけり。既に先にも記し、如く
天満山長法寺は。花城代々の菩提所にて。常門村と云ふにあり。彼の鐘三を葬りしも。此寺の
塔中なる。空安寺と言へるなり。斯くて廿日となりければ。長法寺の廣庭に。幕を張り疊を敷
き。切腹の席を設け。檢視は老臣本竹喜太夫。原北門作。仰せを受け。介媒には早野矢軍次。
各彼處に合詰むる。當の敵の切腹なれば。見届の爲め官八も。肩肘張て控へける。京太郎は靜
やかに。入り來つて此躰を窺ひ。頓て作法の衣服に改め。人々に一禮し。眞中に押直居り。檢
視の方に打向ひ。「例へば何程宿意ある。人にもせよ打果たさば。其の時直ぐに訴へ出で。御指
圖に委するが。規ど知りつゝ立退きしは。申さん様なき我不届。御赦免有つて武士らしく。切
腹御免被下し段。重々厚き御情。冥土へ參て父鐘三に。吹聴致さばさぞ喜び。兎角は右の御禮
を。宜敷御仰せ上げられて。又是より別段に。喜太夫殿に願ひ置くは。某最前當所へ着くと。
「其儘に。此の塔中空安寺の。父の墓へ參詣致し。只今迄彼の寺に罷り在り。母弟に對面せず。
到着致せし事も告げず。生中に暇乞ひ。致して嘆きを掛けんかど。直ぐ様是れへ出でたる段。
吾無き後にて序もあらば。宜敷傳へ給はるへし。まつた叔父より傳來の。刀も即ち空安寺へ。

預け置きて候へば。彼れより受取り梅の助が。成人の後差させ給へど。是れをも御話し下さる
る様去年紀の路の御旅館にて。召し抱へ給はりし。其時よりして貴殿には。別して御恩を受け
たりと。父の常々物語。其の御恩意に甘へまして。御頼み申すがまだ何か。ナ、其れ。何
にか辭世殘さんと。歌詠みましたれど。人に見せるは耻かしう御座る故。父の位牌の裏へ張り
付け。置きたる由も母小笹へ。御物語下さるべしと。言ひつゝ一寸と見回はりて。官八殿先達
て伺候致せし其の時は。門を閉じて関と靜まり。御風邪とか承給はる。早速の御全快。珍重に
存ずると。さら／＼と言ひ流す。言葉淀まず急しからず。常に變らぬ優美の躰。あつたら惜し
き若者を。無殘々々殺すぞ口惜しき。命を助くる手段もかなど。口に言はねど有り合ふ人々。
心に思ひ目をしば叩き。面を揚ぐる者もなし。斯かる處へ走り來る。小笹は左ながら狂氣の如
く。並み居る人をかき分けて。喜太夫か前に手を付き。泣きはれし顔を振り上げ。「夫鐘三が果
てたる後。官六郎は私に。戀慕。證據は數多の此艶書。道ならぬ不義言ひ掛くるは。武士でも
無い人でも無い。そんな者を殺したとて。腹切るには及ぶまいと。手前勝手か知らねど。何卒し
て京太郎が。命を助け給はる様。御思案成さり被下ませと。涙と共に打ち頼む。喜太夫件の文
取り開け。「あゝ京太郎か手を下さぬ。其れより前に此艶書を出す時んば官六郎押込か御暇か。
何れにしても御咎め。掛るは必定。去りながら。今と成ては何とも早や。原北氏の御所存は。

な。矢張御同意。此事申し上げたりとも。御採り用ひは御座るまい。是れより外にと官八か。方へ夫ぞと目で知らせ。何んぞ明らかなきつとした。證據があらば願ふて見んと。依るも觸るも京太郎。最負に官八むしやくしや腹。「死人に口なし兄の偽筆。造しらへ事して瞞めんと。思ふても左うは行かぬ。さア早く切腹しろ。但しは己れがと立ち掛かるを。矢軍次は押隔て。「介錯は拙者に致せと。殿より御仰渡されたり。入らざる御世話と引据る。小笹愈涙に暮れ。其れぢやに依て何日ぞや私が。此の文を持って行き。官六郎に愧をかへせ。存分言うとした時に。其方は留めて私を寝かし。竊と後で行きやた故。こんな悲しい事になつた。梅の助の喧嘩から。起た事で切腹させては。私が濟まぬ道か立たぬと。人目も耻ぢぬ。咽泣。京太郎は肅淑に。「今に初めぬ御慈愛。世に有難事ながら。只今とやこう御仰ると。貴女とどうか言ひ合せ。命を惜むなんととて。己れが未練の心に比べ。蔑む奴が御座ります。いざ御見届被下と。腹切刀取り上ぐる。表の方より十六七の。顔善き娘驅來り。「まア〜待てと京太郎が。短刀持つ手にすがり付き。「今の様子は粗まし聞た。何んぞ悪事のきつとした。證據があらばと貴方の御言葉。其れが有る。其れが有る急かすと聞いて下んせと。言ふは却て急きのぼせ。京太郎は猶ほ落付き。「此女は只だ一夜。假寐の夢を結びたる。柏木と申す遊女。是れへ參るは定めて狂氣。怪我せぬ様に退て居れ。「いゝや退きやせぬ。「はて放せと。争ふを又官八か。もどかしさうに打見遣り。

「イヤ様々の奴が來て。段々時刻が遅なる。あれあの賣女を引き出せと。云ふを喜太夫引取て。「いやさな云れて黒塚氏。何時迄に京太郎に。切腹させよの御仰はなし。あれ〜日差しいまだ高い。夕暮迄に落着すれば。吾々が役目はすむ。まだ年若なる女ながら。思ひ込んで言ふ様子。狂氣の躰とも思はれぬ。こりや〜女心を鎮め。とつくりと仔細を申せと聞く嬉れしさ。「はい有難御座ります。只今此で京太郎様に。私が申す事を。先づ御聞き被下ませ。モシあの私は。玉柏葉屋才兵衛が養子娘。名は谷と申す者。柏木太夫と言ふたは偽。實の父は此の花城の。殿様の御扶持人。耻かしながら其の古。浪々をされた折り。母様はお果てなさる。其の時はまだ私は小さし。育つに手當がない故に。玉柏屋へ賣られた處。どう言ふ縁やら才兵衛様。御夫婦が。不憫がられ。遂に其處の娘にされ。お谷〜と愛しがつて。下さるのに付け上り。幼ない心の辨へなく。我儘一杯したのが今でも。僻になつたが勿躰無いと。思ひながら榮耀の爲勝。其の上には有難い。手前の好た男を見立て。婿にでも嫁にでも。先きの望みの通りにして。一生不自由はさせまいと。常々に御仰た。處に此頃大和廻りの。戻り掛けに河内の高安。花岡山の麓の茶屋で。貴女を不圖見染た故。其處の女房は。幸いにも元柏屋に居た女。後で貴女の御名と所を。聞て呉れと頼て置き。供の男を御後から。見へ隠れに遣りましたら。散々に叱られて。悄悄と歸て來る。彼の茶屋の女房にも。御名も所も御仰らず。とんと尋ねん頼りもなく。

腹が立つやら悲しいやら。何卒ま一度遇せてたべと。詮方盡きての神頼み。其の御利生やら私の内へ。柏木太夫が揚げたいと。御出なされた其嬉しさ。藝子衆や仲居には。粗まし様子を恚々。話して置て柏木さんの。髪飾りや衣裳を借り。願ひ適ひて新枕。其の嬉しさに引換へて。聞けば聞く程悲しい御話。まだしも頼みは今言ふた。通りに實の父さんが。此に御座れば相談したら。どうか仕様も有らうかと。夜晝分かず駕籠を急がせ。御前より先へ行き。父さんに委細の様子。話したら。安じるな。京太郎が命を助け。腹切りを外へ譲ると。押し付け此へ御座んす等。思しい其の上下。早う脱で下さんせと。言葉急しく言ひければ。京太郎つくつく聞き。思ひ掛なき物語。成程何日ぞや花岡より。我が後を付け來たる。者のありしを確に其れど。官八が方へ目を付け。思ひ違ひて充分に。叱り懲して追ひ遣りしが。其方の供でありしよな。拙なき此の身を思ふの餘り。或は遊女の姿にやつし。或は遠き田舎迄。後を追て來た深切。仇には思はぬ去りなから。人をあやめし吾が罪を。外へ譲らん道理はなしと。言ふに官八打領き。人の將に死なんとする時。其の言ふ事善とやらん。京太郎のが是りや尤も。彼の女はどうでも氣違ひ。是れ腹切りを名代で。濟すと云た吾が親は。まア何者だ其れ聞こうと。ぐつと詰め寄る此方より。外でも御座らぬお谷が父と。申すは拙者と天原流波。高手小手に戒しめたる。一人の僧を引立て。側へ突き据へ置き。さア京太郎殿の切腹を譲る人は是れ此にと。短刀取上

げ吾と吾が。腹にくつと突き立つる。なう悲しやとお谷が仰天。喜太夫初め四邊の人々。是はくんと打驚き。様子如何にと控へ居る。流波一息ほつと付き。或時に官六郎。某を竊に呼び。落窪鐘三に反逆の企ある事確に聞く。去れども今は殿の寵臣。其事申し上げたりとも。御聞き入はよも有るまじ。只だ人知れず彼の鐘三を。失ふより外せん方なし。竊かに毒藥調合して。吾に得させよ事あらば。取立遣らんと直筆にて。一通を書い認め印迄据へての無理頼み。己花城の扶持人と。成りしは何れも知ての通り。官六郎が皆執持ち。恩を受けたる人の頼み。反き難くて望に委せ。與へし毒を花見の時。味淋酒とやらんに混ぜ。鐘三殿に進めし故。血を吐て遂に落命。左すれば取りも直さずして。京太郎殿の爲めに。官六郎は親の敵。打たれしは天晴手柄。何切腹に及ぶ可き。あゝ今思ひ合すれば。鐘三殿に無反ありとは。後形もなき彼か偽り。小笹殿に昔より。心を掛けて居たりし故。後家にして後靡けんとは。言ふ様もない人非人。其に加擔の申譯。譲り受けたる此の自害。道に背た老木を一本本枯せば道を正しく守る。梅と櫻の若木の二本。世に盛なるを知りながら。どうして餘外に見て居らりやう。是れ娘。イヤ玉柏のお谷殿。一夜の情に百歳の。命を捨てに來た貞節。感入て言葉がない。其と言ふも御兩親の。教へ方が善ひ故ちや。猶ほ此上も御仰を守り。孝行を盡すが肝要。他人の己が腹切るが。何故其の様に悲しいぞ。餘まり嘆くと縁でもある様に。聞へて思ふお人が。女房に持て下さる

まいど。言ふも苦しき息使ひ。官八は延び欠伸。「イヤ色々の馬鹿者で。もう押付け日も暮れよう。偕て退屈や退屈や。殿に御師範される程。武術に達せし兄おや人。鐘三を殺す心なら。毒薬よりは人知れず。暗打にされる筈。見るに及ばぬ證據の書付。印が有つても其も似摸者。小笹か持て来た艶書と。同じ類の者であらう。そんなら宜いで京太郎を助くる事は思ひも寄らぬ。愛いや腹の切り損と。空嘯けば流波は頷き。「そう言ふで有らうと思ひ。生た證據と持て来た。此僧は當寺の達伸。空安寺の住寺怪來。官六郎と無二の懇意。鐘三を失ふ巧を語り。毒か廻りて死屍の色。變ずる事の若しありとも。沙汰して呉れなど頼み置き。京太郎殿小笹殿の愁傷の處へ付込み深切らしく官六郎が。進て此奴に取り置きを。させた時には己も一味。底の底迄知て居る。能く〜思へば官六郎。鐘三が劍術手練に恐れ。毒を以て害せしとは。官八にも言ひ難く。彼は却て知らざるか。とまれ斯くまれ此怪來。御詮議なされ方々と。言ふに門作怪來か。襟首押へて膝にひしき。「包まず言へど急ちがへば。恐れ入つてがた〜慄へ。全く愚僧は毒薬の。事をば更に存じ申さず。官六郎の寺へ來たられ。鐘三は熱氣甚だしく。身内の色の變じて死したり。不審しく見ゆれど仔細なしと。申されし故其の儘に。改めもせず葬りたり。もう御許しと泣き託ぶる。喜太夫は打笑ひ。「流波か命を捨てたるが。何より證據門作殿早や其者を究問にも及ばず。さらりと事は分つたり。もう此の上は京太郎。切腹には及ばぬ〜。小

笹殿お谷とやらも。安宿して控へて居や。押付け殿へ言上せんと聞て流波も打喜び。空安寺へ預け置かれし。京太郎殿の大小は。元より無道の此怪來。小笹殿には渡さずして。賣り拂はんも計り難く。取り戻してあれ彼れ迄。持參して置きつるなり。切腹御免相濟では。御腰か明ては見悪い。取り寄せさせて帶されよ。やれ〜嬉しや辱なや。もう是でさつぱりと。此世に思ひ置く事なし。去らばと計り潔く。笛のくさをかき切て。俯伏し倒れ息絶へたり。お谷は死屍に取りすがり。「一つ適へば又一つ。是りやまア何しやう何んどせうと。前後不覺に取亂す。官八は拍子抜けやら腹立やら。小柄の小刀抜取て。側なる位牌堂に打突くれば。合圖と覺しく戸を押開き。内より轉び出でたる兩人。是れも細もて戒しめられ。手足は適はず目はきよろ〜。官八は只だ呆れに呆れ。開たる口を閉ぎて遣らず。矢軍次は差覗き。「誰かと思へば此兩人は。黒塚殿の御侍士。何故あつて此に忍び。何の咎にて此細目と。怪かる言葉も終はらぬ内。「其の仔細が吾々か。申し上げんと彼の堂より。續て出づる若者三人。喜太夫目早く。「やア御身達は追放されし。小ぼろ組の走り使。「ハッ御仰の通り拙者事は。門松毬藏此に居るは。熊月輪兵太。皿皿兵衛。仔細は段々申し上げん。此毬藏は浪波の新町。玉柏屋の下男に住み。本津川邊の領預り。只今の名は塔八。然るに此頃途中にて。輪兵太に不圖出遇ひ。やれ久しやと話の内。彼の者の申すには。己は近江の何某殿の。家中に奉公して居るが。其殿様の御

倉邸か。あの平野町にある。其れを旦那が預られ。御供で己れも来て居た處。此秋は御間な故。大和廻りがして見たいと。御願ひなされて御出立。まさか高市を追放せられ。参り悪くいと言はれもせず。随分人に見られぬ様に。氣を付けて丁度高市に。宿た晩に踊りの賑ひ。夜なれば氣も置かれず。御案内して旦那様に。御見せ申して居る内に。やれ喧嘩ぢやと大騒動。誰かで見れば官六郎を。京太郎殿が打取り。立退て行かるゝ様子。我々か命乞ひして。下されし恩人の。御息の事なれば。官八か敵なんどと。狂ふ様な噂があらば。返り討ちにして遣らふ。まア京太郎殿の。行衛を心掛けて。尋ねて置けど其夜の事共詳しく話し。然るに一昨日玉柏の内より直ぐに大和迄。通し駕籠にて歸る客。ふつと見れば其人なりと。語るを引取る皿兵衛門。「私は今讀賣渡世。編笠越に京太郎殿を。見掛けて毬藏へ知らせに行く出合頭。只今あれが申た通り。彼の大和迄歸へらるゝを。彼地でも見付て。何んにもせう。打捨てゝは置かれぬと。輪兵太をも誘ひ出し。敵討なら京太郎殿の。力となる所存。思ひの外切腹と。聞て是非なく先彼れなる。位牌堂の中に隠れ。様子を窺ひ居たりしに。と言ふに輪兵太言葉次ぎ。「吾々よりは早や先に。手鎗を以て忍びの者の。誰かと思れば見知りある。黒塚の侍士なり。御覽の如く厳しく締め。様子を問へば官八か。例の臆病京太郎が。切腹せんと心を許させ。若しや吾に打ち掛らば。助太力せよとの伏兵なりと。言ふに毬藏又入交り。「お谷様貴女に男の善ひ婿か。

どうぞ取て上げたいと。仲居のお光が先頃話。心當りが此方等にあれど。今ではどうも行き憎いと。私か申したる事を貴女に。言ひは致しませぬが心當りと申したは。外でもない京太郎様の。矢張事で御座ります。誠に是も不思議の御縁。大和通りに私が。御供致すと事か分り。是程御氣は揉ませぬ。イヤ是は後で緩るゝと。申ても善ひ事で有た。其よりは肝心の。モシ福原屋とやらの御内儀。もう善ひは御出でなされと。後を見回へり呼びければ。ハイと答へて走り来る。おたへは直ぐに京太郎が。側へ摩寄り。「ほんにまア。危い事であつたのう。其方よりは先へ来る。等で有たか遂遅れ。もう京太郎に遇れぬかと。泣て居たを彼の衆達が。深切に様子を聞かれ。其れなら此方へ来いと云ふて。位牌堂へ隠して下され。先からの様子を色々。聞て居るひやいさ危なさ。もう命も縮んだ様な。まア事なく濟んで芽出度。着代へも此へ持つて來たど。差し出せば京太郎。押頂きて傍へ置き。「官六郎に乗り掛り。止め差さんとなしたる時。何やらん言ひたるが。早や言舌の廻り兼ね。聞き取れざりしが今思へば。未後に惡念發起なし。父を毒殺なしたる事を。懺悔なしゝか其れはともあれ。段々の様子を聞けば。此まゝ自殺もなし難し。命惜むに非らざれど。先づ一通り殿に伺ひ。御指圖に委す可しと。願へば喜太夫打領き。「實は殿様法場迄。忍んで先程御來臨。事の趣言上の御思召を伺はん。切腹御免は相違なし。衣服を改め帯剣し。暫らく控へ召されと。立行く後にておたゑはふつと。小

笹の顔を打見遣り。「ヤアお前は雪さん。面目なう御座んす。と言ひつゝ流波か切腹せし。短刀取り上げ髪振り解き。根よりふつゝと押切たり。京太郎御綾に向ひ。「母の小笹に遇はれし時。よしや御腹か立とう共。勘忍なされ給はれど。申し置きしは此處のこと。私も存せねど。是には様子の有る事ならん。其は緩るゝ聞かせられてど。執成す内に喜太夫立出で。「殿様の御仰せの趣。黒塚の家没取なし。官八並に家來の兩人。綾七に咎は無れど。親の罪是れも免れず。怪來共に當國を。追ひ放てよとの厳しき御意。早や矢野氏原北殿。追立て召されいと言ひければ。承はり候と。官八初め細付三人。引立て引立て矢軍次門作。表の方へ出て行く。喜太夫重て。「四。熊月。門松三人。追放の身を觀見ず。此に來たるは不屈ながら。鐘三か恩を報せんと。誠ある志に。免んじられて御委いなし。偕て京太郎は仰の趣。親の敵と言ふ事を。知らざる先に官六郎を。殺害せしは全く我儘。去すれば常の敵打とは。其意變りて賞し難し。然しながら是れ天の。恵と思へば穴勝に。憎むべき道理もなし。只だ何となく御暇。心靜に立退かれよと。聞て愈々お谷か安堵。おたる小笹も喜び顔。時に庭の切戸を開き。「失禮御免と利發の武士。静々と打通り。「拙者事は近江の國。光栗判官の家來。青崎武者五郎と申す者と。名乗れば喜太夫。「是は」。先年鬼門熊頼の。二人の賊首を召捕られ。御名の聞こへし景信殿。何の御用か先是へ。「イヤ是は恐入たる御挨拶。此頃拙者は光栗の。倉邸を預りて。暫く浪華に罷り

在りしが。少し計りの暇を得て。奈良の名所を打廻り。此御城下へ宿りしは。後の月の半頃。官六郎殿とやらんを京太郎が打果たす。處へふつと通り掛り。はて若年に似合ぬ手練。稻積流に疑なし。何者ならんと頼母しく。存せし處彼れに居る。拙者か下奴。輪兵太か。元は御家に居たるどて。詳しく落窪親子の身の上。物語を承給はれば。京太郎が父鐘三と申すは。元は茂山鐘三郎と。名乗りて矢張。光栗の近衆の武士にて朋輩中。京太郎も十歳計りの。時迄は折りゝに。遇ひましたれど成人故。見忘れながら左う聞けば。鐘三郎に生寫し。然るに一昨日輪兵太が。又段々と仔細を語り。是より大和に立越へて。恩人の悴の前途。見届渡しと暇の願ひ。其の意に委せ後を追ひ。某も參りしは。さいつ年。鐘三郎心に適はぬ事ありけん。手の傷む由を申し。暇を乞ふて近江を出國。彼が武藝を主人判官。殊の外惜まれて。今以て度々噂さ。此度の拙者か十産に。彼の茂山か悴なりと。京太郎を連れ下さらば。何程か喜ばれんに。どうか命を助くる手段も。あらんかと思ひし故。去れども他家の御仕置に。言葉を出さん様もなく。差控へ候ひしか。不思議の切腹御免あり。御暇を給ける上は。直ぐに道同致し度し。此段御仰せ上げられてど。聞て喜太夫思案なし。「故主よりの御所望なら。例へ用ある人にもせよ。差上げらるゝ様もあらん。此は暇の出でたる者。主人へ申す迄もなし。御心委せと言ひければ。「其は千万辱なし。京太郎も父の古主。よもや否とも申すまじ。いざ何れも御一所に。打連

れ浪華へ歸りけり」偕ても其後武者五郎。近江に趣き委細具に訴へければ。果して欣び斜めな
らず。京太郎には目見え言ひ付け。鐘三郎が知行に倍し。近衆の武士に加へ給ひ。且つお谷が
貞節をも。殊の外に感むられ。近江に下らば養親と。遠く離れて頼あるまじ。武者五郎が後役
を。京太郎に言付けて。倉邸に置かん間。彼處へ嫁取の御差圖。古の名字に改めて。茂山の京
太郎。元服の烏帽子親に。武者五郎を打頼み。お谷は假りに。柏木太夫の。名を借りたるが縁
となり。思ふ男に添ふなれば。鉄漿親に彼の太夫を頼み。婚禮芽出度調ひて。仲睦むく榮へ
けり。

大和の卷 殘編終

邯鄂諸國物語

播磨の卷 前編

鎗の權三が石突擱んでずんずとのばした昔の小歌

奴三笠が振出した六方は丹前風呂の今様姿

丁度三人息女氣質。氏無ても乗輿の玉。男舞の小菊が衣裳。其磧か口調にならひたる。注文目

録左の如し。

我手に我身を賣眞實娘

謠うたひをチッホウ淨土へ。見送つて苦海の勤め。客に合せる調子。紙鼓は元より浪の音に。聞えた室の津の港鼠。

命を寸切と投出した忠義娘

父が傳授の和巾さばきに。ハツチリ覺させた主人の眼。茶抄竹の曲りをためなほす。心は清き三の間の水淺黄。

足の非道に染らざる貞節娘

蒲公英鎗のボントと違ふた。乳母が仲人の頼み所。名を取交たる君の恵に。元の鞘に納りて。謫すました高砂の千歳茶。

天保子の春

柳亭種彦著

郡鄂諸國物語

柳亭種彦

播磨の卷前編

播州赤穂郡白旗山の麓に。古城跡今猶在り。往昔浮島大江之介。師春と云ふ者當地に住し。此の國半を司どりしが。此浮島の家につき。一條の話柄あり。大江之介はいと幼くて。父の家督を受継ぎけるが。幼なき時よりして。螢を集め雪をつかね。夜も厭ずして唐土の。聖賢の道を慕ひ。日本の文にも暗からねば。年を積て才ある人にも。勝りて其家益治まり。國は愈々賑いければ。家臣郎黨は言ふも更なり。民百姓に至る迄。此君の万歳を。祈ぬ者こそなかりけれ。あゝ月の清きに村雲あり。花の盛りに嵐あり。斯く迄正しき大江之介。さすが若氣の誤りにや。又は臣下に佞人ありて。其か進めし事かは知らず。色と酒とに心亂れ。晝夜舞ひつ歌ひつして。夢の心地に月日を送り。賞もなく罰もなく。訴へを聞かざれば。臣は叛き民は怨み。昨日に變る今日の有様。例へて言へば風渡りし。海の表に颶風。落し來りし如くにて。四釜赤穂の舟人迄。世の危きとぞ嘆きける。家臣多き其の中に。第一の老臣を。岩木原次平兵衛只平。

第二を青淵帶左衛門原記。第三を淺香逸之進宗味とぞ言ひける。岩木は一の老臣ながら。一昨年よりして目を病み。此頃は更に見へず。病の事なり殊には老人。苦しからずと座敷の内も。杖を許され。或は御前の。小御性など手に手を引かれ。折々機嫌は伺へど。病苦に身躰弱り果て。物の用には立ち難し。其故やらん斯く主君の。行跡宜しからざるに。口を嚙んで諫めも入らず。只だ青淵帶左衛門。深く心を傷むる様にて。或日淺香逸之進が家に來り人を遠け。小聲になりて言ひける様。「今更申すも新しけれど。變り果てたる殿の御身持。御病氣と言立て。京へ絶へて昇り給はず。又近江の國司。光栗判官知輝殿の御息女。かたゝ姫と御許嫁なされしは。大殿左衛門師住様の御ざいせ。早や彼の光栗の姫上も。御年頃にもなりしとて。御婚禮催促の。使者は追々來れども。其れ彼れの事に假托け。今以て迎へられず。若し待遠ふに思はれなば。勝手次第に外々へ。縁組あれと無法の御答。御破談にも及びなば。大殿の御思召を。背き給ふのみならず。知輝殿の音川家の。婿君にて當時の權臣。其れに憎まれ給ひなば。御家の爲めにも悪しかりなん。貴殿も心付かれしや。近頃川行半作が。推舉して差上げたる。蜘蛛と云ふ御手掛。早や年も経け顔善きと。云ふにもあらねど如何にしてか。殊の外の御氣に入り。其よりして御心。暴々しう成らせられ。今迄御目を掛けられし。者共に御前を。退けらるゝもいと多し。御小性の笹野權三。彼も何か不首尾にて。二三日出仕せず。彼の蜘蛛が男迄。恪氣なしとの事

なるか。其は兎もあれ其許は。茶の湯御師範申上げ。外々より取分けて。御心安い殿の事。蜘蛛を遠けられ。音川の姫上と。御婚禮ある様に。強く諫言申してたべ。吾々か慰むいに。諫を入れなば御心に。逆らいて悪しからんと。思ひ込んたる風情にて。沈やかに言ひければ。逸之進打領き。光栗殿と先殿とは。御一家よりも御睦むく。京都御在勤の御序で。近江へ下り其の頃は。未だいと幼なき姫上と。御許嫁なされし時。拙者御供に參つたれば。初めより存じて居る。知輝殿は家中の武藝か。自慢と見へて大殿には。見せられた其中に。京太郎と云者の。太刀筋か御意に適ひ彼れを家來に給はれど。御懇望ありしかど。彼方も惜みて呉れられず。今言はれた彼の權三。其頃の名は梅之助。彼の京太郎が弟にて。けし坊子が若衆髪に。まだ届かぬ程なれど。鎗を取た牀の堅め。末頼母しく見へたる故。兄の代りに然らば彼れをと。連れ歸へられ。て御家中の笹野の養子に仰付られ。愈々鎗を出精致すを。無用の事ぢや止めにして。らつぶを習へど意見を加へ。此頃鼓か餘程上達。其事を何故と云ふに。今貴殿の言はれしは。道理なれども浮世にあはず。最も白氏文集に。狐の女に化けたるは。左迄に害はなされども。女の狐になりたるは。何んぼう恐しき。者にて候とあれば。其蜘蛛か悪いにせよ。左程迄に御寵愛。厚き女を兎や角と。申し上げなば直ぐに御手討。拙者茶の湯は好きなれど。命を捨つるは好物ならず。岩木氏や其元と。違ふて御當家譜代にもあらねば。左程に危い御奉公。勤むる所存候はず。

幼い内は爺か側そばに。付て居て喧しく。劍術の軍學ぐんがくのと。様々さまざま替古かへこに攻め立てられ。武士のたしなむ事の程ほどは。大方心得罷りおほかたこころへまかり在る。並々の奴三人五人。扱連あきつれて掛ても。扇一本手に在れば。微傷も受けはせぬ。只だ恐おそしいは殿の太刀下。噂うわさしても身の毛かよだつ。茶の湯ちやのゆは家に傳つたへし術。武藝程は骨も折らねど。仰の通り殿を初め。家中大方我門弟。彼の出世した鎗。長刀。只一度も用立たず。其の閑に遊藝ゆうぎを。澤山習ふて置たなら。今頃は人々に。用るらるゝで御座らうと。今迄權三陳平を。相手あいてになして。深くは飲まぬ。酒に廻まはされ舌紛亂したちがれ。言ふ事他愛非らざれば。帶左衛門目に角立かどたて。「何か諄々々々くまと。「あゝ御酒機嫌ごしゆけんに候な。そんなら善よひはで歸りは致さぬ。去すれば殿の手討てが恐おそはさに。御不行跡ごふぎせきか募つても。安閑あんかんと見て居らるゝな。其それなら年頃頂めき召めされた。祿盜人ろくとうびとと御仰ごおやうるのが。正ただかに拙者せつしやも武士の端。高祿かうろくを頂戴ちやうたいする。其れだけの御奉公ごほうこう。心に油斷ゆだん致いたさぬ印し。御目に掛かけんと手を鳴し。小菊々々と呼ぶ聲に。十六七の色善よき女。何んの御用と立ち出づる。青淵殿御覽成あをぶちのせぢされ。美うつくしう御座らうかのう。琴も舞もすんど器用きよう。此れを殿へ差上さしあぐるが。生中の諫言かんげんより。御身の爲め吾身の爲め。熱藥ねつやくを以て熱病を。治すか覺への七加減ななかへん。此の小菊を御前ごんまへに。誘ふ序ついででに權三をも。同道致して參りなば。御機嫌は直らうと。最前招さいぜんまねいて置おきました。彼の岩木陳平いわきちんべいは。源次平兵衛殿げんじへいべゑだんの甥なまこ。殊ことには名字も同じ事。其れが毎日踊りつ跳ねつ。殿様の御機嫌ごんけんを。取とては色々頂うき物。是れをも呼んで權三と三人。

今迄酒を飲たべて居た。只今より御前ごんまへへ上り。小菊に舞はせ權三は鼓つづみ。笛ふえは陳平拙者ちんべいせつしやは太鼓たいこを。持もて御加増頂戴ごかぞうちやうたいか。是れ當世とうせいと申まをす者。伴作ばんさくも久ひさしい弟子。偕いっしょて茶の湯は無器用むきようなれど。御機嫌ごんけんを取とらせては。中々機巧きこうな生れ付き。あれには似にね三雪みゆきと言いふ。善よひ妹いもを持もちて居れど。惜をしい事にはまだ子供。四五年經つと盛りさかりになる。蜘蛛くまか年が老ける處へ。三雪を引換ひかへに。又差上さぐるで御座らうと。取とても付かぬ挨拶あいさつに。帶左衛門呆あきれ果はて。暇いとまも乞こはず座敷ざしきを蹴け立て。立たち行く方を逸いつの進しん。見返みかへりもせず。華美はでやかなる。衣裳いしやうを小菊こぎくに着きせ代かへて。輝あり計はかりりに装まはせ。權三陳平引連ごんざうちんべいひきつれて。館やかたへこそは立ち出でけれ。此淺香逸あしかぎの進しん。初はつの名は逸太郎いつたろうとぞ呼よびける。彼かれか浮島家うきしまけに仕つかへたる。初はつめを言いはんに。今より廿年計にんばかりいせん以前いぜん。丹羽にの國氷上郡田井くにひやうじやうたゐの住人ぢゆうじん。沼形善十次郎雲門ぬまがたせんじちらうくもかどと云いふ者。逆意さかぎを企たくて篠しのか峯かみの。要害えうがいに立籠たちこりし事ことあり。是れ浮島うきしまか領地りやうち。播州の境さかいにてありければ。足利殿あしかがだんの仰おほせを受け。大江之介おほゑのすけの父浮島左門師住うきしまさもんしゐぢゆう。討手うぢてとしして彼處かこに趣おもむきて。いたく攻せめて明日は早はやや。此城落このしろつ可よく見みへしかば。左衛門ざゑもん猶なほも油斷ゆだんせず。城の廻まわりを打圍うちかこみ。篝火かきりを燃もきつれ守り居る。折をりから陣所じんじよ近ちかく。二人打連ふたりうちつれ來る者あり。夜廻よまわりの者見咎みとがめて。「何者なにものなるかと問とひしかば。彼の二人ふたり懇いん懇げんに。「城しろより出いし降人かみなり。法の如ごとく右手みぎて差さし一腰ひとこし。身みに帶たいせず候間まう。大將軍たいしやうじんに御目見ごめみ得え偏ひとへに願ねがひ奉ほうると。謹かしこまてこそ述べにけれ。此時このときに左衛門師住ざゑもんしゐぢゆう。自身おのれに物見ものみをせんとてか。先手せんてに紛まれ居ゐたりしかば。篝火かきりにて熟ま々まと。彼

の者を打見るに。一人は總髪を。雪の如くに振亂し。腰の屈みし老人なり。一人は女かど。疑ふ計り嬋娟にて。十五計りの少年なり。用心す可き者ならねば。床几の元へ近く呼び。師住は某なり。何事か早や申せと。聞て老人土に平伏し。「彼の少年を指示して。是は翁が獨りの孫。父もなく母もなきが。一しほ不憫にこそ候へ。明日落城の其時に。むざ／＼殺すを見るに忍びず。君の恵の深きを知り。召連れ参りて割なき願ひ。何卒御陣に留め置かれ。御召使ひ給はらば。吾は直ぐ様城に歸り。明日の戦に最先驅。數ならねども此首を。御手の者に参らせ度し。偏に頼み奉ると。涙を流して言ひければ左衛門憐れど打見遣り。「様子に依りなば其悴。召抱へて取らせんが。先兩人が姓名素性。詳しく語れど有りけるにぞ。老人少し頭を揚げ。「聞へ上ぐるも耻かしや。世界廣しと申せども。吾程運の悪き者。又有る可きとも思はれず。若き程は珍齋とて。義政公の茶道なりしが。山名の軍次宗秋とて。宗全の一族に。茶道を好む者ありて。某が彼の道を。心得たるを聞き及び。足利殿より請ひ受けられ。其れより山名の家に仕へ。河内の國方野郡。下鵜の館に移り。覺の字を一字加へ。珍覺齋と改めたる。其名を今も呼び候。吾河内へ趣かざる。遙か前に娘を設け。名をば羽の葉と呼びたるが。彼の國へ移りて後。淺香逸平次と呼びなせる。山名の定來を婿に取り。忘片身は此の悴。淺香逸太郎と名乗せ候。此逸太郎羽の葉か腹に。宿りし年に宗全と。音川勝元と合戦起り。主人軍次も宗全が一族故に勝元が。

人數竊に河内に立越へ。軍次か館を夜討なす。處へ霜月末の方。霰混りに降る村雨。早や目も明かぬ深の暗。敵も味方も亂合ひ。聲を知邊のめつた打。婿逸平次も其場で最後。娘卯の葉は漸々に。館を逃れ出でたれども。是れも敢なく道野邊の。草葉の露と消果てぬ。己れ夫婦は館より。遙か隔てし船越と。言ふ在所に住みたる故。不思議に命助かりしが。永々に物思ひ。せめては憂さを忘れ草。此悴めを守り育て。十の年に婆も果て。残たは此二人のみ。不圖した事にて此沼形へ。抱へられしはまだ近頃。又先に似た此度の騒動。譜代恩顧と言ふにも非らず。殊更にまだ大人とは。言ひ難き此逸太郎。討死さするも餘りに無益。又二ツには茶道の傳授。失ふも口惜さ。落ちよと言ふても若し道にて。捕へられなば耻辱ぞと。動ぬに持飽ぐみ。偕てこそ召連れ参りしなり。某とても武道を言ひ立て。奉公せしにはあらね共。三日なりとも祿を飲んだ。申譯の明日の討死。孫か御世話に預るとて。其時は容捨は致さぬ。炭取帛紗に茶笠の指物。目當に何様ぞ勝敗あれ。年寄と侮て。後悔あるなど悪れぬ。氣色を左門殆ど感じ。「誰彼と言はんより。吾家來の此逸太郎と。明日花々しき勝敗を見んとは。言へ今迄養育受けた。爺をば流石に打得まじ。其れよ々々逸太郎。珍覺齋を組み込めて。繩打て引來たれと。言はれてはつとは答へながら。また初々しき孫の顔。左も嬉しげに珍覺齋。打眺め／＼。「見事吾が組留るか。覺束ない／＼。却て己にたゞき伏せられ。泣面をかわくなよ。イヤ泣と言へば先きには。

顔色が悪かつた。又例の虫氣で有ろう。合藥が此印籠に。明日又見參〜と。一禮述べて歸りけり。「果して次の日沼形は。愈寄手に戰敗け。今は此城保ち難く。上を下へと亂れ立ち。自殺するあり討たるあり。落つるは多く踏み留りて。戰ふ者はいと少なし。逸太郎は胃を被ず。綾を摺んで頭巻占め。緑の黒髪振り亂し。蕭黃句の小具足計り。其身輕げに打扮て。堀邊近く進み寄るを。城兵はきつと見遣り。「昨夕迄も城に居た。あの童めは何として。寄手の内に加はりし。間をくもり降參か。又は案内探らん爲。兼て敵より入れ置きく。間者にてありけんか。何方にしても憎くい奴。討て捨んと左右より。二人一度に切り掛るを。逸太郎事もせず。彼方を拂ひ此方を難立て。抜つ潜りつ切り結ぶを。遠目に見附し珍覺齋。一文字に走せ來たり。若し逸太郎の危くば。助太刀せんと目を配る。小腕ながらも手練の早業。逸太郎は踏込み〜。遂に難なく城兵兩人の。首打落し立つたりけり。珍覺齋はた〜喜び「天晴なる若武者なるかな。いざ參らんと二打三打。槍投げ捨て、組んだりける。珍覺齋四方を見廻し。「幸ひ敵も味方も居らず。此の間に早く吾を擲めよ。其れでは此がまだ締らぬ。遠慮せずと確と擲り。其の首を三ツとも。己れか腰に結付けよ。重ふて其方には持てまいと。擲むる孫より生捕るゝ。爺が一人氣を揉んで。漸く繩をぞ掛けられける。逸太郎は左衛門に。嘆きて祖父を助けんと。急ぎ陣所へ立歸り。先づ彼の首を實檢に。具へて御前に控へければ。左衛門悦喜甚しく。「其れ爺が

繩早く解けの仰に。はつと逸太郎。立寄るを珍覺齋。暫しと止め顔を揚げ。「某は此儘に。御成敗成れずば。申合せの様聞へ。逸太郎か初陣に。敵を擲め取たりとの。手柄にはなりますまい。早や〜命を召されよかしと。言へば左衛門莞爾と打笑み。「孫を可愛と思ひなば。諸共に我に仕へよ。汝を此處にて成敗せば。逸太郎にはとりも直さず。此左衛門は祖父の仇。奉公も何とやらん。心善からず思ふ可し。初陣に二ツ迄。首を得たるは上なき手柄いで乗取りし城に移り。足利殿に注進に。及ぶ可しとて立給へば。兩人は有難涙に暮れ只だ伏し拜み居たりけり。「斯くて後に逸太郎は。左衛門の小性となり。十七歳にもなりしかば。元服を願ひけれど。寵愛厚くて許し給はず。十九歳の春前髪を。拂ひて逸の進と改め。次の年當館の。奥方に勤めたる。朝霜と云ふ腰元を。妻に下し給りて。虎次郎と言ふ男子を設け。次第〜に立身し。左衛門没して大江の助。家を繼ぎし其の初。家長役とはなつたるなり。珍覺齋は八十餘歳。病む事もなくて失せ。何不足もなかりしか。満れば缺くるとやらんにて。妻朝霜は年もまだ。いと若くて世を去りぬ。繼母の手に虎次郎を。掛くるも薄情く思ひやしけん。其れより四五年過ぎぬれど。また寡にて居たりけり。熱藥を取り。以て熱病を治せんと言し。逸之進が心の配劑。顯を表はし。大江之助が病根たる大酒の。沈醉漸々薄らぎ。小菊に心の移りし故か。今迄寵愛深か〜りし。蜘蛛をさへ側を遠さけ。館に置くも五月蠅くてや。城よりは西の方。千草川の流を隔

て。若繩と云ふ所の。下館へ追ひ遣りぬ。今迄は月に付け。花に付けつゝ舞ひ歌はせ。形を撰
びし腰元に。護愛かれしに引代へて。此は漸々三五人の。男女あるのみ其さへも。或は子供或
は老人。話の伽になるだになし。蜘蛛は悔しさ悲しさ。思ひ詫つゝ日を經りて。秋も末とぞなり
にける。淋しき餘り夕暮の空を眺めて太息付き。此へ思はず移されしは。花を見捨て雁金の。
歸る頃にて其雁は。又來る秋となりたれど。誰か玉章の音づれさへ。絶へて床夜の獨り寝は。
泣き明すよりせん方なき。此身は何んとなる事ぞ。我は顔にて咲き出し。菊を見るだに浮惜し
ど。谷なき花迄打怨み。一人呟く表より。入り來りたる川行伴作。「心濟まざる御顔貌。きな
／＼安じ給ひぞよ。今に榮耀の又仕勝ち。持たせ來たりし酒肴。さア一獻聞し召し。浮立ち給
へど耳に口。「な。日が暮れると御出の筈と。打囁けば蜘蛛も。顔色直し片頬に笑み。「其れなら音
訪ある迄は。其門さしてと伴作が。持參のさへ取廣げ。獻いつ獻されつする内に。幽に響く
初夜の鐘。ほろ酔氣嫌蜘蛛は。先きの愚口に引變る。三味線取て爪弾に。投節歌ふて居る折か
ら。忍びやかに栗門。ほど／＼叩くを伴作聞き付け。「其れ彼の方の御來臨。ハイ／＼只今開け
ますと。言ひつゝ立出で戸の隙より。表の方を差覗き。色を變て立歸り。「違ふた／＼なせまア
此へ。うせ居たらう。合點の行かぬ。何んでも逢ふては六ヶ敷。何處ぞへ隠れて様子を伺ひ。
あれ又外戸を叩き居る。滅多に開けまい／＼ぞ。家根に昇る梯子はなし。縁下は底ふて行かず。

ヲ、押入は夜具で一杯。袋戸棚へ頭計り。入れても尻か治まらず。イヤあつた／＼と次の間の。
明き長持を漸々。見付。内へ飛込みそつくりと。蓋してほつと息を付き。後生大事と屈み居る。
蜘蛛は可笑がり。「何か其程恐ろしからう。鬼か蛇かどれ見て來ふかど。庭へ下り立ち枝折戸を。
開けば淺香逸之進。一人の供は表に残し。ずつと通れば蜘蛛も。思ひ掛なく轟く胸。上部は左あ
らぬ風情して。三味線取り上げしどけなき。小歌唱ふて居たりけり。逸之進近く寄り。「是は悪
い亭主振。何んで來たどか善く來たどか。一通り言葉を掛け。其から三味線弾かれても。夜長
の時分遅くもあるまい。然し何んぞ某に。「怨は様々小菊めに。讒言させて斯いふ身に。したの
は誰か行爲ぞや。「此逸之進が皆計らひ。其れと言ふも始めて見た。其の時よりして執心故。例
へ何程思ふても。殿の寵愛深き中は。所せん此戀適はじと。如何にも小菊に知恵を添へ。飽く
迄悪ふ言はせたま。此様に差し向ひ。思ひを述べん爲なれば。必らず憎み給ふなど。有合ふ盃
取り上げて。打解顔に寄り添へば。蜘蛛は呆れ果て。「家來の身として我君の。御側近く仕へし者
にと。言ひ掛るを押留め。「死んだ女房朝霜は。今の主人の母上の。御腰元を勤た女。氣に入た
故拜領した。旦那の物を家來か貰ふを。遠慮しては知行も差上げ。食はず着ずに果ては乞見。
宿なしになるより外に。仕様はないと言ふ者ぢや。此逸之進まだ寡。一人の倅虎次郎は。身寄
に預けて一本立。覺悟極めて言ひ出す上は。得心なくとも連れ退て。三日なりとも女房にする。

是れ此如く洞卷に。貯も持てる程。用意したれば不自由は。させぬと取る手を蜘蛛は拂ひ退け。「例へ寵愛冷めたりとて。まだ御暇を給はりしと。言ふでもない身に不義言ひ掛け。殊には金を見せびらかし。慾に引かれて靡くかど。積られたか猶悔しい。幾日迄も縁言を獨りで言は言ふて居や。もうく聞かぬと兩袖に。耳を閉いで行く處を。抜く手も見せず逸之進。踏ん込んで拜み打。「蜘蛛あつと一聲叫び。深手に弱りよろくど。倒れ掛りし小箆筒に。取付く其の手を拂ひ切り。うんどのた打苦しむ髻を。かい搦むで首かき落し。今の騒ぎに火燈を。打かへして火の消へければ。軒の燈籠取り卸し。心静に四方を見やり。切り落せし手の彼の箆筒を。押へて其儘放さねば。心に掛る大事の品。若此内にと鍵ごち放し。何やら知らず帛紗に包みし。一品取上げ打驚き。彼か思殘せしは。確に是と懷中し。猶傍の小葛籠文箱。打開けく入り用の。反古共ならん撰り出し。縁に立出で岩木くど。呼べば最前供人に裝扮來りし陳平が。あつと答へて入來る。逸之進は蜘蛛の。首を引寄せ。「幸ひく。手水鉢の其の水をと。陳平に注かせて。首級の血しほを洗ひ清め。程善き程の手箱に入れ。帛紗に包んで側に置き。今撰り出せし文箱を。一つに集め岩木に渡し。「和殿は急ぎ是を以て。御館へ立歸り。小菊に渡して斯様く。吾行先は斯うくど。何にか細かに稍久しく。言ひ合めて歸し遣り。獨り残りて鬢かきあげ。塵打拂ひ形を正しく。首を収めし手箱を引提げ。庭へ下り立ち空打眺め。「思ひの外に夜や更けく。

ん。早や月代に東は白む。はて面白き虫の聲く。誰待つ虫のりんくど。謠ひ歌にて飄然と。何地へやらん出で行きけり。偕て初めに記し。如く。此館には言ひ甲斐なき。物共僅かにあるのみなれば。此騒動も聞き付ながら。出合ふ人はなかりしなり。暫くあつて長持の。内より出づる川行伴作。顔は青菜身軀は莨菪。慄ひく庭に下り立ち。表の方へ逃げ出る折から。供をも伴れず忍びやかに入り來る。青淵帶左衛門。其と見るより伴作は。地獄で佛人心地。少しはついで大聲揚げ。「遅かりし。逸之進の横道物。蜘蛛殿に心を掛け。「此へ忍んで様々に。口説けどいつかな承引されず。無念にや思ひけん。只だ一打に蜘蛛殿。敢ない最後を遂げられしと。聞て青淵仰天し。「其りや淺香奴が此へ來て。ふうと言ひさま驅け上り。彼の小箆筒を打かへし。「無いく彼奴めが。去ては奪ふて歸りしかど。顔色變れば伴作匍ひ寄り。「如何にもく手水鉢でごしく洗ふて手箱へ入れ。提げて行くのを恐い者。見たしで覗いて居りましたと。言ふに青淵眉に皺。「手箱へ入れしは左もあらんが。水で洗ふて行きしとは。何とも合點が行き憎い。御手前其は何んの事。「蜘蛛のお首の事。「エイ首は失ても頼着せぬ。彼の一品を取られていと。思案に暮るゝ帶左衛門が。顔を伴作差覗き。「首より大事と言はるゝが。又拙者には合點參らぬ。まだ其の上にも不審がある。蜘蛛殿は元貴殿の。通はれたる遊女にて。系しいと思へばこそ。多くの金を出しての身受。其を伴作推舉して。殿へ上げよと言はれしだに。善く惜しくもない事

ど。思ふたれども譯わけかあらふと。其時は心に收めて問ひもせず。其をむざ／＼逸之進に。殺されしと聞かれなば。取附とりつき嘆なげくが世の人情。然るに死屍は見向もせず。何にか屈托して居らる。御所存ごしょぜんが如何にも分らぬ。拙者に持つて來た酒を。禮も言はずに逸之進に。飲のまれたすら悔くしいと。諄々言へば青淵打笑み。「大望を抱へし身が。何んぞ小事に關わらん。殊に此奴は殿の心を。亂みださんが爲めの困こ。斯く寵愛の冷めし上は。生て居ても頼たみにならず。彼一人の悴小丹次は。偏屈な生れ付。親に向て意見立て。内々の企の。妨げになる鳥濟をこの者。其故先年家出したを。幸ひにして尋ねもせず。生て居るか又死んだか。思ひ出した事もない。まして況んや假初かりそに。枕まくらを取りし女位。何んの不憫と思ひ申さう。只氣に掛るは逸之進。蜘蛛何んと申した。「さア初めには斯様／＼。其から後に斯う／＼と。伴作が物語。詳しく聞て太息を付き。「計り難きは淺香か胸中。當春既に蜘蛛へ。怪しと目を付け御前を。退けんとする彼奴が素振。其故態と蜘蛛か事。悪し様に言ひなして。心を引き見し其の時に。白氏が集しの狐の例。傷持つ足のやらんにて。吾胸に答へしが。此宵の仕義を考ふれば。其も思ひ過すごしにて。淺香は夢にも蜘蛛か素性を知らず實に戀慕し。殿の御前を遠けんと。したるも己れか手に入れん。爲めに有しか其は兎もあれ。假初ながら此處も。殿の館にあんなるに。斯く亂暴狼藉して吾か住居には戻るまじ。旅用迄貯へしと。聞けば此より何處へか。立退いたるに疑なし。夜明けぬ内に追手を掛け。

途中に於て討捕せん。偕ばん作には蜘蛛か。殺害されるを安閑と見物して御座りもせまいが。武術達者の逸之進と。立會ふて怪我をもされず。天晴の御働。定めて彼奴めに手傷でも。負せ召された義で御座ろうと。問はれてはつと行き詰り。「あの其は者で御座る。彼の長持へうつかりと。落ちたら上から蓋がかぶさり。其のはずみに錠が御り。悶ても出られぬ故。「其處へ屈んで御座つたか。「仰の通りと面目なげ首。帯左衛門ずんと立ち。「源次平兵衛は大病人。逸之進は出奔する。大望成就は遠からじと。獨り笑みして居たりけり。「室の津は當國一の大港。田舎めかざるわけ里にて。揚屋も多き其の中に。かいで屋の喜作と言ふは。取り分けて家居も廣く。日日夜々に賑ひて。客の出船と入船の。舵作かじどの仲居が赤前垂。夕日に照りてかいで屋と。呼べる其名も著し。何思ひけん逸之進。此揚屋を差覗き。亭主に遇はんと言ひ入る。供は連れぬと自然の人品。見て取る喜作飛で出で。「先づ／＼彼れへと手を付けば。逸之進打通り。「物はさりと云ふか善い。生付て己は野暮。此へ遊びに一度も來ぬ。所か少し譯あつて。里の様子も見て置き度。聞及んだ此の家。態々と尋ねて來た。先づ近付の印しにと。小判四五兩投出し。「偕て遊んで見る位なら。二三日で歸へるも本意なし。緩る／＼と居る積り。邪間ながら先此金を。預て置て呉れど。何程あるか包みの儘。重けにずつしり差し出され。喜作にこ／＼打笑ひ。偕てこそ昨夜神棚へ。たどん程の丁字頭。イヤ邪間ながらとは勿躰無。イヤ野暮ぢやとは勿躰無。

勿躰無といふげん菩薩。太夫の勤をなされた時でも。斯いふ粹な御客はあるまい。其れ廣坐敷を掃除して。きり火で蠟燭燈して來いと。土で庭掃く十全で味噌擦る。花車のおたのも諸共。御茶よ御酒よと持て囃し。偕て御望の太夫はと。恐るゝ伺へば。逸之進迷惑顔。「さう慰慰にせられては。氣が詰て可笑ない。ずつと近寄て呉れ。如何にも太夫に望かある。年増でも新造でも。器量の善悪其れは撰まぬ。只だ魂か男の様で。物に動せず口固め。した事を外へ漏らさず頼母しい女郎かあらば。世話して呉れと言ひければ。喜作は小首傾けて。「おたの誰か善かろうな。モシ三笠さんはどうぢやろう。「チ、其れ」。御座ります。空蟬屋の三笠太夫。仇名を奴三笠と申す其の譯は。古東の風呂屋の女に。男の眞似をしたのが有て。奴勝山と言ふたどの。話を三笠か承り。私もそんな姿かしたいと。親方の許を受け。月に一度の寺詣り。其時は六法出立。深編笠に巻羽織大小しやんと。門差し氣性者なり。利發なり。其上に烈女傳に。載せたい程な物語り。先づ此里へ身を賣りし。其初めはと言ひ掛かるを。女房おたの袖を引き。「三笠さんの貞節は。皆なも知て賞めて居れど。彼の話を聞く度に。悲ふなつて涙がこぼれる。モシ御座敷が淋しふならふと。留むれば淺香手を拱ぬき。「貞節と言ふからは。定めて夫の爲めの勤。色に溺れて遊ぶ客には。遠慮の話しても有ろうが。氣性を撰び頼みか有つて。來た某には詳しい事を。聞かせて呉れるが却て宜い。何ぢや」と望まれて。去らば御話申さんと。喜

作は扇子を拘に取り。「空蟬屋と申しまするが。遊女屋では一番繁昌。殊に亭主は名代の男氣。其處へ或時やつしき。姿なれども美しい十七八の娘が参り。亭主に遇て申す様。不恙な私なれば。御役には立ちますまいが。段々の難儀な趣。御聞きなされば其上で。百兩程に何卒此身を。御買ひなされて被下と。泣くゝ頼む其有様。憐に見ゆれば空蟬屋。チ、品に寄たら抱へて遣らう。其のまア難儀と言ふ譯はと。問はれて娘は涙を拭ひ。私は稻富から。和泉へ越へる坂の上へ。茶店を出して幽な世過ぎ。身寄は叔母が只た一人。偕て此春より私が店の。前に僅の敷物敷き。編笠被りて鼓を打ち。往來の人の情を受けて。居らるゝはまた年若の。人柄の善い御浪人。足を傷めて杖に縋り。僅な道の往來さへ。それはゝ苦しそう。袿端れも尋常に。世を育たお人さうな。何云ふ譯で斯く落ぶれ。身寄りもなくて一人住み。さぞ御不自由と。いとほしく。御茶上らんかお煙草はと。段々心安うなり。不躰ながら私の。辨當はまだ手を付けぬ。日永の時分。是れでもと此方から言ふたか彼方からか。幾日もなしに解け合ふて。御前の御宿は十町餘り。私の家か餘程近い。御足の傷いに此宵は此方へと。遂其なりに夫婦となり。伯母も得心彼のち人は。獨り住の事なれば。世帯は仕舞はれ一ツになり。其れからは家へ置き。随分保養はさせ申し。話を聞けばまだ足の。病うなられぬ其前は。此の里をも謠を歌ひ。合力受けて歩かれしが。今は其れも適はぬと。心細なるが病。次第に重りて此頃は。をも湯

も通らぬ程の弱り。所せん快氣は有るまいなれど。思ふ程薬を上げ。心一杯看病を、して見たり。御覽の姿。此の處を聞き分けて。手形なされた其上で。暫しの暇給はれとは。あんまりな我儘ながら。どうぞ夫の臨終迄。付て居りたう御座ります。其の代りには年期を切らず。年か経けたら仲居になど。やり手になどなりませう。万一快氣されたなら。事譯言ふて直ぐに参り。何道御損は掛けますまい。旦那様。御慈悲々々々と手を合され。空蟬屋ほろりと泣き。成程去年どう迄はまだ廿にも。成るや成らずの男の浪人者。鼓を打て外戸へも来られ。何にか噂の子供等は。そりや彼の人かと編笠の内を。覗てそはくした。事か有つたか其後は。何故見えぬかと思ふて居たに。其はく氣の毒千萬。證文してから一晚も。暇遣る法はなけれども。心得ましたと男氣の。空蟬屋故承知して。善く聞き正し彼娘か。望の通りの取り極め。果して十日計り有つて。彼の病人は果なくなり。初七日か濟むと其儘。空蟬屋へ娘は来て。御蔭にて十分に。薬も飲ませ慕も近々。建てる積りで金を渡し。是はもう入りませんと。彼の百兩の餘りを幾金か。其の高は聞きませぬが。返したと申す事。空蟬屋は例の氣性。其の正直を感心し。其を又餘計にし。金は直ぐに伯母に遣り。借て突き出しにした處が。草紙子や芝居では。世になき夫に道立て。帯紐解かぬなど言へど。彼の赤子は其に引代へ。何不足なく夫の看病。したのも此の旦那の御蔭。勤に精を入るのが。其の恩送りと御客を大事に。する程に流行る程に。

空蟬屋も殊なう喜び。働で呉れる賞美にと。彼の人の命日には。毎月暇を遣ります。其時には例の六法。男出立で慕詣り。其故奴三笠と云ふては。知らぬ者は御座りませぬ。此頃も空蟬屋が。私に申すには。彼の三笠はまだ漸々。三四年の勤なれど。大分金を贏けさせて呉れた。身受の客があるならば。世話して遣て呉れ。彼れか樂になる事なら。己も慾をさらりと離れ。相談せうとの頼み故。御手輕に参りませう。なんなら直ぐに御歸へりに。御連れなされと饒舌りけり。逸之進ほどく感じ。如何様悲ふなつて来た。其かよい。一寸も早う呼びに遣りや。畏まつたど喜作はつツたち。時に旦那彼方の御名は。チ、何かなしに勝見と云ふ。變名にでもして置かう。あつと合點お金のかの字に。いびつなりのつの字に。味入りのみの字とは。覺能くて芽出度御名。其れ男共。惠比須棚へお神酒を上げる。其徳利では少さいは。菰被りの儘かよい。ナニ其では棚が落ちます。落ちるとは縁喜か善ひ。何方から口か掛ても。此方へ落札三笠様を。掴むで来うと驅け出し。暫らくあつて藝子引連れ。喜作は外戸より聲高く。宜ひ首尾く三笠様も。あれく那處へ御前方は。座敷へ早やうと藝子を並べ。弾きつ歌ひつする程に。三笠はかむろ引連れて。其儘座敷へ打通り。古も今も挨拶を。せぬか遊女の作法にて。につこり笑ふてつる居たり。御引合せと盃臺。喜作は御前に直し置き。今迄二十五菩薩の。音楽計り肝心の。彌陀の來光ないさかい。なアもし旦那と伺へば。花か降らぬと言ふ事か。預

けたので善い様に。「其處らはぬからぬコレおたの。是れ〜持て来たか善い。イヤ其の音楽て思ひ出した。イヤ又太夫様の藝の品々。琴はどしかけが娘も跣足。琵琶は蟬丸其方退け。鼓は忠信。太鼓はあ七。あ七と言へば狂言も。えらい者で御座ります。三月節句にまさごちと言ふ。傾世の盜賊が。貴女の御役で黒衣に大小。がん燈提燈振り上げて。だんまりが大評判。モシ太夫様。彼の時の御衣裳は御座りますぬ。私處でもう一度。成さつて御見せなされませと。言はれて少し面はゆげに。「あれ御馴みもない御方に。そんな事をと。ついで立。「御召代へならお葛藤は。その次へ置きました。旦那は少し御寐ぶさう。御床を取て上げたが善いと。立騒げば逸の進。「偕て色々な我儘を言ふ様なれど。寐處にも。又一ツ望みかある。急用有て宿元から。用事で人か来ようも知れぬ。足を洗と暇か取れる。路地から直ぐに庭へ通し。其儘で話の出来る。處にしたいと言ひければ。花車のおたのが差出て。「そんなら彼そこの茶所が宜い。太夫さんの茶を遊ばす。御慰にもなりませう。さア御出遊せと。連れ行く後から喜作は彼の。手箱を引揚げ首を傾け。「御持參の此一品。是も又重いわと。貫目引いて片頬に笑み。「チ、其は大事の品。枕元へ置いて皆。寝め〜と暇遣りし。後は初會の次穂なく。ちとお寝みと言ふ三笠の顔。つれ〜と打守り。「我と吾が身を苦界へ沈め。夫の艱苦死後の葬。其貞節か慕はしさ。態々と尋ねて来たど。喜作が話しに今聞きしとは。言けずして其の心を。先づ引き見るを此方は知ら

ず。はつと驚き顔打赤め。「耻かしい身の上を。誰かは傳へ參らせけん。御耳に入りしは是非もなし。人に語りて給はるなど。差俯頂けば。「何に其が。愧かしい事が有らう。夜毎枕は交る共。心の誠か變らねば。取りも直さず其か貞女。其方さへ得心なら。明日にも直ぐに身受して。心置なく夫の菩提を。弔はせても遣りたい所存。偕て斯う言へば恩を掛け。口固めをする様に。聞へて腹の立つかは知らねど。其の代りに又頼みがある。今見する此箱の中に。何があらうと驚かず人に語て呉れやんなど。差出せば三笠は居直り。「何か知らねどおきらひの。私風情へ御頼み。未來の夫を無限へ沈め。「イヤ誓言には及ばぬ。先此内をと三笠か膝の。邊りへ近く突き遣る。箱の紐を解く〜不審ながら。蓋取り退くれば女の切首。並々の物ならば。玉消へ聲立て飛び退かんを。三笠はじつと押静め。「此首は何者の。「其を御身に問ひに來た。朋ばい笹野權三と云ふもの。名は知らねども彼方より。物言ひ掛けし此里の。遊女に似たりと言ひしかど。其も年月経ちたれば。確な證據とするに足らず。去れば主人に斯う〜と。押晴れては言上げ難し。其實否を確に知り。又勤めして居た時の。名も聞き度故に其方へ頼みと。小聲で言へば小聲で答へ。「其は御安い御用なれど。餘り之れは心持の。善ひ者で御坐んせぬと。燈火近付け。「知て居る段かいな。是は然も私の朋輩。濱夢と云ふ太夫。「ソウして彼か行ひは。「さア悪ふ言ふと賣敗た。嫉みの様に聞こゆれど。其は〜悪性者。甘を越して此の勤。其前は色々な。亭

主を持ち變へ町人には。身上仕舞はせ分産させ。武士は扶持に離るゝ程な。難義を掛け事も度々。其知て居るそめきの者か。彼は九ツ尾があらう。殺生石より輕石に。成つて厚い面の皮。擦れば善ひのと仇口を。言はれても何んとも言はず。其なら此方から看板を。打て置こうと提燈に。狐の面を紋に付け。かむろの名も那須野。玉藻。そんな悪戯者なれど。花田さんどて年はもう。四十餘の御侍士。馴んで程なく遂身受け。あんな女を物好き。人もあれば有る者と。親方さん迄後から噂。私等がかむろの様に。攻め遣はれて苛虐られた其時は悪くかつたが。變り果てた。此顔を今では今更愛憐い。南無阿彌陀佛も口の内。逸之進はくく。領き。花田の帶は即ち青色。彼か變名に極まつた。殿の御側へ危き事と。一息附て氣を取り直し。御大將の實檢が。濟んで仕舞へば用なき首。そんなら私に下さんせ。善しんば仲が悪ふても。同じ家で暮した人。竊と寺へ葬て。善く氣か付た其は奇特。何處其迄置く處か。アイ此處が善ふ御座んせうと。家より持て來し。夜具葛藤の。底へ手箱を押隠す。折から風に誘はれて。寝よどの鐘ぞ聞へける。お三さんく古の名を。呼ばれて三笠目を覺し。誰さんぢや起したは。誰ぢやと暗き燈火を。かき立て打見れば。此世を去りし夫なり。喃可懷やと縫り寄り。雨やさめやと打泣きつゝ。暫く有て心付き。顔を見せて下さんすは。嬉しいけれども又其が。私は悲しう御座んする。忙しい勤の其の内に。年期月期の訪吊ひ。人に隠して朝夕に。看經するが届かぬか。何

に心か引かされて。御前は迷ふて又娑婆へ。戻ては御座んしたと。口説立れば男も泣き。死んでの後野に捨てられ。犬の餌食となる可き身を。思ひ掛なや病氣の中も。心を付けての介抱に。何不足なく終りを遂げ。一ツの塚の主人となりしは。言はずと知れし御身の情。殊更朝夕怠らぬ。念佛の功力に涼しき國へ。とく生る可き身の觸りと。なるは悲しや吾家の。絶へ果てん事。近きにあり。又訪ひ來りて見へし所謂は。御身最前か濱菱が。首を見るより慈悲心起り。且つ某か菩提にもと。貰ひ受けて明日は吾が。墓と並べて葬らん心。あれども故ありて。吾濱菱に怨あれば。其事思ひ止まり給へ。骸は既に千草川へ。沈めて魚の餌食となり。頭は猪伏山に投捨て。飢たる鳥の腹を肥すが。せめてもの腹愈せなりと。何時の間に取り出しけん。濱菱か首兩手に握り。顔つくくく。と打守り。薪木に油を注ぐが如く。悪に愈々悪を増す。此奴か佞辨憎む可し。と。頓て髻をかひ握み。遙かに高く投げ打てば。一塊の鬼火となり。何處ともなく飛失せにけり。不思議と見上ぐる三笠の顔。涙と共に打眺め。幸ひ却て禍と。なり行くも皆前世の強因。とは言へ神に佛に祈り。身を慎しまば自から。免るゝ事もあらんずらん。御身に譲りし刀はど。言ひ掛くる折。太夫さん。お呻されなさります。怪しからぬ高聲。もうしくくと大勢に。呼び立てられて三笠は漸々。目は覺むれども茫然と。耳に残りし夫の聲。殊に何か氣掛りな。今の話を聞き果てぬが。口惜しけれど詮方なく。心に泣いて表に笑ひ。まア夢

と言ふ者は。他愛もないと言紛らし。人のなき間に葛藤の底の。手箱取り出し蓋取りて。見れば不思議や濱菱の。首級は失せてなかりしとぞ。「此かいで屋の物語は。事長ければ暫く置き。此年の春の。事を是より記す可し。」小菊は逸之進に連れられて。初めて館に出でたりしが。大江之助の心に適ひ。直ぐに其儘留められ。假の部屋を給はりて。先づ其に休みたる。夜中計りに側仕への。者と覺しく年老いたる。女一人入來り。「さて、御身は御仕合せ。先きの舞か御意に適ひ。是へ連れて參れと御仰せ。さア急で御前へと。事馴れ顔に傳へければ。小菊ははつと手をもつかへず。「生付て私は下戸。酒の香のする人の。側へ寄るのも嫌ひなり。殿様ぢやとて彼の様に。召上ては七里潔敗。御酒か酔めたら兎も角も。此宵は御免と言ひ放し。更に動かん氣色なし。彼の女呆れ果て。立戻て恐る。大江の助の前に出で。定めて例の疝癩にて。斯くと言ひなば側杖に。吾も打たれん悲しやと。口籠る程何うぢや」と。急り立てられて詮方なく。小菊か答へを斯うくと。明ら様に言ひければ。思ひの外に氣嫌能く「どの女でも己が言ふ。儘になる故可笑からず。珍しい小菊か挨拶。昨日は父の御命日。精進酒は好ふない。一日禁酒してから呼ぼう。そう云ひ置けと其夜は打伏し。皆て昨日の夜に人静まり。伏床近く小菊を呼び付け。「さア今日はしらふぢやぞや。否や應は言はさぬと。寄り添ひ給へば平伏し。「其の御しらふの時を伺ひ。言上致せと逸之進が。申付けたる口移し。先一通り聞こし召せ。

蜘蛛は帶左衛門が。元語らひし女に侍る。其印しは遠からず。取りて御目に掛く可きなり。彼の女は索性賤しく。中々以て御身近く。差し置かる可き者ならずと。申すもの、侍れば。猶其事は詳しく尋ね。追々に申し上げん片時も早く蜘蛛には。先御前を遠避け給へ。若し御承引遊ずば。逸之進か申し聞けし。計ひ方の侍べると。左に懷劍右の手を。膝に突き立て詰り寄する。大江之助打領き。「逸之進が其事を。言ふ」と思ふても。己れは何時でも酒びたし。其故味などこから諫言。コレ何んば恐い顔をしても。生付た笑回は匿れぬ。宜い古物と。新物。代へるは何方も勝手なれば。蜘蛛は追ひ出さう。其れで言ひ分あるまいな。なければ寐ようぢやあるまいか。「いやまだ外に御家の大事。君近頃訴を聞こし召さず。まづ刀鍛冶犬宗と申す。名を御覺へ。「チ、知て居る」。藤原の犬宗は。城下に住んで老母に孝行。逸之進が能く聞き正し。吾に先年告げたる故。賞美を取らせし事のあり。其の時に犬の字を。名乗る付きしは珍しと。誰やらに問ひしかば。彼は可笑き男にて。あひにて悪きを犬と言ふ。吾が打つ刀は犬政宗と。言ふ程には切れ可しとて。政を除きて斯く呼べりと。自から慢じて居る由語れり。其が何んど致したと。問ふに小菊は猶ほ擽り寄り。「仔細あつて其の者を。青淵の屋敷に留め置き。歸へさざる由老母の訴へ。帶左衛門に御仰られ。犬宗を召し呼ばれ。事の様子を聞こし召さば。青淵か兼ての企。自から明白たる可し。吾々の身が帶左衛門を。悪し様に申す時は。嫉み憎みの様

に聞へ。御疑ひも候可し。其故御直きにいぬけ犬宗へ。御尋ね願ひ侍べると。額を疊に擦つくる。大江の助打領つちうりき。「其も宜いは犬宗を。明日呼んで聞て見よう。其方も後に付て居や。偕て逸之進の名代なしろだけ。女子に似合ぬ堅い言葉が。時々混て聞き悪くい。切り口上は其れ限りく。眠ぶう成たど打くつろぐ。小菊こぎくも少し解顔に。御退屈なら此後は。明日の晩に致しませう。今日は大事の御精進ごしやうじん。御慎みに侍る可し。御機嫌ごきげん宜うとにつこりと。笑てついと立て行く。

播磨の巻前編終

郡鄂諸國物語

播磨の巻 中編

鎗やりの權三ごんざの名は、昔むかしの曲子うたに見えたれど、何づれの時代じだい、何づれの國くにの人ひとなるを知らず、門左衛門もんざゑもんが著あらばし、淨瑠璃じやうるり重帷かさね子こは、かの古ふるき人名じんめいを假借かりりて、雲州うんしゅうの街説かひせつを作りたるなり、是これに髣髴ふふせつたる話はなし、因州いんしゅう丹州たんしゅうにも又またあり、それ等の事ことを綴つづりし册子さしの、予よが眼めにふれたる標題たうだいは、下編げへんの巻首まきびに録ろくす、そのなかに記あひたる、堀江ほりえ川波かはなみ鼓つづみは、おなじ門左衛門もんざゑもんの作さくにて、因幡いんぱんの巷談かうたんとおもはる、さてこの諸國しよこく物語ものがたりは、原來もとよりの空くう

説なれば、私に播磨の事となし、おさるが權三に、茶道の傳受の一段のみは、重帷子をその儘にて、おさるが自害は、波鼓をよりどころとす、その他は悉新に趣向をまうけしにて、露ばかりも實の事はあらず、

天保辛丑正月

柳亭種彦記

邯鄂諸國物語

柳亭種彦

播磨の巻中編

弱能く剛を制するとして。弱きは却て強きを防ぐ。例へば征矢の鋭きも。ひらめく幕をば射通し難く。鳴る雷の落たるも。蚊帳の薄きに止まると言ふ。去れば小菊が戯れの様に。様々諫しにて。大江の助が酒の酔。醒むれば元の賢き智に。反りて今迄行ひの。猥りなりし身の非を知り。其次の朝。彼の青洲帯左衛門に。刀鍛冶犬宗を。召連れて出仕す可しと。言ひ遣りければ病氣と言立て。犬宗のみ出したりと。其使歸りて。言上げたりければ。控へさせて置く可しと大江の助は先づ。書院に立出て。一の家長岩木源次兵衛を呼び。吾が側らに侍へらせ。家臣の願頼みの訴へ。今迄久しく捨て置きし。訴訟などを一々聞き。其は斯う是は斯くと。萬端裁許明白なるに。争論に及びし者迄。一々に屈服し。勝ちたる者は深く喜び。敗けたる者さへ道理にせまり。怨むる者なく引き退ぞき。晝頃より。七ツ下りに。皆な取濟して岩木に向ひ。刀鍛冶犬宗は。何やらん某へ。直きに願ひの有る由言へり。然かれば彼をば小座敷の。庭へ呼入